
魔王様と16人のヨメ物語 ~ 覚醒モード ~

五朗八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様と16人のヨメ物語 〈覚醒モード〉

【Nコード】

N2867Y

【作者名】

五朗八

【あらすじ】

土緒夏とおなつは普通の高校2年生男子。クラスメートからドーナツ（どおなつ）と読めるから）と呼ばれている。別にドーナツが好きなのではない。健全な男子高校生らしく、同級生の立松りっしょう寺華子じかこが好き。でも、魔界の魔王転生の騒動に巻き込まれてしまれ、あるところか魔王の正室として転生してしまい、女夏の中に男の意識がかかるうじて残るといふ状態に…

女夏がめでたく魔王様とラブラブになれば、男の夏も復活できると聞いて魔王探しに奔走する。候補は幼馴染の生徒会長と熱血男、

クールな先輩、可愛い後輩。期限までに任務遂行しなければならぬのに、魔界の内紛に巻き込まれ、命は狙われるわ、天界の邪魔は入るわ、魔界と天界を巻き込む戦争に巻き込まれる。
果たして夏は男に戻って、彼女とラブラブになれるのか？

はじまりは夢オチ？

序章 プロローグ

赤い衣の女、リイ・アスモデウスは、勝ち誇ったように相手に指を突き出し、2本の牙が少しだけのぞく色っぽい唇を開き言い放った。

「さあ、魔王様、今こそ、そのお力を開放する時です！」

「えっ？」

俺は我に返った。（魔王って誰？それにこのダイナマイトボディのお姉ちゃんは？）

この女がリイ・アスモデウスという名前であることは、なぜか脳裏にある。だが、自分は

ただの男子高校生に過ぎない。そしてこのリイという女が何者かも分からない。

3

「力を開放って？」

「バカか、お前は！」

俺が問い返した瞬間に白い衣の女・・・というか、見てくれは小学生の女の子だが、気品と威厳で力強さを感じるエトランジェ・キリン・マニツサに殴られた。この小さな女も名前は脳裏に浮かぶが、よく分からない。

「土緒君…いや、私の魔王様…。あなたにはすごい力があるのよ。今、それを使うのがあなたの使命よ」

聞きなれた声に振り向くと、後ろには、付き合っている彼女の立松たてまつじか

寺華子がスレンダーな学校の制服姿で立っている。

「た…立松寺」

俺は思わず彼女の両手を握りしめた。彼女のぬくもりが伝わってくる。

(そつだ！これは夢だ！夢に違いない。ならば、夢の中でも立松寺にいいところを見せなきゃいけない。それで立松寺も俺にさらに惚れるに違いない。そうじゃなくても、彼女は俺にぞっこんなんじゃふっふふ…)

「あ〜ん…すきすきすき、大好き土緒君。華子、あなたに全部あげちゃう！」

なんて言う立松寺の姿を脳裏に想像して、俺は正面を振り返った。

(敵とやらを軽くやっつけて、ハッピーエンドの夢)

だが、目の前にいるのは、強大なドラゴン！！高層ビルのでかさのドラゴン！

(えっ？うそ？いくら夢でもこれは違うでしょ？ゲームの夢か何か???)

「ゲームじゃない！本当の闘いだ」

俺の心の声が聞こえたとしか言えないリイの怒鳴り声。だが、俺には彼女の頭の上にHP250、MP120なんて数字が見える。ラジエも立松寺3ケタの数字が浮かんでいる。俺の数字はHP15でMP8…明らかにゲーム夢だ。しかもできそこないのクソゲーだ。

(ゲームもクソゲーなら、俺もクソキャラじゃないか？どこが魔王様なんじゃ？いきなり、ボスキャラ？ストーリーは？ゲームバランスは？俺の職業って魔王??)

ちなみに対する巨大なドラゴン様はHPは3000!!(マジ、死ぬ!)

しかも、そのドラゴン様が大きな口を開けて、炎のブレスを発射しようとしているではないか!(こちらのターン、終わっていないんですけど...)

これは悪い夢に違いない。思わず目を閉じる俺。

「こんな夢才チ嫌じゃあ...」と大声で叫ぶ。

「目を覚ましたかい？ハニー」

俺はベッドに横たわっていた。なぜか男が傍らに寝ている。何だか知っているような雰囲気。だが、光で顔がよく見えない。そいつらが俺の顔を撫で回し、いや顔どころか、胸や足を撫でまわす!!

「ちょ...ちょっと待て!気持ち悪いことするな...」というか、わたしの体に触るな!」

(えっ?わたしって...今、言ったのか?)

自問自答する俺。こんな夢ならさっきのバトルモードの方がずっといい。少なくとも美少女に囲まれた主人公の方がずっとましだ。こんなボーイズラブの典型的なシチュエーションなんてまっぴらごめんだ。だが、顔のよく見えない男は衝撃的なセリフを言いやがった。

「何を言ってるんだい、ハニー。君は魔王たる私のヨメだよ。さあ、

「あ…あん…」

うおおおおおっ！夢から覚めるよ、俺。でないところはピンチだ。

夏と彼女と魔王のヨメ（前書き）

人物紹介

土緒夏^{どおなつ}：主人公　ごく普通の男子高校生。最近彼女ができて、浮か
れていたがファーストキスのせいで大変なことに・・・。

立松寺華子^{たてまつじかこ}：夏の彼女　由緒ある寺の娘で古風な雰囲気のある女子
高中生　見かけによらず物事に動じない性格

土緒秋^{どおあき}：主人公の妹　小学生ながら男子キラー

夏と彼女と魔王のヨメ

俺はごく普通の男子高校生だった。昨日までは・・・。

そう人生最大の幸福を味わった昨日・・・興奮して眠れなかった昨夜。だからか、朝の目覚めはどことなく気だるく、もう一度毛布の中に顔をうずめて意識を失いたい誘惑にかられる。本日のスケジュールを頭に浮かべ、受けたくない数学の授業を消去しつつ、惚れた女の子の顔を思い浮かべて目を開ける。

(そろそろ起きないとやばいか・・・。それにしても・・・)

「ああ！もう一度、昨日に戻りたいぜ！！」

思わず声を上げた。そう昨日は初めての彼女と「初キッス」しかも、絵になるようなシチュエーション・・・どんなのかは、後で語るがごく普通の男子高校生には刺激的なできごとであった。

「立松寺りっしょうじ・・・。」思わず彼女の名前をつぶやく。自分にはもったいないくらい可愛い。いや、真正銘の美少女ではある。それがこれまで手付かずだったのは多分に彼女の普通でない性格があるのだが、夏にとってはそこもまた魅力的なのだ。どんな性格かはそのうち語るとして、そうだ・・・。

(もうキスした仲だから、立松寺などと姓で呼ぶのは変か？)

「か・・・か・・・華子かこちゃん・・・いや、華子。」

(うおおおおっ！華子好きじゃあ〜。)思わず、だき枕を彼女に見立てて抱きしめる。

端から見たらこの妄想行動は気持ち悪い。見てられないが、恋にのぼせた男子高校生はこういうものだろう。これが健全なのだ。だが、

俺は抱き枕に押し当てた自分の体の違和感になにやら冷たい悪寒が走ったのだ。

体を起して、胸の辺りに違和感を感じる。ふにゃとした感覚。視界に写るその二つの双丘。思わずパジャマの胸を開けてまじまじと凝視する。

視界に映るのは2つのふくらみ・プリンとしたお椀型にピンクのサクランボが・

(う・うそだろ！)

エロ本でしか見たことのない女性の生乳が目の前に！思わず両手を顔にあてる。

(俺だろ・土緒夏、17歳、男子高校生。いや、確認すればいい。

)

部屋の一角にある姿見に立つ。180cmはある長身のちょっとたくましい男の子が映るはずの鏡には、ちよつと寝癖ではねているが美しく流れる黒い長い髪で、目がパツチリで黒い瞳が印象的な女の子が映っていた。身長は・縮んでいる・165cmぐらい？おそらく、健全な男子高校生が見たら10人中9人は彼女にしたくなる美少女が映っていた。自分でいうのも何だが、こんな清楚な感じの女子高生はそうそういるものではない。

いや、実際は自分の彼女の立松寺は、こんな感じの美少女であるが胸の大きさは若干、勝った？いや、そんなことを言いたいのではない。実際、立松寺は貧乳の部類に入るほどではないにしても、Bカップがせいっぱいだらう・(Bは貧乳か？)いや、それくらいが自分の好みで・じゅるじゅる・想像しただけでよだが・なに考えてんだ！

今、目の前の自分の持ち物はそれより一回り大きいCカップレベル。

巨乳ではないが、適度なサイズだろう。これまた好み。いやいや、そんなことが言いたいわけでもない。

「ま、まさか、ここも！」

思わず、声を出してパジャマの下をめくる。・サクランボ柄のかわいい布切れの下にあるはずのものがない。・しかも、見たことのない女性のお。・そ。・こ。・。。

どしゃく。・思わず鼻血が噴出した。自分の体を見て鼻血はないだろうと思うが体は頭とは反対の行動をするものだ。慌てて、机の上のティッシュで鼻を押さえる。ここで机、ベッド、壁紙。・そして壁にかかる学校の制服。・すべて異質なことに気づく。

「お、お。・女の子の部屋く！？」

殺風景な男部屋が、正直言うと立松寺が部屋に来たら。・と昨晚考えてキレイに掃除し、好きだったアイドルのポスターをはずし、ベッドの下のエロ本は始末したが。・。目の前にあるのは絵に描いたような女子部屋が広がる。サクランボのカーテン、ピンクの布団、かわいいキャラクターの目覚まし時計。・。思わず手で顔を覆い、指の間から部屋の細々としたものを確認する。その時、がチャと音がしてドアが開いた。

「お姉ちゃん、早くしないと遅刻するよ！」

妹の秋である。自分が女なら妹は弟じゃないといけないう！などと突っ込みはさておいて、この妹は自分の知ってる妹そのものである。相変わらず口うるさく、世話好きでキンキン声が朝から脳天を突き抜ける。

秋は壁にかかった制服を取るとポンと投げてよこした。

「スカート、ちょっと短くしておいたから。大丈夫、校則違反ぎりぎり。真面目なお姉ちゃんもいけ

ど、それじゃ男の子は悩殺できないぞ。ズキューン！」

(ズキューンってなんだ?)

どうやら俺は真面目な女の子らしい。この妹は根はいい奴だが、男をとつかえひつかえするプレイガール気取りのやな奴である。(小学校6年生なのに)まあ、兄(姉?)の自分が言うのもなんだが、見てくれは可愛い。背はちょっと小さいがそれはそれで男心をくすぐるのだろう。だが、性格は腹黒く計算高い奴である。しかも顔に似合わずエロキャラである。

「お姉ちゃんは、清楚な美貌で売ってます！ってキャラだけど、そういうのは古いよ。ちょっと隙がある方がモテ子への道」

(モテ子ってなんだよ。)

「あ・・秋・・あの変じゃないのか？」

思い切って聞いてみた。

「何が」

「いや、その、俺がお姉ちゃんで、女の子というのは？」

「はあ？何、俺って・・お姉ちゃん、ボーイッシュキャラも流行らないよ。さっさと着替える。あっ、

下着、新品のイチゴの奴もらうから・・。」

秋は勝手にクローゼットの引き出しを開けて小さな布キレを持って出る。そこには多分自分の物だろうと思われる色とりどりの下着が鎮座していらっしやる。

「いったい、何だ、これは！」

漫画やアニメ・テレビのドラマでもよくある話である。男が女になってしまう。入れ替わって始まるドタバタ劇。そのストーリーと現在の状況を整理し、分析するといくつか異なる場面がある。

まず、土緒夏という存在は女の子と認識されている。どこかの誰かになってしまったわけではない。それならば、目を開けたら「ここはどこ？」となる。妹も母も父も女の子として違和感なく接している。ということとは、この世界では最初から女の子というわけである。第2に自分の容姿。どことなく男の時の名残りがあ目以外は別人？というような顔である。だが、妹の秋にどことなく似ているからまったたく別人というわけでもなさそうだ。鏡で見ると惚れてしまいそうな美形ではあるが、男時代でもそこそこイケメン（自称）であったから、女になって美人でもおかしくはない。

学校でも夏は女の子と認識されていることが分かった。いつものように電車に乗り2駅離れた高校への道中、だれもが違和感なく女の子の自分を見る。教師達ですらそうだ。数学の山下などは、男の時には絶対見せないたるんだ顔と猫なで声で、

「おおっ、おはよう、夏ちゃん。今日も可愛いねえ」

などと言うものだから、背中にもぞぞつ・・・と寒気が走った。教室に入っても普通に受け入れられている。さらに出席番号16番だったのに36番手塚愛美の後に呼ばれ、完全に女子に組み込まれている。

「立松寺華子さん、ああ、立松寺さんは家の都合で遅刻だそうですね」
担任の国語教師、三輪桃花先生みわももかが聞きなれたアニメ声でそう話した時（本当、この先生、高校教師よりも声優の方が似合っていると常々思う。）、我に返った。

（立松寺・・・遅刻？何かあったのか？）

昨日のデートで一緒にいただけに気になる。というより、立松寺がこの自分の置かれた状況を解決する糸口になるかもしれないと思い始めた。そうだ、男夏に会った最後の人物が立松寺なのだ。考えてみれば、デート後に帰宅したとき、オヤジはいつもの通り遅く、母親は習い事で家にいなく、妹も塾にいつていたので、作り置きしてあった夕飯を食べてシャワーを浴び、そのまま寝てしまったのだ。男夏と最後に会った人物は、立松寺なのである。その立松寺が遅刻である。しかも家の事情で？今までそんなことは一度もなかった・・・。

昨日までは気軽に男夏に声をかけてくれたクラスの女子生徒のはるかとのどかが、2時間目の休み時間に、

「ねえ、ドーナッツちゃん、お手洗い行こう。」と誘ってきた。

（お・・・お手洗い？）

「えっ・・・ちよっと・・・。」

と拒む言葉も与えられず、2人に手を引っ張られて女子トイレへ連れて行かれる。

（お、女って、どうして集団でトイレに行くのだ？）

前から疑問であつたが、その中に入るとそこは女の子パラダイスであつた！

「ねえねえ、昨日のミュージックTV見た〜、京兵くん、かつこよかつたよね」

「あのツグミって歌手、可愛っ子ぶって、今時、流行らなくね？」

「数学の山下って、気に入った娘をわざと指名して、分からないといつと個別指導しに近寄ってくるんだよね。しかもクンクン鼻をならすんだって」

「キモ〜。」

普段は可愛い口調で話している女子生徒が結構、周りを気にせず本音トークしている。普段、気を使って話しているのだからここでは気を抜きたいのだろう。入り口で聞きたくない女子共のよもや話を聞きながら、そんなことを考えていると、

「ねえ・・・ドーナッツちゃん、ナ○キン持ってない？」

奥からはるかが自分に聞いてきた。

「ナ・・・ナプ・・・」

なぜ、トイレで???と一瞬思ったが、かぶせるようなはるかの追加の声で顔が真っ赤になった。

「ちよつと早いのに来そうなんだよね」

何が来るのか、さすがの夏にも理解できた。もじもじしていると、
のどかが

「はい、1つあげるよ」

とポンとポーチから出して投げるのが見えた。コメントのしようがない。

「ドーナッツちゃんは、お手洗いいいの？」

と聞かれたが、恥ずかしくて「いいよ。」と小声で返すのが精一杯であった。

この2人、昨日まで自分のことをドーナッツくん・と呼んで音楽のこととか、好きなタレントのことなどを気軽に話す、女友達・みたいな関係であったが、どうやら現在の設定は3人仲良し組のようだ。ちなみに夏と親しい友人は土緒夏^{とほなつ}で「ドーナッツくんとか、ドーナッツ」と呼ぶ者が多い。女子の中で、

「土緒くん・・・」と呼ぶのは、そう、立松寺華子だけであった・・・。

その立松寺は3時間目の始めにやってきた。英語の最中であったので、ガラガラつとドアを開けた立松寺が真っ先に教室内の夏を見つ、思わず視線を天井に上げた時には、

（ああ・・・何かが起こる！）と確信した。少なくとも他のクラスメイトとは違う反応である。英語教師に1言、2言話してスタスタと教室後方に移動する立松寺は、もう1回も夏を見ず、カタ・・・と席に座る音だけが後方からするだけであった。その冷たい態度が気になり、右後方に座っているはずの立松寺をちらりと見る。
すると・・・立松寺はするどい目でにらんできた。

（お・・・怒っている???ど・・・どうして?俺・・・なんかした?)

あの目は怒っている。もともと感情を露わにするタイプではなく、無表情なキャラの立松寺だが、目を見れば彼女がどうい感情を抱いているか分かる。伊達に惚れているわけでない……。ということ、は、女の子になってしまってもまだ立松寺が好き？というわけか。ちよつと危ない？

3時間目が終わるとはるかやのどか達よりも早く、立松寺が席に近寄ってきた。そして耳元で言った。

「土緒くん、話があるの。付いてきて」

(土緒くん・りつ・立松寺?)

「立松寺さんがドーナッツちゃんを誘うなんて珍しいね」

なんてはるかの声がしたが、颯爽とあるく立松寺の後を急いで付いていく俺。男時代なら歩幅の違いで苦労なかったが、今の自分だと付いていくのが精一杯。スカートは歩きづらい。大またに歩くと妙にスースーする。よって手でスカートを押さえながら歩く。

それが端からみると妙に可愛らしかったために、道すがら男子生徒の視線を釘付けにしてしまった。無数の視線と小声を背中を感じる。

「相変わらず、ドーナッツちゃん可愛いよなあ・・・」

「今日のドーナッツちゃん、スカート短くねえ」

「足、ほそ・・・お人形さんみたいだよな」

「うしよしよ・・・ドーナッツちゃんの太もも」

(き・・・キモ・・・。声、意外と聞こえているぞ。その男子生徒ども。セクハラ発言だぞ。)

そんなことを考えながらも立松寺の背中を見る。立松寺もスタイルはいい。問題は性格で

無表情できつい言動から男子生徒からは「氷の女王」と言われて変

な女のレッテルを貼られている。まあ、軽い気持ちで言い寄って立松寺に一刀の元に切り捨てられた男達の見苦しいグチに尾ひれはひれがついただけである。本当の立松寺は、ツンデレまではいかないが、素直じゃないが可愛いところがたくさんある普通の女の子だ。要するに要領の悪いバカ正直な奴なのである。

その立松寺が向かった先は屋上。ドラマやアニメでは大抵、人がいないというのが定番。

なるほど、ここもだれもいない。4時間目が始まるまでの10分の休み時間だからいるわけがない。風が少し出ている、立松寺と自分のスカートがひらめく。

風で乱れた髪を耳にかけて、立松寺が振り返った。

「土緒くん・・・あなた、私の知ってる土緒くんよね」

「立松寺・・・」

「心は男の子よね・・・今は？」

「えっ、どういうことだよ、立松寺」

「よかった・・・完全に女の子にはなっていないようね」

「どっついうことだよ！」

女夏の甲高い声が空に響いた。

夏と立松寺家（前書き）

どおなつ
土緒夏：主人公 高校2年生17歳 ごく普通の男子高校生なのに

魔王のヨメ騒動に巻き込まれる。

たてまつしかこ
立松寺華子：主人公の彼女 高校2年生 性格はキツイがスレンダー

いな美人。

たてまつじしゅんけい
立松寺春慶：華子の父親。大寺院の住職ながら風俗通いの破戒僧女

好きでどうしようもないが、実は…

リイ・アスモデウス：魔界の伯爵令嬢を名乗るダイナマイトボディ

のお姉さん。乳もでかけりゃ、態度もでかい。

夏と立松寺家

立松寺は俺のことを「土緒くん」と呼んだ。つまり、立松寺だけは俺が男だったときのことを知っているのだ。（よかつた）。と思うのは、周りのあまりに自然な態度で自分は本当は女の子で昨日まで男だったと思い込んでしまっただけ・・・というオチではないことが証明されたのだ。だからといって現状が解決するわけではないが、少なくとも立松寺は、自分に「ごめんなさい。」と謝った。ということ、この状況になった理由を彼女は知っているということになる。

「今は説明する時間はないわ。今日の帰り、一緒に私の家に来て欲しいの。そこで詳しく話すわ。それまで、今、あなたの置かれた状況をできるだけ整理しておいて。男の子の時と置かれた立場が変わっているから。」

帰りまでに自分の置かれた状況とやらを整理してみた。男夏の場合、成績は学校で30番台まあまあ、上位の方。得意な科目は数学と理科、体育。運動神経は抜群である。部活には所属していないが、女友達、男友達とも多く、明るいいい奴というポジションである。

女夏の場合は、成績はなんと6番。（一晩で成績急上昇だ。ちなみに立松寺は2番）数学と理科に加えて英語と国語ができるらしい・・・。というのも、授業の中で英単語の小テストがなぜかスラスラ書けるのだ？運動はあまりできないということになっていたらしく、5時間目の体育で行ったソフトボールでは、ピッチャーがわざとゆるい球を投げてきた。（バットに当てさせてやろうという配慮か？）が、プライドが許さない俺はジャストミートでライト場外へボールを運んでやった。周りがあ然とする中、立松寺だけはグローブを顔

に当てて天を仰いでいた。(立松寺はライトを守っていた。)

さらに驚いたことに女夏は、生徒会役員の書記をやっているらしく、放課後に顧問の先生から明日の会議のレジューメ作りを命じられた。つまり、学校での女夏のポジションは、勉強ができて真面目、でも性格はおとなしい系でちょっと運動音痴、すらっとした足に小さめのお尻、ちょっとだけ目立つ胸にさらっとした長い髪をリボンで縛る典型的なお嬢様キャラなのだ。おまけに生徒会役員ときたもんだ。

(委員長でないだけマシか?)

「土緒くん・・・」

キリリ・・・とした声で立松寺が話しかけてきた。彼女の家へ向かう電車の中でだ。走る騒音で語尾が聞き取れず、思わず顔を近づけた。男の時は160cmある立松寺よりずいぶん背が高く、立松寺の顔は自分の胸ぐらい・・・という感覚だったが、今はちょっとだけ、高いただけだから、唇が触れるぐらいの急接近になってしまった。思わず、立松寺の顔が赤くなる・・・

(うあああ・・・可愛い・・・可愛すぎる・・・)

他の乗客は美少女二人が顔を接近させて話している光景に目が釘づけになる。それを気にしてか立松寺は声をより小さくする。

「土緒くん・・・私が自分の立場をよく確認しておくように・・・言っただことわすれていないでしょうね」

「ああ・・・」

「あなたは成績優秀でおとなしいお嬢様なの。今日のソフトボール、なんなの・・・あなたのキャラなら、きゃあ〜夏には無理〜とかなん

とか言つて空振りしなきゃ。それになに？オタク男子の話題に急に割り込まないで」

オタク・・・という下りは昼休みにギャルゲー大好き男子グループの会話に思わず、突っ込みを入れてしまったのだ。

「いや、あれは紀夫と雄二のやつが、ヤンデレキャラとツンデレキャラどちらがいいかなんて語っていたので、やっぱりツンデレだろう！と持論を展開したままで・・・」

「だから、あなたの好みを女の姿で言つてどうするの？」

立松寺は腕を腰に当ててじっと目を合わせる。彼女のお説教タイムが始まる体制だ。

「しかもあなた自身、学校じゃあ天然お嬢様キャラでしょう。それが俺はツンデレの方がいいなあ。やっぱり。普段とのギャプがいいんだよなあ・・・なんて。ばかじゃない!」

そしてツンとドアの方に向き、小さな声で、

「それに私はツンデレじゃないんだから・・・」

（な・・・なんだ？オノロケか？立松寺・・・可愛い・・・可愛すぎるぞ。）

「と・・・とにかく、あなたが元の体に戻ることに全力を尽くしましょう。」

「立松寺、元に戻る方法を知っているのか？」

「詳しくは私の家に着いてから・・・。」

立松寺は背を向け、ドアの景色を見る。それ以上の質問を受け付けない背中のおーラを感じ、俺も沈黙した。

立松寺の家は、高校から3つ目の駅、立松寺前駅から門前町の中をまっすぐ伸びる先にある。大きな3重の塔が目印の大きな寺院である。なにしろ、鎌倉時代に開かれたと言つ由緒正しい寺であり、江戸時代には北陸の大藩の菩提寺として庇護ひしほを受けた歴史もある。寺の住職は代々立松寺一族が務めている。華子のオヤジで44代目という話だ。華子は一人娘ということだから、この寺を継ぐのは華子と結婚する相手ということになるのだろうか？一瞬、坊主頭の自分を想像したが、頭を振った。今は可愛らしい美少女姿であるから、それはありえない・・・。

さて、寺の正門ではなく、横にある通用門から入ると寺とは別に大きな屋敷がある。住職一家の生活の場である建物である。それにしてまでかい建物だ。坊主は儲かるのか？などといった俗物的な考えは捨て、もし、自分が男の姿だったら、結構、緊張する状況である。なにしろ、彼女の実家に行き、もしかしたら親と会うかもしれないのである。だが、今は美少女。女友達ということだとずいぶん気が楽である。男でも女でも友達であるには違いないのに・・・不思議だ。そんなことはさてより、どでかい玄関に上がり、30畳はある大きな広間に通されると一人の人物が座っている。その人物はなぜか、頭にコブ、右腕は骨折したのかギプスで吊っている。

「おおおっ・・・華子か、よく帰ってきた・・・。パパは心配・・・」

その人物・・・坊主頭でヒゲズラのごっついオッサンに華子がいきなり膝蹴りを食らわす。

たちまち、吹き飛ぶオッサン。

「お父様・・・ご自分のことをパパなどと、44代続く立松寺家当主としていかがかと」

どうやらこのオッサン、華子のオヤジらしい。そのオヤジ、華子の

膝蹴りで吹き飛んだはずなのに、夏を見ると瞬間移動して夏の足にしがみつく。

「おおお・・・君がうわさの夏君か。立派な美少女に生まれ変わったねえ」

ジヨリジヨリしたヒゲが太ももに当る。怖気が走って硬直してしま
う俺・・・。

「き・・・きゃああああああ」

思わず女の子の声で叫びを上げる俺。再び、華子の足蹴りがオヤジを吹き飛ばす。そして息も切らさず、

「お父様、土緒君にセクハラ行為はやめて下さいませ」

と冷静なお言葉。この父娘おやめ、いつもこんなことやっているのだろうか。

「で、結論から言うと俺がこんな女の子の体になったのは立松寺のお父さんのせいというわけ？」

「ごめんなさい」

「まあ、君も麗しい美少女になったわけだし、これからは華子の女友達として末永く仲良くしてやってください。」

ボカッ！と華子がオヤジの頭を殴る。普段はおとなしい感じの華子からは考えられない姿である。

「お父さん、なんでこんなことをしたのか、どうしてこんなことになるのか、どうすれば元に戻るのか、土緒くんに話しなさい」

仁王立ちして言い放つ立松寺華子・・・（怖ええええ。）俺としてはどうしてこんなことをしたのかは、何となく想像が付くからどうしてこんな非現実的な、漫画的な・・・ファンタジーな出来事が起こるのが一番知りたい。どうすれば、元に戻るのか？という華子の言葉からどうやら元に戻る方法もあるらしいことも類推され、大変な状況にも関わらず、どこかに戻れるという安心感があったせいでもある。どうやら、このオヤジ、今日の朝から華子に相当厳しく尋問もんされてすでにゲロツテいるらしい。学校に遅れてやってきた立松寺の原因がこれである。

以下はオヤジのゲロ話。

華子が生まれた17年前、親父（名前は立松寺春慶しゅんけい）は、将来、華子を奪い去ろうと必ず現れる害虫（男）を退治するために頭を悩ましていた。一心不乱にお経を唱えていると、本尊の阿弥陀様から声が聞こえる。

「汝なんじ、その願いのために何でもすると誓うか」

「おおおっ・・・仏様・・・私めの願いを聞き届けてくださるか・・・」

そんなアホな願いを聞き届ける程、仏様が軽いはずがないのだが、その時の春慶和尚は

速攻で「はい」と答えた。（和尚ならもう少し考えてものを言え！）すると阿弥陀様の像の後ろから、赤い服に赤いブーツの寺には明らかに場違いな女が現れた。一瞬、行きつけのキャバクラのホステスさんの誰か？とこの破壊僧の脳裏に検索画面の顔が現れては消えたが見覚えがない。

「このクスリを赤子に飲ませよ。ミルクに混ぜて飲ませればその子は、聖なる穢れない女の子に育つ。」

その子が年頃になった時に、不用意に唇を奪う極悪非道な輩に天罰

「が下るだろう」

（キスしただけで極悪非道か？）

「そのクスリのせいで俺が女体化したというわけ？」

俺は思わず聞き返した。もし本当なら製薬会社もあつと驚く効能である。世の中のオネエさまが大金を積んでも手に入れない魔法薬である。

（いや、それより、そのクスリを渡したド派手な姉ちゃんの方に突っ込みを入れるべきだったか・・・）

「いやいや、クスリの成分で女体化するのではない。華子自身が穢れのない聖乙女になる薬じゃ。その神様の使いが言うに、華子にキスした無礼者はたちまち、赤子、胎児、卵へと退化し、その魂は生まれ変わる前の天界に戻る。人間生まれ変わる時はどんなものかご存知か」

なにやら急に説法臭くなる。フルフルと頭を横に振る俺。

「閻魔大王えんまだいおうさまの前で裁かれるのじゃ。生前、悪事を働いた者はその罪で地獄へ。悟りの境地を得たものは天界へ行き仏の修行に入る。そして、そうでないものは今一度、人間界へ生まれ変わる。その時、くじを引くのじゃ。そのくじは商店会のくじ引きのようなこう、がらから・・・とした奴で」

（このオヤジ、見てきたようなウソ話を語るな！）

「それで白が出たら、男、赤なら女として生まれ変わる。その瞬間まで遡るのじゃ。そして、男なら赤が出たという運命にすり変わるのじゃ。そして、卵から胎児、赤子へと成長する。その間、わずか数秒の出来事」

オヤジの語りに熱が入る。

「仏の世界では人間界の十数年がほんの数秒になる。人が魂に戻り、もう一度生まれ変わるのはほんの一瞬」

「何だか、よく分からないけれど、俺は一度生まれる前まで戻り、女にチェンジされてまた成長したっていいのか？」

「その通り。だから、家でも学校でも違和感なかっただろう。君は女の子として生まれ、17年間生きてきたというわけだ。昨日の華子のデートから男の歴史がそっくり女の歴史に変わったということだ。はっはは・・・」

「お・・・お父さん。こんな大変なことをして笑うなんて、反省が足りてませんわね」

指をこきこき鳴らす立松寺華子。

「何をいう娘よ。嫁入り前の娘がふしだらな行いをするからだ」

「ふしだらなつて・・・。好きな人とキスをするのは自然な行為よ。土緒くんを返して！」

立松寺の目から涙が流れる。きらきらした涙だ。その瞳を見て俺は昨日の出来事を思い出した。

立松寺に告白したのは2日前。放課後、学校の裏庭に呼び出して、率直に告げた。

「君のこと好きだ」

男は直球勝負！と思い、小細工なしで勇気を奮い立たせた。

「ふっん」

立松寺はそう言った。きつと、こういうシチュエーションに慣れているのだろう。立松寺に告白して撃沈した男は数多くいるという噂であった。

「いいわ。じゃあ、デートしましょう。日曜日、10時に駅で」

あまりにあっさりとした返事。これはOKということか？携帯番号もメアドもあっさり教えてくれたから、OKと思うが……。疑問に思いながらも日曜日のデート。普通に映画を見て、カフェで他愛もない話をして、デートは順調にどうか何となく時間が過ぎていった。俺は立松寺の顔を見ているだけで幸せだったが、立松寺が楽しそうにしている感じではない。普段から表情に乏しいのではあるが、それでも時折、自分を見つめ目が合うと慌ててそらすシーンがいくつもあった。

そして別れ際、立松寺はこんなことを聞いた。

「土緒くん。私のこと好きってことだけど、どんなところが好きなの？」

(どんなところ?)

改めて聞かれるとすぐに言葉が出ない。そう、なんで立松寺のことが好きなんだ？立松寺のことを考えると胸が締め付けられるような感じがして、ついつい見てしまう。彼女の美しい顔か？つまましいプロポーション？いや、外見ではない。じゃあ、「氷の女王」と言われる厳しい性格がいいのか？いや、そんなところが好きなら俺はMと言うことになる。自然に口が開いた。

「立松寺って、なんだかドジだね。いつも毅然としていて真面目だけど、本当はドジ。そんなところがとても可愛いんだよね。ボクはそんな君を守ってあげたいと思ったんだ」

我ながら照れくさくなる台詞。よくこんな言葉が出たもんだ。立松寺はうなだれて震えていた。

「私のこと・・・可愛いとか、スタイルが好みだとか、ツンツンしたところがいいだとかいったバカな男はたくさんいたけど・・・。ドジな女なんて言った人はあなたが初めて」

（お・・・怒ったのか？や・・・やばい。）

これは平手打ちでも来るか・・・と身構えたが顔を上げた立松寺は目に涙を浮かべていた。

「やっぱり私のこと、よく見ていてくれるね。土緒くん・・・高校の入学試験の時覚えている？筆記用具を忘れてしまったドジな女の子のこと」

「えっ？」

遠い過去の映像を検索した。そういえば、試験会場で隣の席の女の子がそわそわしているのを思い出した。始まる10分前。かばんにあるはずの筆記用具がなくて、動転している女の子。グルグル眼鏡にお下げというレトロな出で立ちではあったが、顔はよく思い出せない。赤いリボンが特徴の隣の中学校の制服であったことは覚えている。

「困ったわ・・・。筆記用具・・・絶対、入れたはずなのに・・・」

俺はだまってシャープペンシルを差し出した。近所の電気屋さんの住所が入った代物だが、この日のために苦楽を共にしてきた相棒だ。ついでに消しゴムをカッターで真っ二つに切って差し出した。顔を真っ赤にした女の子が小さな声でお礼を言ったが、試験開始の合図

でかき消された。試験後も男友達と試験終了打ち上げに繰り出したので、相棒のそのシャープペンシルとは別れたままであった。

「あのグルグル眼鏡の女の子は、立松寺だったの？」

「ええ。入学してから探したわ。シャープペンシルを返そうと思っ
ていたけれど、なかなか声がかけれなくて……。土緒くんたら、
あの時のこと完全に忘れているのですから」

「ええええっ……」

ということとは、立松寺は1年生の頃から自分のことを知っていて、
自分のこと見ていてくれたってこと？（早く、言ってくれよ〜。）
（
実のところ、自分が立松寺のことを知ったのは、1年生の時の体育
祭。女子のリレーで颯爽と走る立松寺を見てからだ。でも、あのレ
トロな格好とその時の立松寺は結びつかない。

悪友の隆介が、この高校でベスト3に入る美少女だ……。言うので
軽い気持ちで見に行ったが、心がズキーン。と打ち抜かれた。一
目ぼれ……。ってというのはこういうことをいうのである。それから
立松寺のことが気になって仕方がない。風の噂で誰々が告ったがふ
られただの、立松寺には好きな人がいるのだといった話で一喜一憂
していた1年間。勇気を振り絞って告白したが、実はその1年前か
ら立松寺も自分のことを気にしてくれただなんて……。相思相
愛？って奴……。うほほ〜い。）

「私も土緒くんのが気になっていたわ。でも、私、こういう性
格でしょ。自分から言うなんてできないから。土緒君が私のこと好
き……。って言うてくれたときはとてもうれしかったわ」

そして目をつむった立松寺。あまりの可愛さとその唇に吸い寄せら
れる俺。（初キス！）

だが、温かいぷにゅっとした感触を期待していた俺の唇は冷たいプ

ラスチックカードに阻まれた。華子が手にした某ドーナツチェーン店のポイントカードで唇をガードしたのだ。カード越しにキスをしたことになる。

「ふふふ・・残念でした。一度目のデートでキスするなんて、土緒くん、女の子慣れしているね」

くるっと振り向く立松寺。2、3歩離れていく。

「ご・ごめん。そんなつもりは・・」

「一体、今まで、何人の女の子とキスしちゃったのかなあ」

俺も後ろを向いた。そして、思い切って告白した。

「一度もない。キスなんて、女の子としたことはない。今が初めて!」

(今のは回数に入るのか?入っても0.5回だろう。)そう脳裏に浮かんだときに、背中にコツンとおでこが当たる感触が・・。立松寺がいつのまにか背中に引っ付いている。振り返った俺の顔を手ではさんで、立松寺は背伸びをした。甘い匂いがして頭が真っ白になる。

「じゃあ、これが初めてだね」

ことを終えて、上目遣いで立松寺がそうつぶやき、2、3歩後ずさりする。そして振り向き、

「私も初めてだったから・・。土緒くん、責任取ってよね」

そういつて、駅の方向へ駆け出した。

「ああ・・・さよなら、立松寺・・。また、明日」

頭が真つ白な俺はそう彼女に声を掛けた。だが、この瞬間に女に生まれ変わったのだろう。

男夏の声じゃない声に驚いて振り返った華子の目に女の子になった夏の後姿が焼きついた。

「キスには、キス！元に戻るには、君を心から愛する男の熱いキスが必要なんじゃない」

華子のオヤジが両腕を腰に当てて天に吼えた。

「お・・・男とキス」

俺は思わず気を失いそうになった。冗談じゃない。なんで俺が男とキスをしなくてはいけないのだ。どうせなら可愛い女の子の方がいい。だが、現在はどこをどう見ても可愛い女子高生の姿である。端から見たら、女の子とキスするのは変態扱いされるだろう。だが、心は男である。確かに・・・男の時の記憶があるのがその証拠だ。だが、胸の奥に違和感を感じ、とても嫌な予感がする。何か自分の中にもう一人の自分がいるような感覚・・・。

「まあ、君も今回のことで深く反省したということで、男に戻る方法を教えたというわけじゃ。これに懲りて二度と華子に手を出さないようにな」

（うそつけ・・・どうせ立松寺に殴られて教えたくせに。）

「まあ、君も今はコレだけの美貌ぶつぽうとナイスバディじゃない・・・スレンダー系だが・・・惚れる男はごまんといるはずじゃ」

そういつていつの間にか、自分の胸をもみもみする。

「きゃあああああ．．．私に．．．触らないで！」

思わず肘鉄ひじてつを食らわす。だが、自分の発した言葉に思わず口を手で押さえた。

（そう、今、俺を私と呼んだ．．．）

その時、別の声が部屋に響いた。

「ふふふ。こんなにうまく行くとは」

障子ごしに1つの影が視界に入った。声の主はその影。障子がスパン．．と開くと妙な格好をした女性が1人立っていた。赤いマントを見にまとい、タイトな赤い上下スーツ。若干短いスカートからムチムの生足でこれまた赤いピンヒール。赤い長い髪が腰まで伸び、背は女夏より高く、はちきれんばかりの豊かな胸の谷間が赤いマントからちらちら見える。

先ほど、オヤジの話に出てきたド派手なオネエサンとそっくりだ。

「私の名はリイ＝アスモデウス。魔界の伯爵令嬢はくしやうれいじやうにして、魔王様の御台みだいさま付き護衛兼指導女官長ごえいけんしうびじョウかんちョウを務める」

赤い髪のナイスバディが言った。

「リイ？魔界の令嬢？何かのコスプレ？立松寺、外人さんがホームステイでもしてた？」

リイの鉄拳が俺に炸裂する。鼻血を出して吹き飛ぶ俺。美少女が鼻血を出すなんて絵にならない。続けていつの間にか背後からリイの乳を揉みもみして肘鉄で吹き飛ぶ立松寺のオヤジはどうでもいい。

「まだ、魔王様のヨメとしての心構えができていないようですね」「ま・・魔王さまのヨメ？誰が？」

リイがすつと指を指す。その形よい、ついでに血のように真っ赤なマニキュア？が塗られた長い爪が俺の鼻を刺す。鼻の中の出血より痛い。

「お前だ。土緒夏。お前はこの人間界に降臨された魔王様・・正確には引退された魔王様の後継者である方の御台さまになるのだ。」

リイの長い爪に形のよい鼻先を刺されても痛みを忘れてしまうほど混乱する俺。

(御台さまって、昔の偉い人のヨメさんだよな？ヨメさんって？)

「エーっ・・俺、男なんですけど」

「まだ小娘だが、立派な女性ではありませんか」

赤い女が俺の胸をポニユポニユ揉む。ぞわぞわ背筋に冷たいものが走る。

「男の姿は仮の姿。あなたさまは、次期魔王様のヨメとして人間界で大事に育てられたのです」

「はあ？」

この不思議な娘の話はこうだ。

土緒夏はもともと、次期魔王の許婚者として人間界に生まれた。た

だ、魔王を消す勢力から姿を隠すために平凡な人間の家族の息子として生を受けた。しかし、それは仮の姿で、ある儀式を行えば封印が解けて女に変わるのだ。ある儀式というのが、

「清らかな乙女のファーストキス！」

「えええええっ・・・」

俺と立松寺が大きな声で同時に声をあげた。

キスは1度だけでは発動しない。2回目のキスで発動するのだ。だが、カード越しのキスで発動がややふやになり、体は女性化した。心は男夏が残り、封印を解かれた女夏の心が芽生えたらしい。いたい、どんなファンタジーだ？

俺の頭の中で筋肉もりもりの魔王のイメージと傍らに立つケバイ格好と厚化粧をした自分を想像する。

（ありえねえ・・・）

「何だか、胡散臭いわね。あなた、土緒君のこと御台さまとか、御台さま付き女官長とか言ってる割にご主人様の土緒君にはなれなれないわね」

黙って聞いていた立松寺が、するどい突っ込みを入れる。確かに魔界の貴族とか何とかいつているが、こちらは魔王さまのヨメである。殴られる筋合いはない。

「ふん。運よく魔王さまの許婚になったとはいえ、お前は魔界では庶民階級。そもそも、大貴族令嬢たる私がお前に使えることすらありえない話だが、魔王様復活を阻止する輩がいる以上、私レベルの魔族が傍にいないと危ないのだ。私はおじいさまにそう命じられたからで、おまえに忠誠を誓ったわけではない。それにお前が魔王様に寵愛を受けるとは限らないだろう。」

「ああ、分ったわ。つまり、あなた2号さん狙いね」

立松寺がリイにケンカを売ったかのような口ぶり。リイは赤い唇から八重歯？を少しのぞかせ、

「先代魔王様は16人の側室と正室がいらっしやった。正室は必ず、人間界に転生した者から迎えるのが慣わしになっている。側室に選ばれるのは、魔界の貴族の娘やお前のように人間界に隠れているものもいる。まあ、側室候補者もそのうちお前の前に現れるとは思いますが、正室たるお前はそういうメンバーの上に立たねばならない。」

と言った。

「ふん、魔王つていやらしい奴ね。」

相変わらず、冷たく言い放つ立松寺。明らかにまともな人間じゃないだろ・・・という容貌のリイによく言える。

「で、土緒君を元の男に戻す方法を教えて」
(おおっ・・・)

俺が最も聞きたいことを俺の彼女はずばりと聞く。

「ふふふ・・・」

不敵な笑いをするリイ。

「100日だ。100日間の間に魔王様候補の男子を虜にし、キスをしる。魔王候補がお前に惚れた状態であれば、魔王様は復活する。そうすれば、お前の魂は2つに分離し、女と男の2つの個体になる。」

「（双子ちゃんじゃないか……。だが、そうすれば女夏は魔王のヨメになって、俺は元の男子高校生に戻れる。そうすれば……。立松寺と・ムフフ。）」

美少女の顔でにへらへらとしまりのない顔になる俺を無視して立松寺が凜とした顔でリイに再質問をする。リイを見る目は尋常ではない。

「なんだか怪しいわね。それに、あなた、最初に護衛とか言っていたわね。もしかしたら、土緒君や魔王さまとか言う人を害する者がいるような」

（おおっ……。さすが、立松寺……。するどい。こんな切れる彼女がヨメになったら、俺の将来は一生尻に敷かれるだろう。でも、立松寺の尻ならいいか……。）

立松寺のお尻に目をやる俺。女の顔でますます腑抜けの顔。立松寺はきりつとした目で俺をにらんだ。たちまち引き締まる俺。リイ・アスモデウスはにやりと笑った。

「お主は、なかなかするどいな」

「立松寺華子よ」

「私のことはリイ様と呼べ。カコ、お主が今回の原因のおなごか。自分のせいで愛しの彼氏が女になっては責任を感じるの。確かに我々には様々な敵がいる」

「敵？」

「まあ、いずれ、目にするだろうが、心配するな。このリイ・アスモデウスが傍にいるかぎり、お前の安全は保障する。まあ、奴らもヨメのお前には手を出さないと思うが」

そういうとリイは、小さな鏡を取り出した。柄には2匹の蛇がからみつき、鏡の裏に施された模様は毒々しい髑髏どくろ……。まさに悪魔の持ち物って感じの鏡だ。まあ、このキャラで可愛いキャラ付きピンクの鏡の方が怖いが……。

「真実の鏡だ……。ここにお前の周辺にいらっしやるであろう魔王様候補の男が映し出される」

「候補？」

「そうだ。魔王様は必ず、運命の相手であるお前の周辺にいる。お前に好意を持つ男は全て、魔王様候補と言っわけだ。この鏡はお前を好きな人物が映る。まず一人……」

リイが言うには、魔王となる男はその力を封印されて人間として暮らしている。その封印を破るのはヨメたる女夏の役割なのだ。ゲゲゲ……。封印を破るのは夏とのキス！

「ウソでしょ……。」

鏡に映ったのは、自分も立松寺もよく知る人物であった。

「生徒会長……」

立松寺がつぶやいた……。

俺もつぶやいた。

「たかはなむしゅう橘隆介……俺の幼馴染、幼稚園以来の悪友だ。」

100日以内にこの隆介をはじめ、魔王候補の男子と相思相愛になり、キスをして真の魔王を復活させるのだ。それで俺は男に戻るのだ。

夏と生徒会長（前書き）

第4部登場人物

土緒夏（女）：転生した主人公。優等生で性格もよく学校のアイドル。天然なところがあるが、本当はしたたかな一面も…

橘隆介^{たちはなりゆき}：主人公の幼馴染の生徒会長。頭脳明晰、スポーツ万能のスーパー高校生。でも、女には特に夏にはヘタレらしい。

源元馬^{みなもとげんま}：裏生徒会長を名乗る隆介のライバル。少々熱血が過ぎる好男子。女夏に一目ぼれしてしまう。

夏と生徒会長

橋隆介とは幼稚園からの腐れ縁である。はつきりといえる悪友である。遊ぶときはいつも一緒。なんでも話せる奴である。男の自分から見てもなかなかの男前で、家はホテル、銀行、鉄道などを経営する橋財閥の三男坊である。自分とつるんでバカばかりしているが、頭は驚異的によくこの学校で1番。立松寺ですら、一度も勝った事がない。スポーツも万能で、中学時代はバスケットで全国大会も出場するというスーパー高校生である。当然、女にはもてるはずだが、俺はそれに関して親友だけによく知っている。

「隆介は、女に対してはクソ真面目でヘタレだ。」

隣の立松寺が聞く。

「あの顔でヘタレはないでしょう。かなりのイケメンよ。」

2階のベランダから外で2、3人の男子生徒と話している隆介を見ながら、俺は言う。

「立松寺、それって、俺よりもいい男って思ってるのか？」

「なにバカ言ってるの!!」

立松寺が怒って詰め寄る。

「いや、だって心配で……。俺の好きな立松寺が他の男に取られるのは絶対嫌だ。」

そう、今の自分は正統派美少女の姿でイケメンどころではない。むしろ、立松寺が女の自分を見捨てて、他の男に恋をしてもおかしく

はないのである。立松寺が他の男のものになるなんて考えただけで、俺の心は張り裂けてしまう！

「やだ、土緒くんたら・・・」

立松寺の頬が急にピンク色に染まってくる。

うわあ・・・可愛い・・・可愛すぎる。思わず、立松寺を見つめる。

「立松寺」

思わず、立松寺の手を握る。だが、不意にこんな声が耳に入ってくる。

「立松寺さんとドーナツちゃんて、最近いつも一緒にいるよねえ」

「なんだか、危ない感じしない？あの二人。何だか、女同士でラブラブみたいな」

「いやあだあ・・・きゃ・・・」

おいおい・・・聞こえるって。おかげで立松寺は手を振り払ってしまった。（くそ！）

実のところ、今回のターゲット、橘隆介と女夏の関係はこれまでのところ極めて密接だ。

まず、生まれた病院が同じ。同じ幼稚園のサクラ組で同じ席。小中学校通じて9年間同じクラスという仕組みとしかいえない関係。さすがにこの乙女林高校では、クラスは違ったものの、2年生になって生徒会役員で顔を合わせる中らしい。生徒会では隆介は会長をしているのだが、自分はその第1書記。この学校は、生徒会選挙は会長選だけで、当選した会長がその他の役割を指名して組織を作るらしい。役員の数自由だが、現在は副会長1人、書記2人に会計

1人という陣容。第1書記は会長の秘書兼スポークスマンの役割を担う。会長の女房役である。

最初はここまで運命を感じる密接な幼馴染状況なら、隆介の奴、魔王当確じゃんと思っただが、さすがヘタレ。生徒会室で二人きりでも気のアルそぶりすら見せない。男の時と同じで幼馴染と言う点は同じであったので、生徒会役員の指名もただ単に知っている奴で使えそうな奴ということ指名か？と思いはじめた。

「でも、幼馴染って、結構、ドラマや漫画じゃあ、ヒロインになるんじゃないの」

立松寺が書類を持って生徒会室へ一緒に向かう。一応、立松寺は自分の助手ということになっている。

「ちつちち・・・それは甘いよ。確かに幼馴染は未来の結婚相手みたいな描かれ方するけど、大抵、ヒロインのライバルでトンビに揚げをさらわれる役割だし、主人公の男も結婚は無難な女を選ぶかもしれないが、恋愛は自分が知らない女に惹かれる。分かりきった奴には魅力を感じないものだ」

「何だか、分かったような口を利いてるけど根拠はあるの」

「いや、ゲームやアニメの一般的な見解を言ったまで」

はあく立松寺の溜息。だが、俺自身はこの困難なミッションに思いを巡らせた。100日以内にこの隆介が自分にベタボレになり、ラブラブキス（自分で言っただけで背中になぞった寒気が・・・）をすればいい。彼が魔王ならそれで決まりだ。だが、魔王でなければ次のターゲットに・・・となる。だが、キスしておいて次の男に行くのはどうなんだ？それに魔王が復活したらどうなるんだ？どんな力があるか未知数だし、そんな変な奴を復活させる行為はファンタジーの世界では厳禁である。もし、リイが言うようにヨメになる女夏

と自分が分かれればいいが、もしウソだったら？自分はそのまま魔王のヨメ決定である。哀れ新妻生活が始まってしまふ・・・これは深刻である。ヨメだとキスどころか、それ以上されてしまふのは間違いない。(ど・・・どんなこと?)鼻血がすーっと出てきた。思わず、鼻ではなく、お尻を押さえてしまふ俺。(なに想像してんだ!?)だが、リイの言葉を信じるなら100日以内に魔王を探さなければ、これもアウトである。さらに倒そうとする勢力があることをリイはほのめかしていたから、邪魔が入ることも予想できた。いったいどんな奴か？

(それにしても・・・男時代の親友が候補の一人とは・・・やりにくい。)

それに・・・俺の心の中に一抹の不安があつた。何だが、自分でないようなそんな気持ち。

そうだ。俺はこれまでの女夏の記憶は一切ない。ということはこの17年間、確かに女夏として暮らしてきた奴がいるわけで、そいつが心の中に眠っていて今はいないだけなのだ。

今日は金曜日、午後4時に定例会見がある。この高校の生徒会はかなり活動が活発で、週に1回、定例会見で活動報告と一般生徒の質問を受ける。生徒会長の隆介が直接、会見に臨むことがあるが、通常はスポークスマンを務める夏が行う。隆介が会見するときには、新聞部や放送部の代表の他に女生徒が多数黄色い声を上げるが、夏の場合はファンの男子が前列にひしめくのだ。ファンがいるというのも驚きだった。さすが魔王のヨメ候補だ。

「それでは、定例会見を行います。生徒会書記、土緒夏さん、お願いします。」

会計の1年生新堂ひかるが司会をする。彼は1年生ながらも次期リーダーとして隆介に抜擢された逸材だが、まだ、中学生のにおいを残す男の子という感じ。幾分、高い声の元気な少年なのでこれまた年上の女生徒を中心にファンが多い。

「うおおおっ……。ドーナッツちゅあん！」

「今日もかわいい……。ファンシーリングドーナッツ！」

ウホウホウホ……。変なリズムで踊り始める。コアな夏のファンである。アキバのアイドルと勘違いしてないか？俺はその輩たちにも輝くような笑顔を作って壇上に上がる。媚を売っておくのも何かの役に立つかもしれない。

「えっと……。生徒会は来る体育祭に向けて、全校生徒が楽しめる企画を募集します。実際に活動する体育委員会と共同で近日中に募集方法を発表する予定です。」

俺は用意してきた原稿をにこやかに読み上げる。

「最近、男女交際が公然と行われていて、廊下で手をつないだり、周りの目を気にせずいちゃいちゃする姿が見られます。これは由々しき問題で、生徒会としてはそういう態度は自粛するよう要望します。」

（そうだ、そんなうらやましいこと公然とやるんじゃない……。）
心の中の俺。

「ドーナッツさん、それは生徒会が男女交際を禁止するということでしょうか？」

新聞部の生徒が質問する。確か、2組の遠藤良太^{えんどうりょうた}である。男だった時には他の男子とともに一度ラーメンを食いに行ったことがある。

「いえ、交際を禁止するわけではありません。ただ、高校生らしい清純な交際を望むということです。」

（そう、おれと立松寺みたいな・・・キスマでだ！）

「ドーナッツさんは、そういう交際をしたいと思っっているということでしょうか。」

今度は「週刊乙女林」という雑誌を作っているサークルの女子が聞いてくる。3年の三ツ矢加奈子である。この雑誌は校内の噂話や恋愛話を売りにしている雑誌である。結構、人気を博しているように生徒会メンバーも度々、取り上げられる。この三ツ矢という女生徒将来は雑誌編集者を目指しているということだけあって、かなり購読者の関心をひく記事になるような質問をズバズバしてくる。

「そういう相手がいれば・・・そういう交際をしたいです。」

おおっ・・・と周りを囲む男子生徒の歓声が起こる。

「噂によれば、ドーナッツさんは最近、同じ組の立松寺さんと仲がよろしいようで、一部、ゆりじゃないか？といった疑惑が浮上しています。」

（ええっ・・・ゆり？って、女の子が女の子を・・・って奴？）俺は慌てて、かぶりを振った。

「立松寺さんは、最近、私の悩みを聞いてくれるようになった親友です。」

（ちくしょう・・・親友じゃなくて本当は彼女なのに・・・）すました顔で答えながら心は泣いている俺。

「わたし、ノーマルですから。やっぱり、男の子が好きです。きゃ・言っちゃった。」

ふいに自分じゃない声に我に返った。いや、言ったのは自分だが自分の意思とは違う言葉が出てくる。

「ドーナッツさんは、生徒会長とできているという噂もありますが、それは本当ですか。」

「ええっ・・・そんなこと答えられません。」

もじもじする俺。待て、そんなしなを作っては、誤解されるではないか。

バチバチとデジカメのフラッシュがたかれる。心の奥底に眠っていたはずの女夏がしゃべっているのだ。俺は必死で代われ！と女夏に向かつて叫ぶが、心の中の女夏は俺に向かつてアツカンベーをした。こいつ、可愛い顔してかなりしたたかな性格のようだ。

「とにかく、私は特定の人とはお付き合いはしていません。夏はフリーです。私の心をときめかす男の子募集中です！」

うああああっ・・・男子生徒共の大歓声。中には俺と付き合ってくれ〜という声も聞こえるが百万点の笑顔で夏は答える。（この女、超マジメのマジ子さんじゃなかったのか？）

普段は真面目で清純派だった夏の思いがけない発言で、定例会見がアイドルコンサートのようになってしまった。三ツ矢加奈子は、スクープ記事をモノにしたとばかりにメモを走らす。強烈な印象の雑誌の見出しが浮かんだようだ。

盛り上がる会場でスツと手を挙げた生徒がいた。司会の新堂ひかるが最後の質問ですと指名する。立ち上がった人物を見て、夏も立松寺もあ然とする。赤い女、リイ・アスモデウスである。

「留学生のリイです。この学校には正規の生徒会の他に裏の生徒会があります。その影の生徒会が体育祭で正規の生徒会に挑戦したいと言っています。」

おおっ・・・会場にどよめきが起こった。放送部のテレビカメラがリイと夏を交互に映す。

確かに影の生徒会と称する団体があることは確かである。というのも、前回の生徒会選挙で隆介に破れた対立候補が、選挙の無効を叫んで同士を集めて作ったのだ。その対立候補というのが、物静かな貴公子風の現生徒会長、橘隆介とは違い、熱血体育会系で少々暑苦しい。家はこれまたホテル、鉄道、デパート等を経営する隆介の商売敵、源グループの御曹司なのだ。

「そういう団体があることは正式には認められていません。認められていない団体が挑戦・・・と言われても・・・」

女夏がどぎまぎして答える。男夏は心の中でリイがなぜここに現れたか考えていた。そもそも留学生？高校の制服がぱつんぱつんで、シャツのボタンがはじけそう。こんなイケナイ制服姿は反則である。・というより、何か裏がありそうだ。そう思ったとき、会場になっている教室の後ろのドアががらり・・・と開いて、熱血漢の裏の生徒会長、その人が現れた。

「聞いているか！隆介！この俺、みなもとげんま源元馬が率いる真の生徒会は、お前の偽生徒会を木っ端微塵に粉碎し、どちらが正義かはつきりさせてやる」

そう宣言し、ドカドカと会見場正面に進む。リイ・アスモデウスも立ち上がり、その隣に立つ。元馬の子分と思われる男子生徒も立ち上がる。

「このリイを俺の真の生徒会の副会長に任命した。立っている生徒も生徒会役員としてこの学校を盛り上げて行くことを誓っている。」

そして、夏さん、この勝負に勝ったら俺と付き合ってくれ！」
「え？」

呆然とする女夏……。

「いいか！隆介！生徒会も夏さんも俺のものだ！この挑戦、受けてみる。それとも逃げるのか？」

放送部のカメラに視線を向けてわざとらしく宣言した後、どさくさにまぎれて、元馬は夏の手を握る。目に決意の炎がめらめらと燃えている。

(ア・・熱い・・というより暑苦しい。)

バチバチとフラッシュがたかれて会見場は大混乱に陥った。

(それにしても……リイの奴、いったいどういっつもりだ。最初のターゲットは橘隆介じゃないのか?)

「で、君は元馬に圧倒されて、何も言えず、結果、生徒会が挑戦されたという事実だけが残ったと言っわけか。」

(源元馬、吼える。生徒会に挑戦状！)

(ドーナッツちゃん争奪戦！恋の行方はどちらに！)

(オーマイハニードーナッツ、裏生徒会長の大胆告白、交際宣言！)

(生徒会長とは破局？ドーナッツちゃんの新しい恋人発覚！)

生徒会室の机の上には、学校新聞号外、週刊乙女林、スクープ写真紙など校内メディアが発行する作品がずらりと並んでいる。手を握

られている夏の困った顔や元馬とのツーショットの写真が大きく取り上げられている。

「じゅ・ごめんなさい。」

「まあ、いい。夏、お茶を入れてくれ。」

そそくさとポットからお湯を注ぎ、急須を温め、さらに置いている隆介の湯のみ茶碗（推定3万円の茶碗）に煎茶を入れる夏。その手際によさから、たぶん、いつも隆介のためにお茶をいれていたであろう。心の中で男夏は大きく溜息をついた。

「まあ、元馬が君の事を好きだとわめくのはしょうがない。人間、誰かを好きになることは自由だ。だが、それを受け入れるかどうかは相手次第。そうだろ、夏……。」

隆介が茶碗を置く夏の手を握った。

（えっ……ちよつと待て……。）

二人きりの生徒会室である。今日は他の部員も来ない予定だ。もしかしたら、ヘタレの隆介の奴、勇気をふりしぼったか？このままだと何かされそうな雰囲気は漂う。思わずぎゅっと目をつむってしまふ俺。（いや、これはOKサインじゃないぞ。）

第三者的に見れば告白OKよ……状態とも見えなくもないが、逆にそんな態度を取られて隆介の奴は急に真っ赤になって手を離れた。

（おいおい、幼馴染なら何度も手はつないだらるうに……。俺まで恥かしくなるじゃないか……。）

「君が誰と付き合おうと勝手だけど、幼馴染がああ暑苦しい奴と付き合うのは何だか、面白くない。本来ならあのような非正規団体と

争うこと自体ありえないが、有能な生徒会のメンバーを盗られるわけにはいかない。正々堂々と勝負して叩きのめす。」

照れ隠しなのか、いつも冷静な口調の隆介が今日は激しい。日ごろの無関心な感じとは少々違う。

（こつという隆介は、男時代には見たことがないなあ……。もしかしたら、嫉妬で積極的になろうとしてるのか??）

この分だと隆介は女夏にメロメロに惚れていると思ってい。もう少し様子を見て、間違いないと思えば、男のプライドを捨ててキスしてやる。できれば、女夏の時にして欲しいがどうやら人格の主導するのはランダムに変わるようで、昨日、急に女夏が目覚めたが朝起きたら俺に主導権が戻ってきていた。男だろうが、女だろうが、とりあえずミッションは進めておくにこしたことはない。

夏と熱血男（前書き）

第5部登場人物

みなもとげんま

源元馬：生徒会長長橋隆介のライバル。第2の魔王候補

女夏に一目ぼれの熱血男。ラブラビビジョンで今日も幸せ

夏と熱血男

源元馬率いる、裏生徒会（元馬は真の生徒会と呼称）の提案は、体育祭を生徒会率いる赤組と元馬率いる白組と対抗戦をしようというのである。勝った方が本物の生徒会で夏とお付き合いができる。

（ちよつと待て！本人の承諾なしにそういうことが決まるのか？）
そもそもちゃんとした選挙で選ばれた隆介が、この挑戦を受けるメリットはないはずだ。ましてや、夏をかけることに躊躇しないとは、
・だが、隆介はこれを機会にただの幼馴染から一歩進んだ関係を求めてきたいと考えているんじゃないだろうか。その割には、いろいろ命じて自分の世話をさせる。幼馴染への微妙な心境である。

（俺はお前の女房じゃない！）とどなってやろうと思ったが、どうも女夏は何も言わず、これまで世話をしてきたようだったのがまんしてきた。心の中で今は傍観している女夏に聞いてみた。

「おまえ、昔から隆介の世話しているのか？ムカつかないのか？」

「昔からよ。何だか、体が勝手に動くの。橘君には逆らえないと言
うか、世話をしなさいと思ふのよ。ぽっ・・・」

（おいおい・・・それじゃあ、隆介が魔王決定じゃないか。相思相愛
だし。）

「あのね、あなたにお願いがあるのだけど。」

女夏が真剣な眼差しで俺を見てくる。

「あの元馬君も気になるんだよね。あなたは源君にもアプローチ
してね。」

「えっ？おまえ、隆介にベタボレじゃないのかよ。」

「私は魔王のお嫁さんなの。そりゃ、橘くんはいい人だよ。カッコ
いいよ。だけど・・・魔王じゃないならお嫁さんにはなれない。」

(は？お前は相手が魔王ならどんな奴でもいいのか？) 少々、疑問に思う俺。

「おまえ、さあ、これまで生きてきたキャラとずいぶん違うようなんだけど。会見のときにはじめてたじゃないか。本当はあの(きやは！夏、困っちゃう)とか言うブリブリ女の子キャラなんだろう！」

俺は確信している。こいつ表面ズラはおとなしいが、本質は違う。

「それはあなたが心に入ってきてからよ。何だか、自分が生まれ変わったような感じがするの。きつと、運命の人が近くにいることが分って私は生まれ変わったんだわ。」

「は？」

「魔王様は、はきはきしてエネルギーシユな女の子が好きなんですつて。」

(それ？誰情報？)

「魔王はおとなしいタイプは嫌いなのか。」

「おとなしいタイプが魔界に君臨できて？魔王のお嫁さんということは、魔界の女王よ。おとなしいタイプじゃ、いざとなってもモジモジするのがオチなの！」

(お前がそのモジモジちゃんだったんじゃないか。)

「で？おまえは二股かけるために俺に協力しろと？そういえば、お前、会見で男の子募集とか言つて、二股どころじゃないじゃないか？魔王つて、そんな浮気な奴がいいのか？」

「ふふふ……。バカね。あくまでも魔王様を見つけるためよ。」

「魔王様以外の男なんて、切り捨てるわ。」
(こいつ、こええええ……。可愛い顔してこえええつ……。さすがは生まれながらにしての魔王のヨメ。)

「だ……。だけど、元馬にアプローチしても……。俺は男だぜ？気持ちわる〜。」

「大丈夫よ・・・仕込みはばっちりだから・・・。あなたはそのままのキャラで十分、トドメをさせるわ。どちらにしても、私とあなたは自分の意思に関係なくランダムに数時間ずつに変わるみたい。お互い、魔王様を見つげるために協力しましょう。」

女夏は俺にウインクをした。自分じゃなかったら、惚れてしまうくらい可愛い顔である。

隆介に元馬と仲が悪い同士の間に入って行動する？修羅場は必死である。どちらかが魔王なら苦労も厭わないが・・・。元馬については自分に告白していたくらいだから、自分に惚れさせるといふ条件はクリアである。隙を見てキスしてやればいい。それで魔王復活？？

（よし、とりあえずやるぞ！俺は女だ、美少女だ・と言い聞かせてガマン！！）

思わずオイッチニイ・・・と準備体操を始めた。キスするのに体操はいらぬはずだが、体が勝手に動く。廊下だったので道行く生徒が笑って通り過ぎる。

「土緒くん、大丈夫？」

立松寺が後ろから話しかけてきた。長い髪を揺らして満面の笑みで振り返る俺・・・。

「昨日、会見の後、急に華子さん・・・とか言い始めたから、男の子の土緒くんがいなくなっちゃったと思って心配したのよ。」

「立松寺・・・。」

思わず、立松寺に抱きついた・・・というより、立松寺の胸に顔を埋

めた。端から見ると女子同士のじゃれあいみたいに見える光景だが、それが男の子だったら、かなり親しくないとセクハラである。

「きゃああああ．．土緒くんのエッチ！」

案の定、バシツ．．とビンタが炸裂する。

「いててて．．。」

「土緒くん、スリスリは早いよ。」

顔を真っ赤にしてうつむく立松寺。（か．．可愛い〜可愛すぎる。）
このやりとりを見ていた生徒たちが、

「あの二人、やっぱり怪しいよねえ。」

「会見じゃ、ドーナツちゃん、否定していたけど。」

「生徒会長より、立松寺さんと一緒にいることが多いし。」

やばい．．ドーナツちゃんゆり説が大きくなる。心の中で女夏が（バカ〜）と叫んでいたがそれは無視する。なんやかんや言っても、立松寺とこんなラブコメ的なやりとりしてないと、自分が男だと自覚を失ってしまいそうである。

「土緒くんがいない間にいろいろ調べたわ。」

「何を？」

「あの源元馬くんのこと、リィ・アスモデウスのこと。」

「ああ．．。」

源元馬のことは、男夏の時だった時と状況はあまり変わっていない。選挙で隆介の対抗馬だったことも、選挙が激戦でわずから票差だったことも。当日、確実に元馬に入れてくれるはずだった生徒が10

人ほど休んだことも。10人は偶然、病気で休んだのであるが、隆介が裏で圧力をかけたのだというありえん噂が流れて、熱血漢の元馬がいきり立ったことも。元々、この二人が商売敵ということもあって仲が悪いことも。あの暑苦しいストリート感情の元馬が予想に反して人気があることも。まあ、モテモテ隆介に反感を持つ男子生徒とああいう熱血漢が好きな女子も意外といたということだが。

「橘くん、実は選挙後に源くんを副会長に迎えようとしたの。これはスクープよ。」

「へえ・それは知らなかったなあ。でも、それよく流れなかったなあ。」

「そこが、週刊乙女林の編集長、三ツ矢先輩のすごいところ。スクープは味付けをしてもっと大きくなった時に発表した方がいいという判断で保留になったの。」

「結果的には正解か。今回の体育祭決戦の結末いかんによっては、そのエピソードが記事に挿入されると言うわけだ。」

「ついでに賭けの対象になったあなたと源くんロマンスも。」

「えっ？ロマンス？」

（そんなもんあるのか？）女夏に聞く俺。（あつたかな）と女夏は首をかしげる。こいつ完全な確信犯だ。そういえば、さっき仕込とかなんとか言ってたわ。

以下は週刊乙女林の編集長、三ツ矢加奈子が源元馬本人や周りの証言を元に構成した話。

学校の食堂に向かって歩く元馬と男子生徒一向。

「元馬さん、この学校の女子、レベル高いですねえ。」

「ふん。女、女なんて言っていると軟弱になるぞ。男はしっかり前を見据えて己の信念に向かって突き進むのみ。」

「元馬さん、何、おっさんみたいなこと言ってるんですか。あれ見

てください。あの娘が立松寺華子、この学校でベスト3には入る娘ですよ。性格はキツイそうですが、たまに見せる笑顔に悩殺される男子生徒が多数だそうです。」

「ふん。キツイ女は好きじゃない。面倒くさいだろう。」

「元馬さんは、従順な女の子が好みですか。それなら、あそこ、あそこでお弁当食べてる楠井真里菜くすいまほな。あの子も乙女林ベスト3の美少女ですよ。真里菜ちゃんなんか、これが女の子こという感じで萌えますよね。」

だが、くるくるに巻いた長い髪を耳にかけながら、女友達と楽しそうに話をしている少女をちらりと見て元馬は、

「ああいう、女の子の子した奴も面倒くさい。」

と一刀両断。取り巻き男子は慌てて、

「元馬さんは、やっぱ、尽くすタイプですか。そうですね、女の機嫌をとつたりするのは硬派の元馬さんには似合わないツス。」

「それなら、あの娘がいいんじゃないですか。あの娘。」

取り繕うように話題の女の子を変えようとした男子生徒は、怒ったような声の元馬に驚いた。

「土緒夏か！あいつは隆介の女じゃないか！」

「いや、その元馬さん。ドーナッツちゃん知ってるんですか？」

「ふん。乙女林美少女ベスト3というなら、土緒夏は入るだろう。」

たんとんと語る元馬。取り巻きの男子はそれ以上聞けなくなった。だが、食堂でとんかつ弁当を買って教室に戻る途中、ふいに前方を歩いていた話題の女子生徒が階段を踏み外し、あるうことか元馬の

ふところへ飛び込んできた。抱きかかえるように体を支える元馬。その軽くてやわらかい感触に頭が真っ白になり、手に持ったとんかつ弁当が宙に舞って、スローモーシヨンのように階段下へ落ちる。飛び出た白いごはんと無残にも壁に張り付いたトンカツはあきらめるしかないと思ったが、体を支えてやった女の子と目があった。

「ご・ごめんなさい。あの・・。」

「危ないじゃないか。ケガはないか。」

「ありません。ありがとうございます。あの、お弁当、だめになっちゃって。あの弁当します。」

女の子は財布を取り出したが、

「いや、いい。それに今からでは売り切れだろう。」

「ご・ごめんなさい。それじゃ、これを。」

女の子は手にした紙袋から、チョコドーナッツを取り出した。ケーキ生地のだーナッツにチョコがかけてあり、クルミ粉がまぶしてある。それを渡すと女の子はそそくさとおぼれた弁当を片付けて、ぺこりと頭を下げ、

「お詫びはまた。」

と言って走り去った。

「元馬さん、それ、ドーナッツですよね。」

男子生徒が元馬が握り締めている紙袋を見てそういった。

「ドーナッツちゃんのドーナッツですよ。」

「あれが土緒夏か・・・」
「いやあ、いい娘こですよ。あのドジなところが天然でいい。生徒会長と付き合っているというのはデマで、フリーだという説もありますよ。」

「ふん。ドーナッツ1個で腹がふくれるか。」
「またまた、元馬さん。」

ちなみに女の土緒夏がドーナッツちゃんと呼ばれるのは、名前からだけではない。これも最近知ったこの世界の土緒夏の設定である。彼女が手作りで持つてくるドーナッツが絶品で、学校で評判となり、昨年の文化祭の模擬店で販売したところ、お客が殺到。その中にMブランドの大手ドーナッツチェーン店の役員がいて、そのドーナッツを企画して販売したところ、大ヒットしたという伝説があるのだ。そう彼女はミス・ドーナッツとしてこの町では有名なのである。そんなエピソードはさておき、出会った時はさらりと流した元馬だったが、次の日、モジモジして元馬の教室に入ってきた夏が3段重の弁当を持参してきた時には言葉が出なかった。弁当は1段目がおにぎり、2段目はトンカツやコロッケなどのポリュームなおかず。3段目に煮物や焼き物、和の食材が並び、持参してきた保温機能付き水筒からお湯をそそぎ、お吸い物を作って差し出す。元馬と昨日あの場合にいた2人の男子にせっせと給仕する夏。

「これ、ドーナッツちゃんの手作り？」

男子が夏に軽い口調で聞く。

「はい。あの、私、料理が得意なんです。昨日、源さんのお弁当、台無しにしちゃったので、今日はお詫びに。」

「いやあ、この煮物、おいしっす。ねえ、元馬さん。」

「ああ。」

ぶつきらぼうに答える元馬だったが、サクサクの衣のトンカツは昨日の弁当以上だったし、おにぎりも塩加減が絶妙で、今まで食べたおにぎりの中では一番うまいと思った。目の前の美少女が朝早く起きてエプロン姿で作っている姿を想像するだけで、頭がボーっとなつてしまった。

「あの、おいしいですか？源くん。」

「ああ。おいしい。」

「よかったあ……。夏、源くん喜んでもらってうれしいです。デザートはちよつと重いかもしれないけど……。」

「おおおっ……。うわさのドーナツちゃんのドーナツッ！！手作りのオリジナルだ。」

周りの男子が集まってくる。たくさんあるドーナツを夏は男子に配る。さりげない演出。さらに覗いた女子まで配る。うまい！男ばかりに配ってはうらみを買う。しかし……。

（おいおい……。女夏・お前、手作り弁当は反則だろ。しかも、こんな可愛い姿さらしやがって。これじゃあ、俺の出番なんかないじゃないか……。まあ、出番がない方がいいのだけど……。）

（リイが言ってたの。源くんも魔王候補だつて。真実の鏡に映っていたそうよ。）

（真実の鏡？俺に興味があると映るといふ奴？それじゃあ、親衛隊の男連中が何十人も映るだろう。）

（あなた、何も知らないのね。ただ好きだけじゃ映らないわ。運命的なつながりがないとね。大丈夫よ、そんなに候補はいないから。）
（そんなに？）

女夏の言葉に妙な引っかかりを覚えたが、回想シーンは続く。

この女夏は、手作り弁当でトドメをさしただけでなく、次の日にまたもや階段で足を踏み外し、転がり落ちる寸前にまたもや元馬に抱きとめられるというクサイ演出をしゃがった。

俺が生まれ変わって意識が戻る3日前のこと。立松寺とデートした日の3日前だ。抱きとめた元馬は根が単純な奴なので、これを運命的なものと感じたのだろう。いつもの素っ気無い感じでなく、顔をまじまじと見つめてた。

「また君か。」

「た・・度々、申し訳ありません。」

「あの・・夏さん。」

抱きとめた夏を軽く起してやり、手を離すと元馬は思い切ったように話しかけた。

「隆介とは付き合っているのか？」

「つ・・付き合ってはいません。」

さらに元馬が口走る。

「俺のこと、どう思っているの？」

「えっ・・・あの・・源くんはステキですけど・・。」

（魔王様かどうか分かるまでは、あ・な・たはキープ君よ。）

（ひでえ・・女夏！）

だが、ステキ・・を「好き」と聞き違えた元馬は、（おおおっ・・・。）。と頭が真っ白になって夏ラブラブビジョンになってしまった。なにやら誤解を解こうと必死に言っている夏の言葉なんか耳に入らない。

元馬ビジョン……。元馬にはこのように聞こえている。

「隆介なんかとは付き合ってますん……。なんでそういうこと言うの？夏は……。夏は……」

源くんのことスキだと思っているのに……。今、夏は隆介に付きま
とわれて、生徒会の書記の仕事、無理やりやらされているの……。
源くん、夏を助けて……。」

本当は、

「橘くんとは幼馴染だけで付き合っではいけません。私には運命の人
がいるから、それが誰だか分るまではいろんな人と出会いたいわ。
生徒会はそういうわけで運命の人と出会う場かな？なんて思ってい
るわ。ね？分ったでしょ、源くん。夏の気持ち分かった？」

（全然、違うよな……。絶対。）だが、ラブラブビジョン状態の元
馬、

「おう！夏さん、任させておけ。君を必ず、隆介の毒牙から救って
やる。」

と宣言した。

「あははは……。」

夏が何を言っても聞いちゃいない。

夏と謎の小学生（前書き）

第6部登場人物

エトランジェ・キリン・マニシツサ…天界の住人。見た目小学生だがリイと同級生の自称525歳。お人形のようなヨーロッパ顔なのに中国人が使うなまり日本語を話す。

新堂ひかる…高校1年生 かわいい男の子という風貌で上級生女子に人気の生徒会会計。でも、実は…

夏と謎の小学生

「だいたい、事情は分かった。それで、リイのことは」

立松寺にそう話を向けると、その当人、リイ・アスモデウスがぱつんぱつんのブラウスで現れた。スカートは小さくて超ミニ状態である。

（こんなイケナイ格好はまずいだらう！）

「ふふふ・・御台様の護衛として、私がこの学校に留学生と称して潜入した。一応、ステイ先は華子の家になっているがのう」

「ほんと、勝手ね」

立松寺がそういまいましそうに言った。

「潜入して分つたが、どうやらこの学校には魔王様候補が複数いる。あの源元馬もかなり確率が高い。今までの関係から橋隆介が一番近いと思つたが、あの御台様への執着心は、まさに魔王様の片鱗がある」

（執着心つて・・ただの早とちり、勘違い野郎だろ）

「それで俺が入れ替わる前から、やたら夏がコケて元馬に助けられる演出をしておいたということか？」

先ほどの立松寺の話から、計つたように階段でコケて元馬の胸に飛び込むお約束がクサイなあと思つていた俺はそう言った。おそらく弁当を作つて持つていかせたのも指示したのだから。

「仕込んでわけね」

立松寺が嫌味たっぷりと言う。こういう口調は何故だか妙に立松寺

の魅力を高める。

「それでリイは、元馬の側についてイベントを起してたわけだが、隆介よりも元馬の方が魔王様に近いと考えたということか」

「いや、実のところ、分らないのだ。魔王様である決め手がない。

二人ともお前のことが好きなのだから、候補には違いないが・・・」

「ふん。じゃあ、土緒君が二人にキスすればいいわけね」

立松寺の言い方は毒を含んでいる。

「あ、いや、ちょっと待て。立松寺、それはちょっと俺の人権というか、俺の気持ちか・・・」

確かにキスすれば、魔王が復活する。方端からキスしまくれば、魔王が誰だかはつきりするが、それをするとこの清楚なイメージの夏のキャラが淫乱、キス魔ギャルになってしまう。それはいくら男でも屈辱的というか、勘弁してくれの世界である。

「普通の悪魔ならそれもありがた」

リイは言う。夏は魔王様の正妻である。もし、そのファーストキスが魔王自身ではなくて、別の男に奪われたら・・・。魔王の怒りは計り知れない。夏付きの女官長であるリイとしては罪に問われかねない。

「だから、魔王様と確信するまでは、二人を対立させる。夏を巡っての対立なら本物の魔王様なら復活前でも何らかの兆候をお示しになられるはずだ」

「兆候ねえ・・・」

「そうしたら、女夏がちょいと誘惑すれば、一発で封印を解くこと

ができる」

「誘惑つて・・・そんないい加減な」

「華子ちゃん。本当にあなたはウブねえ・・・。男なんてちょっと誘惑すれば、据え膳は男の恥とかいって、やっちゃん動物なの。例え、魔王様でも・・・」

「それ本当？」

立松寺が怖い顔で俺に顔を近づける。おれは否定する。そうしないと首を絞められそうだ。

「今回の体育祭決戦。夏を賭けての対戦だから、真の魔王様ならず勝利をものにするはず。勝利した方が魔王様と言ってもいい」

「・・・・・・・・」

(それで勝った方に俺が勝利のご褒美キス？冗談じゃないぞ)

「まあ、お前たちが魔王様を見つけた理由は、私や御台様とは違うことは分っているが、見つけるまでは仲間同士、仲良くやろう。私は用があるからこれで失礼する」

「また、仕込みでもするんでしょうね。」

立松寺の毒の含んだ言葉を軽く受け流し、リイは去っていく。そういえば、あいつ、大悪魔の孫とか言っていたが、いわゆる地獄で人を裁く悪魔なんだよな。それが、ぱつんぱつんの制服を着たイケナイ女子高生だからギャップがありすぎである。ちなみにそのイケナイ姿に悩殺されてフラフラと近寄った男は、一撃で吹き飛ばされている。伊達に悪魔ではない。

「土緒くん、これはチャンスかもしれないわよ」

「えっ？チャンス？」

「これだけ大騒ぎになれば、リイの言っていた敵対勢力というのが何らかの接触をしてくるわ。私たちはその勢力とやらの力を借りる

かもしれないから。土緒くん、二人の間をつまぐ泳ぎまわって、二人の嫉妬心を燃え上がらせるのよ」

「それはそうだが」

「そうすれば、魔王とやらも正体を現すはず」

「だが、立松寺、もし、二人がその・・・あの・・・」

俺は男ならではの考えが浮かび、立松寺に告げようとしたが止めた。そう、もし二人が強引に迫ってきたら・・・。魔王じゃなくても女の子の弱い力では抵抗できない。ましてや魔王だったら・・・。キスされて・・・いや、濃厚なキス・・・いや、ヨメならそれ以上されてしまっうかもしれない・・・。

(うおおおおっ・・・。それだけは・・・それだけは勘弁してくれ！)

もしそうならば、立松寺とも永久の別れである。

「リーの狙いは分ったけれど、どうだろうね。恋心は計画通りにはいかないものよ。例え魔王だとしても。そうでしょ、土緒くんの中の女夏ちゃん」

そういつて、立松寺は俺の胸にそっと手を置いた。女夏に話しかけるように・・・。だが、傍らで二人を見ていた女子高生のグループは、

「うあ、立松寺さん、だいたぐん」

「やっぱり、あの二人あやし過ぎるよね」

「女の子同士で？わあ・・・ちょっとアレだけど、2人ともきれいだから絵になるよね」

その話し声が耳に入って、立松寺と俺は顔が真っ赤になってお互い後ろ向きになってしまった。

(くそ)、俺が男ならものすごくうれしい状況なのに・・・)

立松寺は用があるといって消え、他にすることも無い俺は家に帰ろうと玄關に行く。

外は雨が降っている。

(しまった！傘忘れちゃったぜ。)

走って帰ろうにもこの雨ではかなり濡れてしまう。立松寺を待っていつしよに帰ろうかと思ったが、駅までで家は別方向だから結局困る。

(隆介のやつ・・・普段は世話をしてやっているのだから、こういう時くらい送っていくよ・・・とか優しい気持ちにはなれないのだろうか?)

隆介は金持ちのボンボンらしく、毎日、スリーポイントスターが輝く高級輸入車で送り迎えされている。生徒会室はとくに空で後輩の新堂ひかるが、

「会長ならもう帰りましたよ」

とか言うので、夏を置いてさっさと帰ったらしい。もともと忙しい奴だが、男時代にはもっと付き合いがよかつたと思う。心の中で女夏が(橘くんは忙しいから仕方ないの!)と言い訳するが、少しでも好きなら気にかけてくれるはずだ。

(残念だ、女夏・・・)

どうしようか思案していると、ふいに大きな気配がしてそっと広げた傘を差し出すのが見えた。

「げ・・・元馬・・・いや、あの、源くん」

「夏さん、これを使え」

「えっ、でも・・・」

あの事件の後に元馬とあいあい傘で帰ったら、それこそ明日の号外が恐ろしい。それを察してか、元馬は、

「本当は一緒に帰りたけれど、今は君が困ると思うから、今日はこれでさよなら・・・」

傘を渡すと雨が降る中、駆け出した。あいつも大金持ちなのに、車の送り迎えはせず、体を鍛えると称して徒歩通学（電車も使わず2駅を歩くツワモノ）と聞いている。

「お・・・男の子だなあ・・・」

思わずつぶやいてしまった。それに夏のことを考えて傘を置いて自分は去る心遣い。勝手な男なら強引に一緒に帰るだろう。去り際も暑苦しいキヤラの割りに（爽やか）である。

思わず（どきゅん・・・）としてしまった。男に？女夏は心の中で（いい人よね。もしかしたら、源君が魔王様かも・・・）とつぶやいている。元馬に貸してもらった傘を差して校門を出る。まっすぐ歩くと大通りに出て駅は5分ほどである。校門のすぐ脇にスリーポインテッドスターの輸入車が停まっていたが、夏は気づかずに通り過ぎていく。頭の中は雨の中を駆けていく元馬の後姿が焼きついて視線は雨が激しく打つ地面を見つめている。

「なんだ、あいつ傘持っていたのかよ」

「お坊ちやま、夏様にお声をおかけしましょうか」

いつも送り迎えをしてくれる運転手の須藤が親切にそう聞いてきた。

だが、隆介は夏の後姿を眺めながら心とは正反対の言葉をだした。

「いい。出してくれ」

「よろしいのですか」

「ああ・・・」

もう一人、はあはあと息を荒げて玄関に走りこんできた人物。後輩の新堂ひかるだ。

「しまった。さっき、やっぱり言えばよかった。先輩と一緒に帰るチャンスだったのに」

彼の右手には大きい黒い傘が握られていた。残念そうにネクタイを緩め、シャツのボタンをはずし、パタパタと仰いだ。首元の下に見ようによっては「8」に見える黒いシミがちらりと見えた。

駅に着くと見慣れたランドセル姿の女の子が目に入った。妹の秋である。めずらしく女の子の友達を連れていた。秋よりも小柄ないかにも小学生という青いワンピースに短いフリル付きの靴下、丁寧につばの広い帽子までかぶっている。黄色い傘を差して振り返ると白い髪の美少女だ。あきらかに外人・・・と思ったら、俺の脳裏にとても嫌な感覚が走った。そうあのリイと同類の匂いがするのだ。その女の子はじっと青い瞳でこちらを見る。

「あつ、お姉ちゃん。今から帰るの？」

「ええ。秋、そちらの子は？」

「エトランジエ・キリン・マシニツサちゃん。今日、秋のクラスに来た転入生」

「エトランジエある。よろしくある」

ヨーロッパ顔なのに中国人の使う日本語。こいつ、キャラが強い。小学生だがあなどれない。だが、リイの言っていた敵対勢力ではなさそうだ。こんなガキが例えそうでも、リイと戦えるわけがない。

「ははは．．．いや、思い違い。思い違い．．．」

「．．．．．」

いや、考えすぎだ．．．。そう思った3分後、俺は後悔することになる。

「ランジエちゃんは、私と同じさくら組よ。私たち意気投合しちゃって、お友達になったの」

「秋はいい奴ある。お前の妹とは思えないある」

（お前？って俺のこと知ってるのか。）

「お姉ちゃん、私、図書館へ行ってから帰るから」

「あまり遅くなっちゃだめよ」

「はい。でもお姉ちゃんこそ、こんな早く帰るようじゃだめだよ。

男に車で送らせるようじゃないと．．．。それじゃねランジエ」

（大きなお世話じゃ。お前こそ小学生のくせに男に車で送らせるんじゃないねえ。）

いつぞや、それこそタクシーで帰ってきたことがあった。彼氏、と言っても小学生のガキであったが、どこぞの会社の御曹司だということだが、小学生は自転車だろ！

秋がいなくなったら、そのエトランジエ．．．何とかという小学生。急に俺の手を引っ張って物陰に連れて行く。小学生とは思えないものすごい力で。

「おい、魔王のヨメ。魔王はどこにいるアル」

いつのまにか取り出したと小さな杖を頬にぺたぺた当てる。言っておくが杖は魔法ステッキではなさそうだ。

「いや、今、そいつを探しているところで」

「ふん。私は天界から魔王を監視するためにやってきた聖獣キリン一族の者アル。魔王のヨメ、心配は無用アル。人間であるお前をどうこうすることは考えていないアル。私はお前の復活させた魔王を監視し、天界に害を成すなら倒すのが役目アル」

「倒すって、お前、その体で？」（小学生じゃ無理だろ！？）

「ふん、バカにするな。それでも私は525歳アル」

（こ・525歳？うそでしょ。。。人間ならババアどころか屍じゃないか。）

「いや、だけど私の護衛には魔界の伯爵令嬢とかいう奴がいるんですよ。あなたなんかにあいつをどうにかできるわけがないでしょ」

「ふん。リイ・アスモデウス、アルな。あ奴は私の同級生アル」

「ええっ？ど・同級生？」（ありえん。）

「生きる世界は違えど、同じテンペスト魔法大学で学んだ仲アル。

今回、敵味方に分かれたわけだが、私の実力は奴とはほぼ互角アル」

おいおい、互角だと？一方は魔界の大貴族の孫でパツンパツンのいけないアダルト女子高生、一方は天界の貴族でどう見てもお人形のような小学生。キャラが強い、強すぎる。

いったいどんなファンタジーじゃ？

「ナニディア・エレノア、マイグ、ナム。心の住人よ、今は眠れ・マインド・フリーズ・。」

エトランジェが何かぶつぶつ唱えると俺の右手を握った。凍りつくような感覚が脳髓まで響く。心の中にいた女夏が倒れこむのが分かった。

「な・何したんだ」

「なに。スパイを眠らせたアル。心配するな、心の中にいる女の意識は眠らせたアル。リイに報告することはないアル」

エトランジェが言うには、これから言うことは女夏には知られたくない。知られれば、リイに筒抜けになつてしまう。

「お前は男に戻りたいのだろうか？」

「ああ、ぶっちゃけそうですが」

「戻るにはお前が完全に女化する前に復活した魔王を倒さなければならぬアル。私が倒せばよいが、リイが護衛しては簡単にはいかないことも考えられるアル。」

エトランジェは、一本の短剣を取り出した。銀色に輝く刀身はゆるやかにSの字に曲がり柄には角の生えた馬が彫刻されている。

「アンスウエラーの短剣、別名、魂殺しの剣アル。あらゆる魔法を無効化し、魔王の魂を撃砕くことができるアル」

「これで隆介か元馬を殺すの？」

そんな恐ろしいことをするのか……。そんなことではできない。ブルブルと震えてくる。

「心配するなアル。アンスウエラーの短剣は生身の肉体は貫くことはできないアル。この短剣は心の中の魂のみを破壊するアル。魔王を刺せば、その魂のみ打ち砕くアル。そうすれば、魔王は元の人間に戻ることができるし、魔王がいなくなればお主も元の男に戻ることになるアル」

ニヤリと微笑するエトランジェ……。だが、その無邪気な微笑を見て俺の心の中は都合によりその話に疑問が湧いていた。（何だか、

都合がよくないか?) そもそも、こいつが天界の住人である確証はない。天界だから正義の味方という考えも人間が勝手に作ったファンタジーでしかない。

(信じていいのか?)

エトランジェが短剣の束に埋め込まれた宝石を触るとたちまち光と共に小さなペンダントに変わった。それを背伸びして俺の首にかける。

「念じて宝石に触れば、ペンダントは剣として実体化するアル」

「なあ、エトランジェ・・・」

「ランジェでいいアル。お前(男夏)と私は同志アル。もう一人、同志はいるが、お前のよく知っている人物だから紹介はしないアルな」

「えっ?同志?」

その疑問には答えず、ランジェはランドセルを翻して駆け出した。そして振り返る。

「それと魔王は体のどこかにアザのような数字の刻印が刻まれているアル。」

(数字のアザ?) いつの間にか女夏が目覚めてつぶやいた。

(それはいいが・・・体のどこかって・・・。どうやって確認するんだ?)

まさか、元馬や隆介なりをひん剥いて確認するわけにはいかないだろう。そんな事態を引き起こしたら、自分の方(貞操)が危ない。俺はすばやく携帯を取り出して、立松寺にメールを送る。

エトランジェに接触 奴を知ってる？

すぐ着信音が鳴る。

知ってるも何も

本日からホームステイですって。

勝手すぎるよね。

ブンブン

やっぱり……。そういうことが。どうりで立松寺は用事があるとか言ってたわけだ。おそらくオヤジからの連絡で、新しい留学生うんぬんがと言われたのだろう。

(しかし、立松寺の家には敵であるリイも住んでいるはずだ。敵同士一緒に住んでどうするんだ?)

立松寺の家で起こっている騒動は想像したくない。魔界も天界も人間界に出張所ぐらい用意したらどうなのだと思う。

夏と看病と男の闘い（前書き）

第7部 登場人物

朝日イズル…生徒会副会長 隆介を補佐する地味なメガネ男子

日下部めぐる…生徒会第2書記 活発系女子だが、実は…

新堂ひかる…生徒会会計 生徒会メンバーでは唯一の1年生 可愛い系男子で上級生女子のアイドル 密かに先輩である女夏のことが好き

夏と看病と男の闘い

翌日の放課後、生徒会の面々は体育祭の企画に向けて話し合いをしていた。生徒会長の橘隆介、影は薄いが着実に仕事をこなす眼鏡男子の朝日イズル（あさひいずる）、ショートカットの髪の一部をゴムでしばり、鉛筆を鼻と唇ではさんでおどけている活発系の女子、第2書記の日下部めぐる（くさかべめぐる）、会計の新堂ひかる（しんどうひかる）と夏の5人である。

「ひかるくん、何か飲み物を買ってきて」

俺は新堂にそう命ずる。こいつは夏の言うことなら何でもハイハイと言っことを聞く奴でまったくもってベンリー君なのであった。男時代もそういう奴だったが、女の世界でも同じキャラなので、便利にコキ使っている。副会長のイズルが、

「僕はコーヒーブラック缶、めぐるは？」

「私はミネラルウォーターでいい。太るから。」

めぐるは夏を見て自分のわき腹をプニプニした。別に太っているわけではないが、夏と比べるとダイエットしなきゃ・・・と自制してしまっ。

（ドーナッツちゃんは、いつも昼に甘いドーナッツなんか食べているのに・・・この差はなんなの〜。）

「私はカフェオレ、銘柄はどこでもいいわ。会長は佐藤園の渋いお茶ね」

俺は女夏に教えてもらった隆介のいつもの奴をひかるに告げる。

「了解しました。それでは夏先輩、行ってきます」

と自分に向って片目を閉じる。思わず可愛い・・・と思ってしまう本当に従順な少年である。お姉さんとしては、ついイジメてみたくなるのはなぜでしょう？

「白組は342名、赤組は350名です、ほぼ選挙結果と同じ数。男女比も若干、赤組は女子が多いですが、戦力的には拮抗していると言つてよいでしょう」

副会長のイズルがそう説明する。地味だが確実に仕事をする。続けて元気な女の子のテンションでめぐるが、

「種目は個人競技の他には、女だらけのコスプレ綱引き、男子肉弾棒倒し、男女混合騎馬戦、生徒会対抗リレーの4種目です」

と体育委員会から上がってきたメモを読み上げる。

「種目はともかく、女子はどうしてコスプレなのだ？」

怪訝そうにそう尋ねる隆介。(別にいいじゃないか、隆介。女子は可愛い方が目の保養になるぞ。)と心の中で俺は突っ込んだが、表情には出さずにニコニコやりとりを見ている。

「一般男子の意見が根強く、特に今回の対決する裏VS表生徒会の看板娘同士のコスプレがみたいということらしいです」

「めぐるちゃん、看板娘って？」

俺は一応確認する。

「いやですう。そんなのドーナツちゃんに決まっています。向こうはあの外人のリイとかいうダイナマイト娘。うう・・・うらやましい」

（いや、めぐるちゃんはそのままでいい。リイと比べるな！あいつはいろんな意味で規格外だ。それにしても・・・）

俺は女だらけの綱引きで、ナース姿の立松寺を想像した。いや、ナースでなくてもいい。バニースタイル？アニメキャラの魔法少女風ドレスでもいい。お堅い立松寺がそんな衣装を着たら、鼻血ものがある。

想像していたら、本当に鼻血がたれてきた。（バカバカ・・・なに想像しているのいやらしいわね。）女夏が心の中で叫ぶ。隆介がさりげなく、白いハンカチを取り出して夏の鼻を覆った。その瞬間、女夏と入れ替わった。

「いや、橘くん、だめ・・・汚れちゃう」

「動かないで、そうじつとしていて、そう下を向いて、そこ・・・そこを軽く押さえる。」

「そうそう、上手だぞ」

「ああん、だめ・・・たれて来ちゃうー！」

「止まらないぞ、夏。もう少しのガマンだ」

「もう夏、ガマンできない・・・」

会話だけ聞くと実に卑猥だ。それを聞いていたのか、突然、ドアが開いた！立松寺である。

「ちょっと、あなたたち、何してるの？」

顔を真っ赤にしている立松寺だが、ハンカチで鼻を押さえられてい

る夏と隆介は不思議そうに立松寺を見る。俺は心の中でたぶん大勘違いをしてしまった立松寺のドジさに萌えを感じてしまったが、今の主導権は女夏だから、リアクションが起せない。

「いや、その、あの……。土緒さんに用件があります」

耳まで真っ赤に染めた立松寺は、夏の手を引っ張って部屋の隅に行く。小声で聞いてきた。

「今、男の子？女の子？」

女夏は顔を赤らめて、（どうして赤くなる！）

「女の子」

「チツ……」

舌打ちをする立松寺。（俺）を待ってたんだ。）明らかに落胆顔だが、小さなメモを渡す。

「源くん、今日、熱で欠席よ。彼、下宿で一人暮らししているからお見舞いに行ったら」

「えっ……。源くんが熱？」

（ほっとけ、ほっとけ……。それより、立松寺に確認したいことがあるんだ。）

俺が心の中で叫ぶが、女夏は思案顔である。

（昨日、私に傘を貸したから……。体が濡れて体を壊したんだ。チャ・チャンス！）

生徒会室の隅に夏のかばんと借りた傘が置いてある。それをすばやく持つ。

「私、ちょっと用事ができたから、帰ります」

隆介やめぐるが何か言いかけたが、それよりも早くドアを開け玄関へと風のように走った。

(どうして急ぐ、夏。)

俺は女夏にたずねる。

「これはチャンスだわ。看病して源くんの体に数字の刻印があるか確認するの」

(いや、待て・・・やりようによっては元馬が危険になる・・・)
「危険って何が？」

(おまえ・・・まさかとは思うが。)

俺は口に出しかけた言葉を引っ込めた。どうも女夏のやつは、生まれながらの魔王のヨメというわりには、天然で無防備、男のことは何にも知らないネンネちゃんのような。これで魔界の女王が務まるのか？とまだ見ぬ魔界の将来を真剣に心配してしまう。

元馬の家は思いがけないところにあつた。2 駅離れた大きな屋敷が彼の実家だが、メモに書いてあつた住所は、学校からほど近いアパートであつた。立松寺がくれたメモ。

源くんの家は、とても大金持ちだけど、彼の家のしきたりで15歳から大学を卒業するまで学費以外の生活費は自分で働いて生活す

るんだつて。若いうちにお金の大切さを身にしみて分らせるためらしいわ。それで彼はアパートで一人暮らし。バイトを3つ掛け持ちしているらしいわ。ただの熱血、暑く苦しい男の子だと思っただけれど、ちょっとかっこいいね。

寺華子

立松

(確かにカッコいいと言えばカッコいいかもしれないが、金持ちの考えることは分からない。何を好んでこんな生活するのか。)

ポロアパートを見て俺はそう思ったが、女夏は積極的に階段を上り、源と書かれた表札のドアをコンコンノックした。返事がない。そつとドアノブを回すとカギが開いている。

そつと開けると1Kの空間が目に入った。6畳間に布団が敷かれ、元馬が熱にうなされている。周りは体育会系の男の子らしく、お約束でゴミだらけ。空き缶やら雑誌やら脱いだ服でいっぱい。台所はカップめんとレトルトの袋、洗っていない皿やカップでいっぱいであつた。

(いくらお約束でもこれはないだろう……。だが、何不自由ないお坊ちやまの一人暮らしならこうなるか?)

そう思ったが、同じお坊ちやまでも隆介なら、おそらくゴミ一つない空間で布団をたたみのふちがぴったり一致する位置に敷いて寝ているだろう。服はきっちりたたまれ、空き缶は銘柄ごとに並べられているはずだ。ある意味怖い。そう考えると隆介の方が魔王のような気がする。部屋を見た限り、元馬は人間くさい。同じお坊ちやまでも性格による違いは大きい。そんなことを俺は心の中で考えていたが、女夏はすばやく室内に入ると元馬の額に手をあてた。ものすごく熱い。かなりの熱だ。こんなでかい男でも風邪を引いて熱が出

るらしい。すぐ買って持ってきたアイスジェルのシートを額に貼る。

「病院に連れて行きたいけれど、私じゃ無理ね」

（おいおい、体を確認するんじゃないのか？）

女夏に確認する俺。

（パ・・・パジャマ脱がすなんて・・・夏、はずかしい・・・）

（何言ってるんだ、じゃあなんのために来たんだ！）

（いいの。それはあとで確認できるわ。）

実際、180cmの男子高校生を抱えて病院にいけるほどの力は女夏にはない。こういう時は安静と栄養のある食べ物だ。女夏はすぐ窓を開けて空気の入れ替えをし、掃除を始めた。

コトコト・・・シューシュー何かの音で元馬は目を覚ました。今朝感じた頭痛とめまいはなくなっている。携帯で学校を欠席するという連絡はしたが、やはり一人暮らしで病気になると心細い。目を凝らすと台所で仕事をしている人間がいる。腰の辺りまで伸びる黒い髪。見慣れた高校の制服、コンロでは何かが沸騰する音。

「土緒夏・・・夏？」

元馬は驚いて上半身を起す。土緒夏が自分の下宿で料理をしている。一瞬、彼女と結婚して新婚生活を始めたのではないかという元馬ラブラブビジョンに陥りそうになった。

「あっ・・・目覚めた？今、卵おかゆとお味噌汁作っているから」

「あ、ああ」

ちやぶ台に卵おかゆと豆腐の味噌汁が並べられた。グレープフルーツが一口大に切り分けた小鉢もある。まさか、隣に来てあーん・とかやつてくれるのか？と一瞬思ったが、さすがにそこまではなかった。夏はちやぶ台の対面に座り、頬杖をつけてじつと食べる様子を見ている。箸で一口おかゆをすすりこんだ。カツオぶしの味が体にしみ込む。単純なおかゆをここまでの味にするとは・・さらに味噌汁も濃すぎず、薄すぎず、味噌の香りを殺さない味付け。体力落ちた体にエネルギーが充填される。無言でかきこむ・・。

「ありがとう。おいしかった」

「どういたしまして・・。お風呂沸かしておいたから汗を流すといいわ。その後、暖かくして寝るのよ」

かちやかちやと食器を片付けながら女夏は言った。風呂のドアの前にはパジャマと下着がきちんとたたんで置いてある。奥さんなら最高のグツジョブ！言われるまま、元馬は浴槽に浸かった。もはや、頭の中は夏に対しては全てがラブラブに見える状態である。

（男の一人暮らしのところに普通、一人では来ないよな。彼女じゃないなら・・。）

（いや、あいつは昨日の傘のお礼でただで、義務感だろ。もしかしたら、隆介に命じられて俺の様子を探りにきたのかも。）

（いや、それならあんなうまい飯は作らないだろう？）

そんなことを考えていると、風呂のドアに人影が・・まさか・・。

（源くん・・お背中流します。）

バスタオルで体を包んだ土緒夏が！

(ふつつかものですが、未永くよろしくお願いします。)

おおおおおっ・・・ぶくぶくとせまい浴槽に沈む元馬。もちろん、そんなことが現実にかかるはずはない。ラブラブビジョンのなせる業だ。

長湯し過ぎて頭がボーっとなった元馬は(けっして、夏が入ってくるのを待っていたわけではない。)がらんとした部屋を眺めて現実に戻った。

「帰ったか・・・」

時計を見ると7時を回っている。(さすがに夜遅くまではいないよな。)(ふと見るとちゃぶ台の上に小さなメモが置かれている。

お風呂上がったら、髪を乾かしてすぐ寝ること。寝るが一番。

私は帰りますが、明日の朝、また来ます。だから、カギ借りるね。

土緒夏

最近、メールで短い言葉でメッセージを送るのが流行だが、こういう手書きのメモはとても新鮮だ。

(そっいえば・・・夏さんのメールアドレス聞いてなかったなあ・・・聞いたら教えてくれるのか?)

「明日、聞こう」

そっというと布団にもぐりこんだ。

(おい、女夏・・・おまえどういっつもりだ。)

(どっいっつもりって・・・。)

(結局、元馬の体に印があるか見なかっただろう。)

(あなたねえ、わたしも裸になっていっしょにお風呂に入れて言うの?)

(いや、それはまずい。あのラブラブモード元馬にそんな大サービ
スしたら、とんでもないことになる。)

(だったら、仕方ないじゃない。)

(だけど、さりげなくお風呂をのぞくとか、風呂上りにパジャマ着
せてやるとか、もっと方法はあったんじゃないか?)

(いやーん……。もし、源くんが魔王様だったら、そんな恥ずかし
いことできないよ。夏は清純で純粋な女の子なんだから……。)

おいおい、確かお前、魔界の女王がどうか言っただけ?と
いう突っ込みはやめた。よくよく考えたら、男の子の部屋に女の子
一人で乗り込んでいくのは、自分が男だったら、最低キスはOKで
しょ?と思ってしまうサインだ。例え、女の方がそんな気がなくて
も男の下心というのはそういうもんだ。男は何でも「今日はイケそ
うな気がする」ものなのだ。
だから、元馬が風呂を上がるまでいたら少々危険であつたと思うの
だ。

「夏、君もお風呂入っていけよ」

「えーっ、夏、恥ずかしいな」

「遠慮はいらさないさ」

「じゃあ、汗もかいたし、お風呂借りるね」

無邪気な女夏。ザーザーンとお風呂に入って、洗い髪をたくし上げ、
元馬の大きなパジャマの上だけを羽織ってお風呂から出てくる。す
ると元馬が、

「なあ、夏・・・今日は帰したくない。泊まっていけよ」

「えっ……。ど……。どうしようかな。源君が優しくしてくれるならいいよ」

パチッと消える部屋の電気……。見舞いに持ってきた花がはらりと落ちる。

（あなた、なに想像してるのよ。）

女夏の声に我に返った。鼻血がダラダラ出ている。元馬の家から帰り道、ハンカチで鼻を押さえながら、俺は自分の家へと急いだ。

次の朝、目が覚めたら心は男夏にチェンジしていた。心の中の女夏にせかされて、朝早く家をでる。元馬の家に行くのだ。まさか、朝から襲われないうとうという考えと昨日は成し遂げられなかった刻印の確認をするためだ。母親には学校で用事がある……。とウソを言っ出てたが、階段を下りる途中で夏の出かける姿を見つけた妹の秋は、

「ありゃ、男だわ。あゝあ、お姉ちゃんにもやっとな春が来たか」

とつぶやき、聞いていた父親が思わず、磨いていた歯ブラシを落とすってしまった。

（お父さん、お母さん、ゴメンナサイ。夏ははしたない女の子です。朝から一人暮らしの男の子の部屋へ行きます。でも、どうしても確認したいのです。彼が運命の相手、魔王さまかどうかを……。）

そう心の中でつぶやく女夏。

（バカヤロ……。行くのは俺だ！）

元馬のアパートの階段を登る。ドアに差し込まれた新聞を取り出し、昨日、拝借したカギを差し込んだ。ギーっとドアが開く。まだ元馬は寝ているようだ。そっと、台所に立ち朝飯の準備をする。心は男夏だが、実際に動くのは女夏。だから、手際よく朝食がつくられていく。今日はごはんに味噌汁にアジの干物、納豆という日本の伝統朝食だ。ほぼ出来上がったところで、寝ている元馬ところに行き、額に手を当てる。

「熱は下がったみたいね」

そして、そっとパジャマのボタンをはずした。シャツを着ずに直接パジャマだから、上半身が露わになる。

(うーん……。数字のアザはなさそうだぞ。)

たくましい胸筋や割れた腹筋が、体育会系らしい元馬を象徴していたが、上半身の前側は鍛えられた体にシミ一つなかった。

(後は後ろと下半身だが……。)

まさか、寝ている奴をひっくり返すわけにはいかない。顔を近づけて肩の後ろから見ようとしたりした時、元馬が目を開けた。昨日のメモどおり、土緒夏が来ている。そして異常な接近で、自分は上半身裸！思わず、夏の手首を掴んで押し倒す。元馬に組み敷かれて、俺は何もできない。

(や……。やばい……。)

「夏さん、また来てくれたのか」

怒り狂っている。俺にはなんとなく分かった。

「いやあ・元馬くん。熱が下がってよかったねえ。これ、お見舞いのフルーツ」

そういうと果物がごを床に置いた。そして土足のまま、2、3歩上がると台所に立っている夏の左腕をグイと掴んだ。そして自分のふところに引き寄せると、さっとお姫様だっこする。

(う・・・うああああ。)

俺は抵抗しようと足をバタバタするが、隆介の力の前にまったく歯が立たない。女は非力だ。非力すぎる・・・。

「夏、そんなにバタバタするとパンツが見えるぞ。」

そっと耳元でささやく隆介。俺は思わず脚を閉じる。パンツを見せてなるものか。

「こいつは現時点では俺のものだ。欲しかったら体育祭で俺に勝つことだな」

冷たい口調で隆介が元馬に宣戦布告をする。

「ふん。体育祭が終わった後に同じ言葉を返してやるわ。夏さんは俺のものだってな」

元馬も負けてはいない。

「・・・・・・・・」

俺は二人の剣幕に声も出ない。おいおい、夏を巡って男の戦い？少女漫画のヒロインならお約束の場面だが、実際に遭遇してみるといたたまれない。（私にためにケンカしないで・・・）などというお約束の台詞なんか、言える雰囲気でない。2人はしばらくにらみあっていたが、やがて隆介がドアを足で蹴り開けると夏を抱きかかえたまま、アパートの階段を下りた。そして待たせてあった車の後部座席にポンと放り投げた。

「きゃ・・・」

小さく悲鳴をあげて革シートに収まる俺。

「おい、隆介、今度は卑怯な真似するなよ。」

元馬が2階の通路越しに叫ぶ。

「俺がいつ卑怯な真似をした。」

「しらばっくれるな。だがな、俺の知ってる夏さんなら、卑怯な奴は許さない。体育祭でせいぜい嫌われないようにしろよ。」

隆介はペツと唾を履くと、忌々しそうに元馬をにらみ、車の後部座席に座りドアを乱暴に閉めた。

（やばい・・・完全に怒っている。）

俺は窓の外を見つめる隆介の横顔をそつとのぞいてどうしたものか思案している。これだけ怒った隆介はあまり記憶がない。いや、一度だけ、すごい剣幕で怒ったできごとがあったにはあった。小学生の時、クラスでいじめられていた女の子がいて、いじめっ子グルー

プの女子が無理やり隆介に告白させたのだ。ぶるぶる震え、泣きながらもたされた手紙を差し出す女の子。隆介はそれを受け取るなり、「負けるな○○。嫌がらせをされても中傷されても君が君自身であるために、こつこつ心にもないことは断固として断れ。強い心を持ってよ、○○。」

そういつて、泣きじゃくる女の子にハンカチを渡した。小学生なのにジエントルマンだ。そして、後ろに隠れて成り行きを、おそらく女の子がフラれるのを待つて笑いものしようとしていた女子グループに

「お前たち、最低だな。心の醜いケダモノめ。」

と冷たく言い放った。冷たい言葉に激しい怒りを感じた女子グループは、へなへなとその場に崩れた。とても小学生とは思えない態度。こいつは生まれたときから完璧な奴だ。だが、おれはふとこの記憶について疑問を持った。

(待て！この記憶・・・男の俺の記憶じゃない。こんなこと俺は知らないはず。)

女夏の記憶？だが、隆介が叫んだ○○・・という女の子の名前はつきりと思い出された。

そう・・・な・・・つ・・・である。

いじめられていたのは女夏。そう女夏は小学生の時にいじめられていた。この頃から成績がよく、可愛い容姿だったので、男の子に人気の夏。妬みから嫌がらせを受けていたが、持ち前の明るさで無視していたら、しだいに陰湿なイジメにあってしまった。

幼馴染の隆介に無理やり告白させられたのは、とても悲しかったが彼がイジメグループに一喝してくれたことでそれ以来イジメがなくなった。

とにかく、今の顔つきはあの人の心をもて遊んだいじめっ子グループに対して向けたのと同じであった。ちなみに隆介はこの告白もどきを皮切りに、いろんな女の子から告白されたがすべて断り、一時、女には興味ないので？？疑惑が浮上したが、単に女の子に対してヘタレだということになってしまった。

(どちらかという初夏に対してヘタレじゃないか？)

「あの・・・橘くん・・・怒っている?」

いつの間にか女夏に入れ替わった。俺としては、この状況を打破する考えが浮かばないのでほっとする。

(火に油を注ぐなよ・・・女夏)

「彼氏でもない男のところまで料理をするなんて感心しないな。君はいつからそんなはしたない女になったんだ」

「源くんとは何でもないの。この前の傘のお礼に・・・」

「本当にそれだけか」

その言葉に突然、胸がどきゅーんと何かに射抜かれたような感覚を受けた。隆介の言うとおりだ。

「おまえは僕の傍にいればそれでいいんだ」

「私は橘くんの彼女じゃないよ。橘君、今まで一度も好きだっけいってくれなかったよ。それなのにずっと傍にいろだなんて」

「とにかく、お前は俺のものなんだ。だれにも渡さない」

隆介がぐいつと肩を抱き抱え、夏を引き寄せた。顔が急接近する。

(ま・・・待て・・・今、キスされたらどうなる？こ・・・心の準備が・・・こいつが魔王なら、封印が解ける。魔王なのか隆介??)

(この強引さ・・・魔王様かも・・・。夏・・・行きます!)

今は女夏が主導権を握っているから、あるうことが目をつむりやがった。完全にOK状態だ。据え膳食わぬは男の恥・・・リーの言葉が思い出された。

(うああああああっ・・・。)

俺は頭を抱えて叫ぶ。

唇が重なる寸前、車が急に止まった。

「おぼっちゃま、学校に着きましたが」

運転席と後部座席を仕切る壁が電動で下がり、運転手の須藤が顔を出した。慌てて離れる2人。2人とも顔が真っ赤、両手でひざをぎゅっと掴んでいる。

「く・・・ス・・・須藤さん、タイミングが・・・悪い。」

言葉にならない隆介は、ドアを開けると車を降りた。(ナイスだ、須藤さん)俺は九死に一生を得た気持ちで心の中で運転手に対してグッジョブと親指を立てた。女夏は、

「ちっ・・・」

と舌打ちをした。

「あいつが魔王候補アルな。」

リボンが目立つ大きなつばの帽子をかぶり、ランドセルを背負った少女と高校生の少女が、車から降りてくる2人の高校生を見つめていた。

「キスされて封印が解かれた直後がもつとも魔王を倒しやすい時アル。だが、今は人間。人間の時は我々は手をだせないアル」

ランドセルを背負ったランジエが風船ガムをぶくつと膨らませながら言った。

「土緒くんが封印を解いて、ランジエが魔王を倒す。それで土緒君は元に戻る」

立松寺華子は、昨日、天界の使いと言うエトランジエ・キリン・マニシッサとの出会いを思い出した。幸い、リイは帰っていなかった。なのでこの小さい少女が天界から来たと聞いて、少々疑わしく思ったが、いろいろと情報を仕入れたのだ。

魔王候補はこの学校に複数いること。本物の魔王には数字の刻印が体のどこかに刻まれていること。人間界に降臨した魔王を倒すことが使命であること、天界と魔界は基本対立関係にあるが、それでも緊張を緩和するために交流があり、リイとは天界にあるテンペスト魔法大学と一緒に学んだ仲であること・などである。エトランジエも生徒会長である橘隆介がもつとも魔王に近いとらんでいるが、決め手に欠くのでさっさと夏が接吻してくれれば・とも言っ

た。華子としては夏がキスするのは、相手が男であつても何だか面白くないが、男の子に戻る手段がそれしかないならやむを得ない・・・と思つた。魔王である人間もエトランジェが言うには、魔王の心が破壊されるだけで、人間として生きていけるといふことだから、良心も痛まない。

だが、立松寺華子は賢い少女だ。エトランジェの言うことを100%信じているわけではない。彼女も天界と魔界と聞いて、常に善が天界だとは思わないのだ。寺の娘としてはどうかと思うが、父親の説得力なし説法の中に、正義と悪は表裏一体、正しいと思つても悪い場合もあるし、悪い行動も正義の心が動かしていることもあるというものがあつた。人畜無害な小さな女の子の姿をしているエトランジェ・キリン・マニツサが、正義も使者、救世主とは限らないのだ。そもそも、数字の刻印というのもリイは何も言つてなかつた。魔界のリイが知らない事実なのか、それとも何かの罠か・・・。そんなことまで考えていたら、リイが帰つてきた。

「あゝあ、疲れた疲れた。どうしてこの私が程度の低い学問を学ばねばならないのだ。」

ぶつぶつ言いながら、エトランジェと目があつた。

「おおおつ・・ランジェ！」

「あああ・・リイ！アルか。」

がっしりと抱き合う二人。

「久しぶりだ、ランジェ。」

「リイこそ、この人間界になんの用事アルか？」

「いやあ・・ちょっと遊びに来たつてとこで、ランジェこそ、どうして？」

「私は人間界のグルメツアーってところアル。」
「はははは・・・。」

明らかなウソの理由を述べる二人。二人とも笑っているが、立松寺華子は、二人の目が笑ってないところを見抜いていた。

（この二人・・・本当は仲悪い。）

実際、リイは内心、

（ちえ・・・このチビがしゃしゃり出てくると面倒だ。さつさと、魔王様を覚醒させて魔界に戻らないと。まあ、このチビでは御台様の高校にはいけないだろうから、私の方が有利といえは有利だ。問題は御台様の中の男と華子だな。この分じゃ、華子はランジエに取り込まれたといっていいか。）

ランジエも笑いながら冷静に頭の中を整理する。

（リイのヤツ、相変わらずド派手で淫乱な体アル。どうせ魔王のヨメの護衛とかいって、自分が魔王を食っちゃうつもりだろうアルが、その前に魔王は私が退治するアル。考えようによっては、魔王は私に感謝するアル。）

とりあえず、附属小学校にしか潜入できず、高校に入って夏の行動を見守れないランジエに代わって立松寺華子が夏とリイの動きを報告する。

「とりあえず、橘隆介と源元馬の2名は要チェックアルが、夏に絡んでくる男子生徒は要注意アル。」
「分ったわ。」

夏と体育祭

生徒会VS裏生徒会の体育祭決戦の日がやってきた。大会は午前中のオーソドックスな個人競技、午後には生徒会が企画した工夫を凝らした団体競技がある。個人競技は戦力が拮抗するだけに一進一退の攻防。午前中の競技を終えて白組245対赤組250とわずか5点差。勝負は午後の団体競技に持ち越された。

「意外に白組やりますねえ。源元馬のカリスマ性は会長と違うタイプですが、なんとか力になりたいと思わせる何かを持っているということですかね。」

イズルは外した眼鏡を拭きながら、昼食の食べ物をつまんだ。中庭に会長の隆介、副会長のイズル、書記のめぐる、会計のひかるが丸くなって囲んでいる。料理は隆介が手配した5つ星フレンチレストランのオードブルから、老舗の寿司屋から届けさせた握りずしなどが並ぶ豪華絢爛の食事であるが、夏が作ってきたおにぎりや揚げなどのおかず、様々なチョコでコーティングされたMブランドのドーナッツも並ぶ。

「まあ、こちららも会長のカリスマに魅せられてがんばっているわけですが、4つの団体競技の点は大きいですから、どちらが勝つかはわかりませんね。」

1年生の新堂ひかるが無邪気に語る。めぐるは、先ほどから黙りこくって食事している会長の隆介が不機嫌そうな理由を考えていた。イズルもひかるもこの雰囲気を変えようと話しかけているのだが、当の会長が反応しないので白けた空気が漂い始めている。

不機嫌の原因は、隆介がプロの作った料理には目もくれず、夏の手

作りのおにぎりやおかずを食べていることから分かる。

(ドーナッツちゃんがないからね・・・。)

いつもクールな会長が、ここ数日二人の様子がおかしいのは女の勘で分かった。夏が傍にいと機嫌がいいが、どこかに出かけるとたんに短気になる。

(まあ、いつかこうなるのは分かりきっていたけど・・・。やっと会長も自覚してきたみたいね。でも、お姫様はいつまでも待っていないぞ。)

そう、夏は持ってきた料理を並べると自分はちょっと用事が・・・と言って姿を消したのだ。

手におにぎりとおかずが入ったタッパーと紙袋に入ったドーナッツを持っていたから、誰かに届けることは間違いない。その誰かは・・・めぐるが想像するまでもなく、皆さん分かっているだろう。

「あの、源くん」

ここまでの健闘をたたえ、チームメイトと談笑をしていた元馬は、恥ずかしそうに声をかけてきた夏にもものすごく緊張した趣で応えた。

「あ、ああ。夏さんか。ち・・・調子はどう?」

「あの、お昼ごはんはどうかかな?とと思って、あの・・・おにぎりとおかずたくさん作ったから、おすそ分けに」

「おう。サ・・・サンキュー」

手渡しでちょっとだけ指が触れる。あのアパート以来の対面なので思い出すと二人とも照れてしまう。夏は元馬にそっと包みを渡すと

くるつと背を向けて走り出した。途中、止まると振り返り、満面の笑みで、

「午後もお互いががんばりましょうね！」

と叫んだ。それを見つめ、思わず右手を挙げる元馬。周りにいた男子生徒たちは、

「おいおい、どう思う」

「なにが」

「元馬さんとドーナツちゃん、いい雰囲気だよな。」

「ああそう思う。あんな元馬さんのだらしない顔見ないもんな。ありゃ、完全に魂を抜かれているぞ」

「この競技に元馬さんが勝つと元馬さん、ドーナツちゃんと付き合えるんだよな」

「俺、何だか応援したくなってきた。元馬さんのためにがんばるぞ！」

おーっ！と団結を高める取り巻きの男子生徒たちであった。

走りながら、俺は心の中にいる女夏に話しかける。

「おい、女夏」

「なによ」

「おまえの言ったとおりにしたけど、隆介から元馬に乗りかえるのか」

「はあ？ふざけないで。両方に粉かけているのよ」

「面倒だな。数字の刻印を見つければいいんだろう。二人の着替えをのぞくとか、無理やりシャツ脱がせるとか、いろいろやり方はあるだろう」

「だから、そんなはずかしいことできないよ」
「俺がやってやるぞ。キ・キスなんかで確かめるのはなしだからな」

この間、危なく隆介に唇を奪われそうになったが、あのままやっておけば、事態は動いたのは確かだ。少なくとも隆介が魔王かどうかは分ったはずだ。あの時はキスしなくてよかったと思ったが、今から思えば男とキスという屈辱を乗り越えてやればよかったのだ。

(なんなら、元馬を誘惑してキスしちゃう手もある。この際、男に戻るためにはこの屈辱を乗り越えるしかない。)

そうじゃないと立松寺とのラブラブ生活は当分お預けとなる。リイはこの体育祭で勝ったほうが魔王とか言っていたが、勝とうが負けようがいいじゃないか？などとも考えていた。

(まあいい。それより、今度は俺の用事の番だ。)

(仕方ないなあ。)

今度は俺の意思で別のところへ向かう。もちろん、立松寺のところだ。立松寺はこれまたおいしそうな手作りお弁当を広げて、待っていてくれた。

「り・立松寺・ごめん」

「ううん。今、準備できたところだから」

うあああ・・・可愛い。あの立松寺がお弁当を作ってきてくれて、一緒に食べるなんて！

おいしそうにおにぎりをほおばり、玉子焼きにたこさんウインナーをかきこむ夏を立松寺は愛しそうに見て、水筒から熱いお茶を注い

だ。はい・・・と言って夏に渡す。それを受け取る時に指が触れ合う。思わず俺はコップごと立松寺の手を握る。見詰め合う二人。

「ねえ、ねえ。あの二人」

「うああ、手なんか握って」

「やっぱり、立松寺さんとドーナッツちゃんて、付き合ったりして」「ええっ・・・女同士で・・・いやだあ」

その黄色い声でまたもや現実に引き戻される二人。

(うつうつ・・・早く男に戻りたい。戻って、お似合いの二人なんて噂されたいものだ。)

午後の部が始まった。

女だらけの「コスプレ綱引き」

高校でこんな卑猥ひわいな競技が許されるか？少々疑問だが、自由と自制心を校訓にするこの乙女林高等学校では、生徒の自主性に任されている。もちろん、コスプレも教育上許す範囲での・・・ということ。白組は巫女さん姿、赤組は動物の着ぐるみ姿である。もちろん、その手の方々に喜んでいただけよう、巫女さんは袴が少々短くというより、八百万の神様も鼻血が出てしまいそうない短さ。短い袴と称するミニスカと白いニーソックスの間にある絶対ライン・・・。特にダイナマイトボディのリーの姿はイケナイ度150%、男子生徒はもう釘付けである。対する赤組は動物の着ぐるみといっても、もこもこのショートパンツに同じ生地の手でシャツ。おへそが出ているのがミソ。手と足にはそれぞれの動物の手足を模った手袋に靴。尻尾に頭には耳まで付いている。セクシーさでは白組に負けるが、可愛さ100倍である。夏はトラをイメージした縞柄、立松寺は猫、めぐるはお猿さんの格好である。

「土緒くん、生徒会って真面目な集団のはずなのに、この競技はなんなの。」

立松寺は不機嫌そうだ。だが、猫のコスプレをしているから怒った顔もまったく可愛い。

「立松寺さん、これは体育委員会からの持込企画なので、生徒会とは関係ないデース。」

めぐるがおサルさんの格好で言う。まあ、この格好は彼女の性格にあっているといえば合っている。だが、この格好では言葉の説得力は若干落ちる。

「まあ、いいんじゃないの？私は立松寺のこんな可愛い姿が見られるだけで幸せ。」

「もう、エッチね。土緒くん。」

真っ赤になる立松寺。ヤバイ・・・この可愛さは反則である。思わずフラフラと抱きしめそうになる。だが、その俺もトラコスチュームで周りの男子の視線を集めている。この格好で立松寺を抱きしめたりしたら、それこそ「ゆり」の世界へようこそ！である。

（た・・・耐える・・・土緒夏！）俺は自分に言い聞かせた。

そう自制心呼びさますように天を仰ぐ俺の姿は、長い足にトラ柄のブーツ、小さめのお尻にはトラ柄ホットパンツ。上半身がTシャツの代わりにビキニで耳の代わりに角をつけたらアニメの世界の住人になりそうだが、あくまでもトラである。

「うあああ・・・見るよ、ドーナッツちゃんの格好。可愛い。」

「あのおへそ出ているところがいいよな。やべえ、夢に出てきそう。」

「隣の立松さんとめぐるちゃんもいいよなあ。」

「俺はやっぱり、リイ様。外人で巫女さんは反則。リイ様。」

じろじろ見ながら勝手なことをいう男子。だが、つい先日まで俺も同じ仲間であったことは事実。そうなること。健全な男子高校生の行動はただ一つ。

（うあ、俺、今晚、野郎どものオカズになっちゃいそうだ。畜生、せめて、立松寺だけでも・・・）

そつと立松寺に寄り添う。奴らにこの姿を見せてやるものか！だが、ピタツと寄り添う美少女2人。ますます違う意味で注目を集める。コスチューム以外、ルールはいたってシンプルである。綱を引っ張りこめば勝ちである。

（ここは勝たないとは思うが・・・リイの奴しだいな。）

もし、生徒会が負けたらどうなるのか？元馬は夏と付き合う宣言をしたものの、夏もモノじゃないから彼女自身の意思と言うものがある。すんなり鞍替えるわけがない。が、負けた方が事態が動くような気がする。これまでの様子から隆介が何かアクションを起す。逆に生徒会が勝てば、元通り。邪魔な元馬は排除。元のまったりとした関係に戻る可能性もある。昨日、キスしそうになったからあのような関係に戻るかは微妙だが。

競技が始まった。巫女さんとアニマル軍団の壮絶な縄の引き合い。俺も一応、力を出して引っ張るが、所詮は女の力だ。大した貢献はできない。参加している女の子たちも可愛い格好をしているから、

必然的に必死に引つ張らない。いかに可愛く引つ張るか。気になる男子が自分のことを見ているかもしれない。

だが、終了寸前、引き分けか？と思ったときに一瞬、ものすごい力で引き寄せられた。動物軍団はみんな転んで引きずられる。

(リイか！あの野郎・・・)

あいつは人間の女の姿をしているが、正体は魔界の大悪魔の孫娘。こんな綱引きなどちょっと力を入れれば問題ない。リイは完全に勝ちにきている。

(リイの奴、元馬にこれだけ加担したら、隆介が魔王でも勝ってしまっただろ！)

俺はリイの奴をにらんだが、リイは涼しい顔で無視する。

(リイには考えがあるのよ。)

(どんな考えが？)

(もし、橘くんが魔王なら劣勢に追い込まれても奇跡の大逆転を起すはずよ。逆に源君が魔王なら魔界の力を自然に使って勝ったという事だよ。)

(リイの加勢も魔王の運命・・・必然ということか。)

2回戦も簡単に動物軍団は引き寄せられ、最後はもみくちゃ状態。

俺なんかは転んだ拍子に前にいた立松寺の足の間に顔が来てムフフ状態。ついでに思わずグイと掴んでしまったのはめぐるの小さな胸。その他女子の体にもみくちゃにされる。男だったら超ハーレム状態である。立松寺にこのだらしない顔を見られたら確実に殴られるだろうが、みんなごちゃ混ぜだからまったく分らない。(よかった。)

)

元馬は勝って帰ってくる女子選手を労い、リイが来るとポンとハイタッチをする。

隆介はというと顔色一つ変えていない。ある意味大物だ。

綱引きは裏生徒会の白組の勝ち。このポイントが10点。255対250で白組が逆転した。白組は俄然盛り上がる。次は「男子肉弾棒倒し」。言葉だけ見るとこれもなんだが、卑猥な感じがするが、れっきとした棒倒し競技。赤白の陣営に立てられた長さ5mほどの3本の棒を地面に倒せば勝利である。棒を持ち守るチームと相手の棒を引き倒す攻撃チームに分かれて多少の殴る蹴るありの激しい競技である。この競技は男子限定だから、夏たちは応援するしかない。バカ力のリイも出られないから競技に悪影響は与えないはずだ。

「これに負けると15点差がつく。さすがにやばいよ。」

「俺たちのドーナツツちゃんが、あの元馬の彼女になっちゃうのは嫌だよな。」

赤組男子たちは、土緒夏と源元馬が2人で仲良くデートしている姿を想像して身震いをした。

(くーっ・・・あいつだけにはそんなうらやましいことさせねえ。)

「いくぞ!」

「おおおおっ!」

何だか勝手に士気が上がっている。

夏はそつと隆介の下に行く。もちろん、励まして心象をよくするためだ。

「あの・・・橘くん、がんばって」

隆介は先ほどの昼食時のことが頭にあっただろう。少々、ぶつきらぼうに、

「ああ」

と言ったきりで沈黙が流れる。(うあああ、男の嫉妬だよ。これは・
。。)

「お前、あっちには行かなくていいのか？」

ひどく冷たく隆介が白組の方を指差す。(えっ。。。)
ドクン。。。心臓が鳴る。俺はここは「フラグ」が立つと認識した。
答えを誤まると隆介の愛情を高めるところか、冷めさせてしまう危険を嗅ぎ取った。

(ここは涙だ！涙しかない！！) そう思うと大きな瞳に涙を浮かべる。女はここぞと言うときにはなぜだか涙が出るもんだ。

「ひどい。。。橘くん。源くんとは何でもないのに。ひどいよ」

隆介は慌てて、

「ご、ごめん。ちょっと意地悪だった。ごめん」

「今日負けたら、私は源くんとお付き合いするなんて全校の前で約束しちゃったけれど、本当にいいの？」

「負けないさ。。。俺は負けない」

「橘くん。私、信じてるから。。。」

うつつうつ。。。いいね。このラブストーリー。俺は内心ほくそえんだ。隆介ラブは本物だ。

(だが、ごめん・隆介。俺はお前のことなんとも思っちゃいねえ。俺は立松寺一筋。お前が魔王の可能性が高いことが分れば、キス一発で目ざめさせてやるぜ。その後、その魔王を倒せば・・・)

(ふん、そんなことさせないわ。) 女夏がつぶやく。

「けがしないようにね。」

そついうと俺は右手を挙げた。隆介は軽くパチンと合わせる。

赤組リーダーの生徒会長、橘隆介はこの競技、棒倒しについて明確な作戦案を持っていた。それをみんなに伝える。3本の棒はそれぞれ、1年生、2年生、3年生が守っている。攻めるのは自由だが、なんとなく1年生は1年生の陣地へ、2年生は2年生の陣地へ攻め寄せる。正面に対峙しているからそうなるのだが、隆介の作戦は簡単だった。3年生は2年生を攻め、2年生は1年生、1年生は3年生を攻める。棒は2本倒せば勝ちだから、相手の3年生の棒は倒せないが、力関係から言えば2年生と1年生の棒は早く倒せるはずだ。ピストルの合図で競技が始まる。まっすぐ直進する元馬は、赤組の攻撃チームがクロスして異学年の陣地に攻め寄せたのに驚愕した。(アノ野郎くずるい手使いやがって) と思ったが、ルールで禁止されているわけではない。守り側と互角の勝負を繰り広げている白組に対して、赤組は圧倒的な有利な立場と

「ドーナッツちゃんは渡さないぞ〜。うおおおっ・・・」

と叫ぶ土緒夏親衛隊の男子どもの活躍もあり、たちまち守りの生徒を蹴散らし、1年生と2年生の2本の棒を引き倒す。

「うああ。鮮やか。これだけ見ても隆介の方がリーダーとしては一

枚上手だな」

黄色い声を出して応援しながら一部始終を見ていた俺はそうつぶやいた。

「でも、源君も個人的に見るとすごいよ」

立松寺が言うとおり、確かに攻め側に回った元馬は、迎え撃つ守備側男子生徒をなぎ倒し、蹴倒し、棒を守る集団の頭に乗って棒にしがみつき、ついには2年生の棒を引き倒した。その姿、まさに鬼神のごとく。その豪傑ぶりに同じチームのリイすら、思わず見とれてしまう。

（彼が魔王様なら、私は好みだ……。隆介のような知将タイプもいいが、元馬のような勇将もまた魅力的。無論、魔王様であるならだが・・・）

「女夏さんは、どちらが好みなの？意外とああいう力強い殿方もいいですよ。」

立松寺がそう俺の心の中の女夏に話しかける。

（そうなのか？女夏）俺はたずねる。

（知らないわ・・・）と言いつつ、鮮やかな勝利を収めみんなに肩車される隆介よりも悔しがる元馬を見ている女夏。その目・・・まさにヨメの眼差し。

（こりゃ、揺れているなあ。元馬ポイント1ゲット！ってことが。隆介、うかうかしていると、おまえ、俺に振られるぞ。）

2回戦はまたもや隆介の作戦が光った。スタートと同時に1、2年

生の攻め手は合流し、2倍の戦力で、白組1年生の棒に襲い掛かった。たちまち粉碎される1年生の棒。さらにその勢いに乗って2年生の棒に襲い掛かる。元馬が自ら赤組3年生の棒を引き倒した時には、3倍の攻撃陣の突撃に崩れ倒れる白組の2本目の棒が視界に映ることになった。

「わあ、かつこいい生徒会長〜」

「赤組男子もがんばったねえ」

俺はめぐるや立松寺たちと凱旋してくる男子にハイタッチをする。

「うおおおっ・・・ドーナッツちゃんの手に触ってしまった!」

「俺なんか、ドーナッツちゃんに声かけてもらったぜ」

ちよつと微笑むだけで、張り切る赤組男子ども。まったく単純な奴らである。

これで赤組10点プラスで赤組再び5点リード。次は男女混合の騎馬戦だ。騎馬戦は男子3人で作る騎馬に女子が一名乗る。時間以内に相手を全滅させるか、大将を倒せば勝ちとなる。もちろん、赤組の大将は夏。騎馬は隆介、イズル、ひかるの生徒会メンバーだ。白組大将はリイを乗せた元馬の騎馬が務める。格好は先ほどのコスプレのままだから、リイは巫女姿にキリリと鉢巻。夏はトラ娘で赤い鉢巻である。

「夏には悪いが、この勝負は負けられない。リイ、狙うは大将の夏一騎」

元馬は白組メンバーに激を飛ばす。この競技で勝たないと苦しくなる。だが、彼の擁するリイ・アスモデウスは留学生の女子学生に化けていても本来の姿は、悪魔だから、並みの力ではない。騎馬戦では赤組の女子をバツバツとなぎ倒す。騎馬が当たったところで、

リイが押せば上に乗った女子なんかは軽く落ちる。たちまち、夏の騎馬までたどりついた。

「隆介ももらったぜ」

「させるか！」

先頭の元馬と隆介がぶつかると、頭と頭をぶつけ、一步も引かない。

「御台様・・・悪いがゲームをおもしろくしないといけませんので」

リイの手が夏の体を押そうと近寄ってくる。だが、突然、時間が止まった。

（バトルエリア展開？バカな、誰が・・・）

バトルエリアとは人間界において異世界の者が戦闘行為等に及ぶときに展開する空間のことで、人間にはこのエリア内で行われたことは見えない。その時だ！リイの目には一筋の光の矢が夏の心臓めがけて飛んでくるのが映った。

（マ・・・マジックミサイル！御台さま・・・ダメだ・・・避けられない！）

光に胸を貫かれ、倒れる夏の姿を想像する・・・。だが、夏を支える先頭の隆介ががくつとひざを着いた。これにより夏の体が沈み込む。光の矢は夏の右肩をかすめる。ふいにバトルエリアが解除された。止まっていた風景が動き出す。夏はトラのコスチュームが破れ、はらりと上半身がはだけるので慌てて胸を押さえる。このハプニングに全校中の男子が注目する。たぶん、彼らには突然、服がはだけておっぱいが見えそうになっているというおいしい事件としか認識していないであろう。若干、肩の柔肌から鮮血が飛び散りながら俺は

完全にバランスを崩す。

「きゃああああ．．．」

思わず、悲鳴をあげてしまう俺。だが、痛みよりも落ちるなら可憐に落ちないと．．．と一瞬思ったが、その思いとは別におマタおっぴろげで落ちてしまう。両手は胸を意地でも隠しているから、地面に叩きつけられるはず。と思った瞬間に二人の男の腕に支えられて地面に落ちた。上半身は隆介、下半身は騎馬を崩しながらも飛び込んで来た元馬。よりによつて、足と足の間に元馬の顔が．．．ついシヨックで足を閉じたから、必然的に元馬の顔を太ももで挟んでしまう。

「うああああ．．．」

元馬の慌てた声。

「うきやああああ．．．」

俺の叫び声。しなくていいサービスをしてしまった。二人とも顔が真っ赤である。隆介はというと少し不機嫌そうに夏を抱き起こす。

「ケガは大丈夫か、夏」

「うん．．．ありがとう。橘くん、源くん」

一応、隆介と元馬にお礼を言う。元馬は照れ隠しか、

「腰を打つと将来、赤ちゃんが産めないからなあ．．．」

と微妙なセクハラ発言。だが、こいつが言つと妙に説得力がある。

しかし、あの光の矢は何だったんだ……。もし、隆介がバランスを崩さなければ心臓を貫かれていた。肩をかすめた威力からして、たぶん、恐ろしいことに死んでいたに違いない。

(どうして、騎馬戦で本当に討ち死にせねばいけないのか！)

冗談じゃない。肩に受けた傷から血が流れる。と騎馬を組んでいた新堂ひかるが自分のシャツを脱いで夏の肩に羽織らせた。

「ぼくのは競技前に新品に着替えたから、まだ汚れていません。保健室まで羽織っていてください。先輩・・・」

「あ、ありがとう・・・」

そうお礼を言った俺の目に新堂ひかるの上半身の裸体が映った、首の下ところに「8」の数字のようなあざを・・・。

(えっ・・・8・・・うそ！)

(パシリの後輩が魔王？)

隆介に抱きかかえられるように保健室に連れて行かれる俺は呆然となった。

リイは光の矢が放たれたと思われる校舎屋上に走った。そのスピード、まさに悪魔の如し。

そこには小学生姿のエトランジェがいた。彼女も今到着したといった感じだ。

「ランジエ、犯人は見たのか？」

「いや、私がここに来た時にはもぬけのカラある。」

天界の住人と魔界の住人は基本、敵同士であるがリイにはエトランジェが夏を殺そうといしたなんてこれっぽちも思っていない。魔王のヨメである土緒夏は人間であり、天界の人間は人間を殺すことはできない。それは天界の絶対ルールであり、掟である。現に魔王候補の男子生徒には、魔王として覚醒するまでエトランジェは手出しができないから、何のアクションも起せない。魔界はどうか。自分は魔界の代表として魔王とヨメである土緒夏を守る立場である。そしてこの行動は魔界の主流派である祖父による指示である。だが、魔界の反主流派にとっては、人間界の魔王は覚醒しない方がいいのだ。魔王を覚醒するというヨメを殺せば、それこそ危ない橋を渡らずにすむ。覚醒された魔王は強力な力があるが、ヨメの方は人間の小娘に過ぎないからだ。

（ちっっ・厄介なことになった。あの小娘まで本当にガードしないといけなくなるとは・・・）

リイは屋上から、運動場で競技を続ける小さな人間たちを眺めながら思った。

「リイ・・・お互い私たちの任務は、簡単なものではないあるな・・・」

エトランジェはそうつぶやいた。

「そりゃそうだ。私は魔王様を守り、お主は場合によってはその魔王様を倒す。不倶戴天の敵同士ではあるが、魔王様を倒す敵が魔界の者なら、我々には共通の敵。覚醒前の魔王はまだ人間。お前は人間を害す魔界の住人は見逃すわけにはいくまい。」

「複雑アルな・・・」

エトランジエは雲が厚く覆った空を見上げた。
ポツリポツリ・・・と雨滴が落ち、突然、ものすごい雷雨となった。
体育祭は最終種目を残して中止にせざるをえなくなった。まるでこ
の後の展開を暗示するかのようにな・・・。

リイによれば、今回の襲撃は魔界の過激派の仕業らしいということ
だ。魔界の秩序を乱し、自分が牛耳ろうとする勢力があるらしく、
転生する前の魔王を倒そうと試みる奴らがいるらしい。中には魔王
には適わないから、魔王を覚醒させるという正妻候補を亡き者にし
ようと試みるものもいるという。

(おいおい、俺は人間だぞ。魔界の刺客なんか襲われちゃ、命が
いくつあっても足りないぞ。)

夏と橘家夜会パーティ（前書き）

9話の登場人物

塚菱裕一郎つかびしゆういちろう：パーティの客人。新興IT企業のオーナーしかし、実

は前〇王

塚菱葵つかびしあおい：裕一郎の妻。裕一郎が前〇王なのでその正室。つまり、夏

の先輩

夏と橘家夜会パーティ

体育祭は中止になり、赤組と白組の対決は引き分けという中途半端な結果になった。裏生徒会と生徒会の争いも隆介が元馬を2人目の副会長に任命したことで解決した。週刊乙女林は見出しで、

源元馬、副会長に抜擢！ 裏にドーナツツちゃんの愛の仲裁が！！

とぶち抜き、夏が隆介と元馬の仲を取り持つてこの結果になったとありえない論調であった。ただ、結果的にタイプの違う有能な人材が生徒会を運営することになり、学校としてはよい方向になる。このニュースをトップで伝えた週刊乙女林は飛ぶように売れて編集長の三ツ矢加奈子の辣腕が光る結果ともなった。

まあ、以前から橘隆介は有能な人物を生徒会に入れたがっていたので、元馬を生徒会副会長にすることは予定どおりであった。もう一人の副会長のイズルは実務で隆介を支えるタイプで、元馬には自分の代理となつて活躍を期待していた。もちろん、生徒会に入れることで彼を夏に接近させることは嫌だったが、隆介曰く、

「敵は自分の見えるところにおくに限る。」

らしい。自分が知らないところでこそ夏に手を出されるのは、最近の出来事で身にしみたらしい。プライドの高い元馬は、隆介の下で働くことを引き受けるとは思えなかったが、夏と毎日顔を合わせられることは悪くないと思つたのだらう。とどめは、隆介に頼まれて、元馬に女夏が、

「源君、一緒に生徒会の仕事してくれると夏うれしいな！」

の一言で決まった。その誘いに夏ラブラブビジョンに陥った元馬は、夏と一緒に生徒会の仕事を妄想した。日暮れの生徒会室で生徒会だよりを印刷する二人。

「源くん、このプリント一緒に運んでくださる。」

「ああ、君には重いだろう。貸せよ。」

そうやって、全校分のプリントを抱える元馬。

「すごい！元馬くんって、たくましいのね！インテリでひよるひよるの会長より、ずっとかっこいいわ」

そうやって、元馬のたくましい背中にぴとっ……とくっつく夏。

（ありえねえ。）

「夏さん」

そうやって振り返る元馬。拍子にプリントがくずれ部屋に散らばる。床に倒れこむ二人。

「わ……ごめん、重いだろう。」

「ううん……。源くん……大スキ」

そうやってそっと目をつむる夏。舞い上がったプリントがゆっくりと落ちてくる。

（わわわわ……やめろ！元馬、妄想でも俺を穢すな！！）

元馬が副会長になるとともに、立松寺も俺の懇願で第3書記に任命。主に第1書記である夏の補佐をすることになった。リイも生徒会直属の風紀委員会委員長となった。

(ちよい待ち！あいつが風紀委員会委員長・まず格好からお前が一番、風紀を乱しているだろう！！)

と叫びたかったが、風紀委員会は生徒会役員の護衛も任務なので、リイとしては本職の仕事がやりやすいこともあっただろう。当然引き受ける。隆介としては、できるだけ生徒会の人数を多くして、元馬が夏に手を出せないようにという考えもあった。

さらに附属小学校の児童会長と言って、あの小学生に化けた(見たまんまの)エトランジェ・キリン・マニッサが生徒会室に現れたのには驚いた。隆介曰く、

「附属小学校のランジェ児童会長さんだ。高校の生徒会活動を直に見て、勉強をしたいそうで、しばらく我が生徒会のお手伝いをしてくれるそうだ。」

ランジェが天使のような微笑で挨拶をする。

「お兄さん、お姉さん、エトランジェ・キリン・マニッサ、6年生アル。生徒会のお仕事を勉強させてもらうアル。よろしくアル。あっ・・私のことランジェって呼んでいいアルから」

そうやって、俺に抱きついてきた。身長が足りないので俺のお腹に顔をつけてスリスリする演技。だが、天使のような微笑でなく、にやりとして小声で、

「くくく・・これで私もおまえを堂々と監視できるアル。」

と言いやがった。だが、何者かに殺されかかったのは事実だし、リイによれば魔界の反体制派の一味かもしれないという話もある。ただ、リイには他にも心当たりはあるようで言葉じりがはつきりとしていなかった。魔界の反乱分子というなら、天界のランジエが傍にいた方が都合がいいのは確かだ。それと・・・。

(新堂ひかるの体の刻印NO.8は気になる。何とか二人きりになれないものか?)

(二人きりになってどうするの?まさか、キスするとか・・・)

女夏がそうたずねる。

(うーん・・・)

夕暮れの夏の部屋。窓から赤い日の光が差し込み、夏の体がシルエツトになってひかるの目に映る。制服のボタンを一つ一つはずす夏。

「先輩どうしたんですか。」

無邪気な口調だが、唇が少々震えているところを見ると、そうやらこの後の展開を想像しているらしい。かわいい男の子のくせにおマセさん・・・。

「ひかるくん・・・家には誰もいないわ。お姉さんの頼み聞いてくれない?」

「どんな頼みですか?」

「ふふふ・・・こんなに体を硬くして・・・怖がることないわ・・・オネエサンに任せなさい」

そう言っつてひかるを押し倒す夏・開いた窓からカラスの鳴き声が聞こえる・・・。

(ま・・まで！女夏・・変な想像するな！)

(だって、ひかる君とじゃ、こういうシチュエーションしか考えられないでしょう？年上がリードしなきゃ。)

(だが、年下と言っつても1つ下だし・・・。体も自分よりは少しだけ大きい。)

(まあ、私としてはひかる君が魔王様なんてちよつとがっかりだけど・・・。やっぱり、たくましい方がスキ。やっぱり魔王様なら夏のこと守っつてくれなきゃ。)

(はいはい・・・)

「そついえば夏。今週末、橘グループの夜会パーティーがある。出席してくれないか？」

隆介がピンクのバラの模様があしらわれた封筒を手渡す。夏だけでなく、めぐるや立松寺、新堂ひかるや朝日イズルにも渡す。(もちろん、リイ、ランジエにも・・・)

「ふん、毎年恒例の橘グループの自慢パーティーか、お得意様だけじゃ寂しいから、知り合いを呼ぶのか。」

嫌味を言つ元馬。だが、元馬の肩を叩いて、同じ招待状を差し出す隆介。

「君にも毎年、案内しているはずだが、一度も来たことはないな。今年も欠席か？」

「ふん。行くに決まっている。源家のパーティーに比べ物にはならな
いだろうが、一度みてやるよ・・・」

悪態をつくが行く理由はタダ1つだろう・・・。

(夏が行くから・・・)

元馬は逆手に取って、自分の家のリムジンでみんなを橘邸に送ると
宣言。たぶん、一緒に行きたいのは夏一人だっただろうが、夏に声
をかけたなら立松寺も・・・というし、立松寺を乗せれば、めぐるも乗
せなきゃかわいそうだし、立松寺の家に行くなら下宿しているリイ
とランジエを無視するわけにはいかない。イズルやひかるは男だが、
同じ生徒会メンバーだから無視するわけにはいかない。元馬は心熱
い男なのだ。

「おまえはホストだから、客を待っている。夏さんたちは俺が送迎
するからな」

「ちっ・・・」

隆介は少々おもしろくなかったが、実際、自分が迎えに行くのは不
可能だから仕方がない。まあ、これだけの人数ならクルマの中では
何もできないだろう・・・と自分に言い聞かせた。

高台にある橘家の本邸で行われる夜会パーティーは、市長をはじめ
町の名士や経済界のお偉方が集まっていた。その客人と一緒に婦人
やら令嬢、橘家の親類縁者、友人も多く列席している。夏はオレン
ジのドレスを身にまとい、元馬に手をとられてリムジンから降りる。
続いてサクラ色の着物で清楚な出で立ちの立松寺(これが萌え〜)
さらに可愛らしいピンクのドレスのめぐる、タキシードのイズルと

ひかるが続く。

（いやあ・隆介の奴の家に来るのは、小学生の時以来だがあいかわらずでかいなあ。。）

心の中でつぶやく俺。女夏はクスツ・と笑いやがった。

（私はよく来ていたから珍しくないわ。。。）
（マジかよ。）

そうこうすると、パープルのドレスにクリーム色のショールをまとった妙齡の女性が近づいてきた。

（隆介のかあちゃんじゃないか。）

「夏さん・よく来てくれました。今日は楽しんでいてね。」

大金持ちの奥様らしく、美しくて優雅だ。

「はい・お母様。」

「まあ、可愛いわ、夏さん。今日のドレスはよくお似合いですわ。ああ・私も娘が欲しかったわ。3人とも男ですから。そう夏さんが隆介のお嫁に来てくれればねえ。」

「やだわ、お母様・ご冗談を。」

（おいおい、女夏、お前、どれだけ媚び売ってんだ。）

（ふん・伊達に小学生から来てないわ。人間のままだったら、ここにお嫁にすれば玉の輿決定！しかも、橘君は3男だから気が楽だし。）

ちえ・・・本当にこいつはしたたかな奴だ。顔は可愛い顔しているのに腹黒い。いや、よく考えれば妹の秋も同じような性格だし、姉妹としてはよく似ている。それにしても・・・

(女の子がみんなこんな風に計算高いのか。立松寺も?)

そうサクラ色の清楚な和服に身を包んだ立松寺を見る。いや、彼女だけは違う。立松寺はまっさらで純白な女の子なのだと思いたい。いつ見ても自分が惚れた女は可愛く見える。立松寺も視線に気づいてこちらを見る。うん・・・ラブラブだ!

「ほう・・・あれが今度の正室候補か。」

2階のバルコニーから、白いタキシードに身を包んだ男がつぶやいた。髪をオールバックでかけていたサングラスを少し下にずらして到着したばかりの女客を見つめた。年は30代前半というような風貌だが、落ち着いたというより物腰にかなり威厳がある。

「なかなか初々しいお嬢さんでありますこと。」

傍らの女性はこれまたセクシーで燃えるような赤いドレスで開いた胸元から豊かな胸の谷間がのぞいている。ボン、キュッ、ボンのダイナマイトボディだが、気品あふれる物腰から卑猥な感じはこれっぽちも感じない。

「おまえの後継のお嬢さんにあいさつでもしてくるか」

「ふふふ・・・まさか、ご興味がわかりですの。殿下」

「もう殿下はよさないか。わたしもお前もこの世界では新しい役割を担うのだ」

「はい、あなた、分っていますとも」

2人はゆっくりとバルコニーから下の階への階段を下りていく。

「夏、よく来てくれた。」

会場で客と談笑していた隆介は、夏たちを見つけるとすぐ駆けつけてきた。さっと右腕を差し出す。

(ここに手を入れる？つてことか？)

考えるまでもなく主導権を握っている女夏はさっと腕を組む。満足そうに元馬を見やる隆介。元馬の顔は明らかに悔しそうであるが、傍らの立松寺と腕を組む。俺としてはこちらの方が気になる。思わず、元馬の顔をキツ・・とにらみつけたくなるが、今は女夏が体を支配している。この尻軽女は、にっこりと元馬の方に微笑みを浮かべた。その顔を見て元馬の奴はなにやらうんうんうなずく・・。おそらく勝手なラブラブビジョンを発動させているのだろう。めぐるはイズルとひかると手を組んでいるし、リイはど派手なドレスとこれまたド派手な扇を手に持ち、隣には小学生の学芸会でお姫様役ですか？というランジエが立っている。

元馬ラブラブビジョン発動！

目と目を見つめて言葉をかわす、夏と元馬。

「源くん、パーティー会場でケンカはよくないわ。今はガマン。他の男にエスコートされて腕を組んだって、私はいつも源くんのパートナーよ。」

「うんうん・・夏さん、俺は分かっているよ。今日は隆介のパーティー。奴にちょっといい思いをさせてやるくらいなんてことはないさ。」

俺はスケールの大きい男だ」

「ステキ・源くん。心の広い男の子って大好き!!」

目と目が合っただけでそんなドラマが起こるわけねえ。元馬のラブ
ラブビジョンに不可能はないとはいえ、毎回、出演するのは勘弁し
てくれである。

「隆介くん。こちらのお嬢さんたち、紹介してくれないかい。君の
大切なお客みただから。」

「あつ、これは塚菱さんと奥様」

隆介がかしこまる。先ほどバルコニーから夏のことを見ていた夫婦
である。

「こちらは塚菱裕一郎さんと奥様の葵さん。裕次郎さんは、今ほと
きめくIT企業、デビスターライトグループの経営者です。僕の経
営学の先生でもあります」

携帯ゲームややネットショッピングサイトの運営で巨大になった新
興のIT企業の名前を口に出した。夏もよく知っている会社である。

「こちらは僕のクラスメイトの土緒夏さん、立松寺華子さん・・・」

隆介が一人一人紹介する。塚菱裕一郎は大会社の経営者の割りに若
く気さくで、隆介の友人たちと握手をする。

「元馬くんはめずらしいなあ。源家のご子息は修行の最中だから、
こういう華やかなところにはあまり来ないと聞いているが。今日は
何か理由があるんだろうね。」

そういつて片目をつむる裕一郎。

「はい、いや、さすが、お見通しですか」

頭をかいて照れ隠しをする元馬。ちらりとこつちを見てくる・・・。

（いやいや、お前の態度は誰が見ても俺狙いだって分かるさ。）

「こちらのお嬢さんたちは外国のお友達ですか？」

そうリイとランジエを見る。その顔を見てリイの顔が蒼白となる。ランジエも驚いているようだ。裕一郎がひざまずくとリイはしおらしく手を出す。

「あ・・・あの・・・ま・・・いや、塚菱さまにお会いできてリイ・アスモデウス、光栄であります。奥様もお会いできて光栄です。」

「リイさん、あなたの祖父様にはお世話になりましたから、そんなにかしこまらなくていいのよ。任務ご苦労様。これからが大変ですわね」

「は・・・はい」

（おいおい、リイの奴、なんであんなに緊張してんだ。あの奥さん、リイのおじいさんを知っているみたいだし・・・えっ？リイのおじいさんって、地獄の大悪魔だったような。）

「前魔王夫妻アル。今は引退して人間になっているアルが・・・」
ばそつとランジエがつぶやく。

（ええええええええっ・・・。）驚く俺。女夏はというと、ポツとなっている。

（前魔王様ってステキ・・・。私、意外と年上趣味かも。）

おいおい、年下のひかるを誘惑するのどうのと言っていないかったかこの女……。俺はランジエに確認をする。

(前魔王ってどういう意味だ。)

「ふん。魔界の魔王は任期がきたら交代するアル。任期は20年、その後、人間界に降臨する次期魔王と交代するアル。引退した魔王は元の人間に戻って生活するアル。ちなみに傍らにいる夫人は、彼を覚醒させた前正室、おまえの先輩アルな。」

俺はまじまじと夫人を見る。エレガントでセクシー、まさにセレブ夫人だ。将来の自分の姿を重ねる・・・

(ちょっと待て！俺は男だぞ！立松寺と結婚するならともかく・・・)

混乱する俺の前に裕一郎がすっと立つ。違和感なく、夏の右手を取って軽くキスをする。

「君が夏さんか。まあ、いろいろあると思うが健闘を祈っているよ」

「あ・・・あの・・・それはどういうこと・・・」

「心配しないでいいわ。あなたにも選ばれた意味がきつと分かるわ。ごく近いうちに」

そう塚菱葵が笑顔で話しかけてきた。意味深であるが、いったい何が言いたいかさっぱり分からない。だが、彼らと別れて数分もしないうちに痛切にその意味が分かることとなる。

夏たちと別れた裕一郎はこれまで苦楽を共にしてきた妻に尋ねた。

「どうだった。君の後継の印象は」

「まだ自覚していない小娘って感じだけど、侮れないわ。当然、お見抜きでしょうが、彼女の周りを見ると正室候補が必ず備えている能力の巨大さが分かるというもの・・・」

「正室候補が持つ能力、カリスマか。だが戦闘力は未知数。今の状況でカリスマのみで乗り切れるか・・・」

「あなた・・・私も最初から強かったわけじゃありませんことよ」

「そうだな・・・さて、どうやら、始まるようだぞ」

決意を秘めた顔で夏たちに駆け寄るブルーのドレスを着た女性を目に留め、裕一郎がそうつぶやいた。

「側室戦争の始まりだ」

夏と側室戦争〜前哨戦（前書き）

第10部 登場人物

ファナ・ド・マウグリッツ：元魔王の側室No.8 女夏を倒して
正室の座を狙う野心家 魔槍ロジエールの使い手
メディア・レイヴァーン：元魔王の側室No.13 ファナに誘わ
れて側室戦争に加わる。双剣のクリスナイフの使い手
ドミトル・ラ・ツエッペリ伯爵：魔界の過激派 ファナの暴挙に使
乗して女夏の命を狙いに来たが根っからの女好きなので、魔王から
夏を寝取ることにしたいいけ好かないキモイケメン。

夏と側室戦争〜前哨戦

「我が名はファナ・ド・マウグリッツ、側室ナンバー8、次期御台様にうらみはないが、我、戦いを望む。いざ、下克上たらん。」

ブルーのドレスの貴婦人がどこから出した？という長い槍を振りかざして夏に迫る。

突き出された槍の先がわずかに届かず、のけぞった俺の顔ぎりぎりで止まった。

(危ないじゃなか！冗談抜きで死ぬ!!！)

今は女夏が体を動かしている。この女の運動神経だと第2撃は絶対かわせない。

(いや〜・・・夏・・・死んじゃいます〜)

(バカ・・・竦んでいないで逃げる!)

(だって、ドレスが邪魔で・・・)

周りはバトル空間で時が止まっている。人間には時間が止まっている異空間。ここで例え大爆発が起こってもまったく気づかれないだろう。この空間で動けるのは・・・。

(そう)

「御台様を守れ！イージスの盾!!！」

その動けるリイの叫びとともに、自分の目の前にガラスのような大きな盾が現れた。ファナと名乗った女性の第2撃が弾かれる。

「くっ・・・リイ・アスモデウス。魔王の側室たる私の邪魔をするのか」

赤いドレスのド派手なリイが、夏とフアナの間に立つ。

「側室様とは申せ、前魔王様の任期が切れた今は失業の身でいつらしゃると存ずるが」

「だからこそ、この側室戦争で勝つためにここへ来たのだ。その正室候補を倒せば、私は側室どころか、正室の地位を得られる」

「ふん。側室戦争か。確かに正室候補を倒せば、それに代わる事ができるというルールもあるが、長い魔界の歴史でそういうケースは一度も起こったことはない」

リイはこれまたどこから取り出したか分からない、大きな金色のハンマーを振りかざした。

「それは私のような有能な護衛がいるからだ！」

懇親の力を込めてハンマーを地面に叩きつける。ものすごい地震が起きてフアナも夏も地面に倒れる。そのショックで俺に主導権が帰ってきた。

（ちょっと待て！このピンチに俺が対処するの??勘弁してくれ）

「くっ・・・。あらゆる物理的な攻撃を封じるイージスの盾が展開されたなら、今度はこちらの攻撃か」

フアナは両手の手の平を向けると目を閉じてすばやく呪文を唱える。3本の光の矢が現れ、ターゲットを夏に向けた。

「魔法の攻撃はイージスの盾では防げまい。貫け！マジックミサイル！！」

光の矢がこちらに向ってくる。

「魔法は無効化される！モーリュの盾」

今度は七色に光る盾が自分の前に展開される。4本の光の矢が弾かれた。

「さすが、アスモデウス家のご令嬢というところか……。有能な護衛ということは認めよう。だが、所詮はお前も私の前ではその小娘の正室候補と同様に小娘に過ぎん」

「小娘かどうか、私の力を見てからおしゃっていただきたい。アスモデウス家直伝のイージス、モーリュの盾が展開されては、いかに側室様とて御台様に触れることすらできない。」

ファナ・ド・マウグリッツは右手の甲をで口元を隠し、高らかに笑い声を上げた。

「フォーホホホ……。まだ、小娘ちゃんですわ。私の側室ナンバーは8。シングルナンバーにお前程度の防御魔法は通用しない。」

ファナの持つ槍が青白く輝き始めた。ファナの全身も青いオーラに包まれる。

「触れるものには死を与えるダイヤモンドの魔槍、ロジェアール……。全ての防御に死を与えん……」

青い光が一閃となつて、夏の前に展開されたイージスの盾とモーリユの盾が風船が割れるように弾けとんだ

「バカな・・絶対物理防御と絶対魔法防御が破られるわけが・・」

「絶対といつてもそれは術者の力量しだいアル。シングルナンバーの側室に守り一辺倒では歯がたたないアル！出でよ、すべての魔を滅する槍、ゲイ・ボルク」

二人の戦いに割って入ったランジエの頭上に光り輝く槍が出現する。それは猛スピードでファナに襲い掛かるか、ファナは華麗に手を広げ、後ろへ宙返りをして避ける。だが、ゲイ・ボルクは消えたとその着地点に3方向から現れ突き刺す。が一瞬でファナは消え去り、右手に瞬間移動する。さらに追撃するゲイ・ボルクの槍を手にしたダイヤモンドの槍ロジエールで弾き飛ばすと息も荒げず、

「魔界と天界の小娘でようやく、私と対等に戦えるというわけか。おもしろい。正室を倒す前にまずはお前たちだ」

にらみ合う3人。目をはずさず、リイは夏に叫んだ。

「御台様・・お逃げください。ここは私たちが引き受けます・・」

「バトル空間で動けるのは戦闘可能な魔界か天界の関係者のみアル。普通の人間は触れることすらかなわぬアル。動ける奴らには気をつけるアル。」

ランジエの忠告を聞きつつ、俺は走った。ドレスがひらひらして邪魔だからすそをビリリ・・と破って右太ももが露わになったが、死ぬよりはマシだ。

「冗談じゃない・・なんでラブコメの展開からバトルモードになる

んだ。」

（魔王様の妻になるための試練じゃないの。）

この状況でのん気なことをつぶやく女夏。こいつは天然娘か？

（じゃあ、代わってやる。お前が主導権を握ってあいつと戦えよ。正室なら秘密の技とかで叩きのめすことができるんだろ。）

（やだあ・・・そんなはしたないこと夏には無理ですう・・・）

だめだこりゃ・・・この運動神経ニブチンの女が主導したら、たちまち八つ裂きにされてしまう。それなら俺の方がまだマシだ。バトル空間では人間は見えるが存在しないことになっている。パーティー会場にいるお客や隆介に元馬、めぐる、イツルもその場で立っているものの、幻影みたいなもので触れても突き抜けるだけ。3Dの映像に過ぎない。清楚な和服で決めている立松寺にも触れられない。

（ちくしょ・・・ここで殺されたら立松寺と会えないじゃないか！）

すると前方の左手からこれまたブラックのゴスロリファッションのドレスを着た女が夏を見つけて突進してくる。

「見つけたぞ！我が名はメディア・レイヴァーン。側室ナンバー13。いざ、参る」

両手に短剣を持って襲い掛かってくる。（やばい！）

すぐ右の通路に飛び込んで逃げる。2人目の刺客に捕まったら今度こそジ・エンドである。だが、相手は魔界の住人（見た目は美しい美女ではあるが）走って逃げたところではいつかは捕まるに違いない。

「リーの奴、護衛とか何とか言って役に立たないじゃないか！」

そう悪態をつくが、リーとランジエが手強い敵と自分のために死力を尽くして戦っていることは事実であり、彼女たちのためにも捕まるわけにはいかない。廊下を曲がり、十字路を今度は左に足を進める。だが、曲がったとたんにグイツと右腕を掴まれ、部屋に引つ張り込まれた。思わず叫びそうになったが、口を手で押さえられた。

「先輩・・・静かに・・・」

聞き覚えのある声。冷静に頭を整理すると後輩の新堂ひかるであることが検索された。

「ひかるくん・・・あなた動けるの？」

後から考えれば妙な質問であったが、その時はそんな言葉しか出てこない。

「先輩、まずは隠れましょう。」

ひかるは部屋に備え付けられていた大きなクローゼットの扉を開けると一緒にその中に入った。たくさんの服が2段に収納されており、奥にもぐりこめば姿が見えないようにできそうである。ひかるは夏を奥の壁に押し付け、自分がそこに覆いかぶさるように体を寄せ、夏の頭を右手でそつと押さえる。

「静かにしてください・・・。どうやら、部屋に入ってきたようです」

耳を澄ますと確かにドアが開かれ、部屋に侵入してきたらしい足音

が聞こえてきた。

「くそ・・・こちらに逃げたことは間違いないが・・・どこに隠れた？」

そう言つて、部屋の隅々を探している気配を感じた。しかも、だんだんクローゼットに近づいてくる・・・。ギー・・・と扉が開けられる。夏の両肩を掴んだひかるの両手に力が入り、ぎゅうつと、夏を抱きしめる。ひかるの心臓がトクントクンと鳴るのが聞こえる。いつも使いパシリをさせていた後輩が思いがけず頼もしく感じる。

扉は開けられてほんの2、3秒でボタン・・・と閉められた。廊下の物音に気づいたメディアは、大急ぎで部屋を出て追跡を開始したようだった。

静寂が戻りつつあったが、まだ自分を抱きしめる後輩の男の子の力強い抱擁が続いていた。

こんなに力があるようには思っていなかったが、やはり男子である女子である自分よりも力が強いことをあらためて感じてしまう。

「痛いよ・・・ひかるくん・・・」

思わずか弱い声でそうつぶやいてしまった俺。この可憐な声が草食系と思われた後輩の男子の野生を目ざめさせてしまった。

「ごめんなさい・・・先輩・・・」

と言いつつ、少しだけ体を離れたひかるだったが、急に思い直したのかグツと夏の体を引き寄せて強く抱きしめる。

(えっ・・・ちよつと・・・ちよつと・・・)

思わぬ展開に戸惑う俺。女夏が、

（このバトル空間時に動けるのは、魔界か天界の関係者よ・・・もしかしたら、ひかるくんが魔王様??）

（じゃあ、動けない隆介や元馬は魔王じゃないのか?）

（覚醒前の魔王様なら人間と同じように動けないと思っけれど、逆に人間であるひかるくんが動けること自体おかしいわ。）

（そりゃそうだが・・・）

上目づかいでちょっとだけ背の高い後輩を見る。すると真剣な眼差
しで自分のことを見つめているではないか。

「先輩・・・ぼくは・・・前から、先輩のことが・・・大好きです!」

（えええええええっ・・・うそ!）

心の中で叫ぶ俺。女夏は冷静にネクタイを外したひかるの首もとの
を見た。そこには8の字に見えるアザがあった。

（数字のアザを持つ人間は魔王である・・・とランジエは言ったけれ
ど、少なくともこの空間で動けるということは、魔界か天界の人間
であるということ・・・）

ひかるが顔を近づけてくる。体は押さえつけられているので逃げる
ことができない。顔を背いて拒否の意思を示すこともできたが、混
乱してしまって目を見開くだけで固まってしまった・・・。そっと
重ねられる唇・・・。

（うあああああああ・・・）

男とファーストキス・・・いや、幸いファーストは立松寺としたから、

セカンドキスだ。

だが、重なると同時にまばゆい光がひかるの心臓から放たれ、その場にうずくまってしまった。光はさらに強くなる。

「ちょっと・・・ひかるくん・・・どうしたの！」

思わず大きな声を上げてしまう。だが、この声に先ほど部屋を出て行ったメディアに気づかれた。足音が近づいてくる。俺は急いでクローゼットから飛び出る。ひかるはクローゼットの中でうずくまっている。

（魔王として覚醒するのか？）

少し気になったが、今はメディアが戻ってくることの方が重要である。彼女の狙いが自分であるなら、自分がこの部屋を出ればとりあえず、ひかるに害が及ぶことはないだろうと思い、部屋を飛び出した。

予想どおり、メディアはヒラヒラのゴスロリ服をもともせず、自分を追いかけてくる。

急いで廊下を左に曲がり、正面の階段を上る。が、急に追跡の足音が途絶えた。

階段を上って後ろを振り返ったが、追ってくる気配はない。

（いったい、どうしたんだ・・・）

（追跡をやめたみたいね・・・）

女夏がのん気なことを言う。こっちは走りすぎて息が上がっているというのだ。ちくしょう・・・。だが、自分にさらなるピンチが待っているとは。

ヒタヒタと這いよる複数の生物が近づきつつあったのだ。

メディアはターゲットである正室候補の追跡をやめた。これは千載一遇のチャンスであった。上位のフアナに誘われて側室戦争に加担したものの、自分が上位のフアナに勝てるはずもなく、いい様に利用されるだけだと思っていた。だが、前魔王の側室として優雅に暮らしてきたのに100日後には人間界にただの人間として生まれ変わることになるのは嫌であった。それを免れるには、正室候補を倒して成り上がるか、それとも新たな魔王の側室になるかである。後者の場合、新しい側室候補に勝てばいいのだ。正室候補にはフアナをぶつけ、自分は側室候補を狙おうと考えていた。利用するのは自分の方である・・・とメディアは勝手に考えていた。ところが、思わぬチャンスで正室候補が自分の前に出てきたので、つい欲張って狙ってみたのだが、通りかかった部屋のドアの隙間から漏れ出る光を見て冷静になった。

（危ない危ない・・・私はナンバー13。分をわきまえねば・・・。正室候補はまだ覚醒してはいないとはいえ、13番程度がどののできるなんて思わないほうがいい。過去に成り上がった前側室はいないというし、それよりも前例がある新しい側室候補を倒す方が確実。）

メディアは部屋のドアを強く開け放ち、光輝くクローゼットに歩み寄った。

「ふふふ・・・。あなたも運がないわね・・・。正室候補に覚醒されて自分を取り戻した直後にまた殺されるなんて。心配ないわ・・・。殺すといつても魔界に住むための魂が死ぬだけ。

私の双極の短剣クリスナイフによって、もう一度、人間に生まれかわらせてあげるわ」

両手に持った短剣が青い光を放ち始める。そしてクローゼットのドアめがけてXの字に振り下ろすとドアが切り刻まれて吹き飛び、さらに吊り下げられたおびただし服の向こうにいるターゲットめがけて2本の短剣を突き刺した。

「くくく・・・」

服の中からくぐもった笑い声が聞こえてきた。突き刺したはずの短剣には突き刺した感触がなく、代わりに先端を掴まれて自由にならない。手を横に振ってもがこうとしたとたんに強烈な蹴りを腹部に受けて部屋の壁まで吹き飛んだ。

壁が崩れ、体が壁にめりこむ。人間だったら大怪我で気を失うところだが、メディアはつい最近まで魔王の側室として君臨してきた魔界の住人である。この程度のダメージでは戦闘不能にはならない。だが、あきらかに誤算であった。覚醒したての側室候補ならなんとかできると思っただが、そんなに甘いわけがなかった。

「13番ふぜいが、私に勝てると思っているのか・・・」

クローゼットの前に立つ新しい側室候補。

（先ほど、正室候補によって覚醒されたばかりというのにこの力。）

メディアはその候補の首すじに「8」の数字を見て目を見開いた・・・
一粒の冷たい汗が頬をつたう・・・。

「ナンバー8・・・私よりも上位の側室だな」

側室の強さはナンバーで決定される。1つ2つなら番狂わせもあるが、5ランクも違えば勝つことは不可能である。だが、その口調

にはあきらめのエッセンスは一滴もはいつていなかった。

（ナンバー8のシングルランクとはいえ、まだ生まれ変わったばかりで、力も100%出せるわけではないだろう。側室の証であるウエポンすら持っていないようだ。

自分には双極の短剣「クリスナイフ」がある。そしてそれを扱う技能と身体能力。

「今、ここで下克上たらん」

だが、メディアは生まれたばかりのその側室の手が光り、折れ曲がった鎌のようなものが浮かび上がったのを目にした。

（バカな・・・覚醒したばかりでウエポンの召喚などできるはずが・・・）

クリスナイフの青く透き通る刀身がバラバラに砕け、メディアの倒れた体に降りかかった。

「先輩もこれで魔界から解放されて新しい人生を生き直せるよ。死ぬわけじゃない。」

ひかるはそうつぶやくと扉をそつと閉めた。側室戦争で敗れたものは魔王の側室から解放されて、人間として生まれ変わる。メディアもこれまでの記憶を一切忘れて人として生きるのだ。ひかるは廊下に出てスカートを翻し歩きながら重要なことを思い出した。

「そついえば、夏姉さま、大丈夫かしら？」

「だ・大丈夫じゃない！」

その頃の俺はというと大ピンチであった。ヒタヒタと歩く黒いベタベタした奴らが俺を追いかけてくる。そいつらの歩みは大して速くはないが、数十匹で通路をふさぐように迫ってくるからだんだん追い詰められて、ついには3階のバルコニーに出てしまった。そこは、小さな噴水とベンチがあり、小さな公園のようなたたずまいだが、もはや逃げ場がないことは一目瞭然であった。

(あなた、男でしょ！やっつけてよ！)

心の中で女夏が無茶なことを言う。バカヤロー！精神は男だが、体は非力な女なんだから戦うこと自体無理な話だ。それに迫ってくる黒い化け物を見るからに汚らしくていくらなんでも触るのも気味が悪い。だが、追い詰められた以上、そうも言ってられない。俺は覚悟を決めて化け物たちに正対した。両手を構える。(といっても空手や柔道の心得はまったくない。体育で柔道の真似事やった程度)一番に近づいてきた奴に強烈な蹴りをかます。さらに2番目に回しゲリ！！スカートが広がり、走りやすくするために破いた切れ目からレースのパンティーがちらりと見えたが、恥ずかしがっている暇はない。

蹴られた化け物は、ピキー・・・キー・・・とか変な叫び声を上げて後ろへ倒れて後続の化け物とともに将棋倒しになったが、数が多いからさらにそれに乗り越えて迫ってくる。辺りを見回すと使用人が忘れていたと思われるほうきが目に入った！！

(ありがとう！メイドさん)

ほうきを握り締めると近くの化け物を滅多打ちにする。2、3発で

先端が折れてしまったが、これ幸いにその鋭角な部分で突き刺す、叩くの大暴れ。可憐なドーナツツちゃんがバーサーク状態である。ドーナツツファンがみたら百年の恋も冷めるか？いや、あいつらのことだから、それも「萌え」とか言ってくるだろう。

しばらく奮闘していると化け物たちの前進が止まった。そして両側に分かれる。道ができてその先に一人のタキシードに身を包んだ男が立っているのが見えた。胸に白いバラ。白いタキシードに漆黒のマントという派手な格好。近づくにつれてその派手な野郎は、かなり色白のイケメン野郎であることが分かってきた。年恰好は2、3歳上に見えるが若い。ただ、身のこなしはダンディな中年オヤジを思い出させ、ご丁寧にも胸の白いバラを取って口に加えてきやがる。黒い化け物よりも背中に冷たいものが走る気持ち悪さだ。

「ふふふ・・・さすがは魔王様の正室であらせられる」

「あ・・・あなたは誰？」

「お初にお目にかかります。わたくしは、ドミトル・ラ・ツエツペリ伯と申します。魔界の貴族です」

「ふーん。ということは、リーの言っていた反魔王の過激派でしょ」

そう、この状況で味方であるはずがなく、当然の答えである。

「さすがは御台様。察しがいいですな。私もとしましては、新魔王様の復活は何としてでも避けたいことでした。そのためには魔王様を復活させることができる人間の姫の方を何とかする方がラクなことが分かりまして」

「そりゃまあ、そうですね。もっと早く気がつけばよかったのに」
「今回の御台様は物分かりがよい方で助かりました。それでは遠慮なく・・・」

男の目が赤く光る。すると急に体の力が抜けてしまったではないか。

フラフラとする体をそつと支えるキザ野郎のドミトル。どさくさにまぎれておっぱいを触りやがったが、キヤーとも手を跳ね除けることもおっくうになってしまつて何もできない俺。

「おや、思ったよりチャームの魔法のかけりが悪いようですね。普通の女性なら私に抱きついてくるはずなのですが」

「わ・わ・わ・わたしは・・・お・・・と・・・」

（私は男じゃあ！）と叫びたかったが、心の中の女夏はふにゃふにゃで目がハートになっているし、自分はその影響か力が思うようにはいらないから声にならない。だが、自分がピンチであることは自覚していた。しかも絶体絶命の部類だろう。こういうときには、助けを呼ぶものだ。

「だ・・・だれ・・・か・・・た・・・す・・・けて・・・」

かろうじて声をふりしぼる俺。ドミトルはにやりと笑っただけで、俺の upper body を起し、長い髪をたくしあげてすっきりしたうなじを露出させた。

「御台さま・・・当初の予定ではお命をいただくと思っておりますが、御台さまは、なかなか私好みの女性でいらしゃいます。そこでわたくしが血を吸って差し上げます。そうすれば、御台さまはわたくしの虜となりましょう。魔王様も復活できず。めでたし、めでたし・・・わたくしもあなたのような美人と恋に落ち、めでたし、めでたし・・・」

そういつて、口を大きく開く。赤い舌と2本の牙が月夜に光った。

（もうだめ！！）そう思ったとき、電光石火のごとく黒いかげがド

ミトルを突き飛ばした。

「だ・・だれだ？お前は？グール共、そいつを排除しろ！」

突き飛ばされたドミトルが叫ぶ。グールと呼ばれた黒い化け物たちがノタリノタリ・・と動き出したが、その黒い影の人物は取り出した木刀でなぎ払うとまるでバターが溶けるように黒い化け物は消えていく。

「そ・・その木刀・・ただの木刀ではないな」

「ふん。古来よりおまえたちのような人外の化け物を祓うため高僧が祈りをささげ、神木にて作られた刀。名を毘沙門という」

その人物に抱きかかえられ、意識が戻った俺は思わず目の前の出来事に目をまんまるくした。心の中の女夏は腑抜け状態であるが、俺の方は正気に戻りつつある。

（すげえ・・魔界の住人を楽勝で消せる武器があるなんて。ちょっと待てよ？俺もそういえば、ランジェの奴からなにかもらっていなかったっけ？）

そうだ、思い出した。俺は首にかかっていたペンダントをそつと出す。女夏は知らない武器だ。彼女はチャームとやらでへべれけだから、これを使ってもばれないだろう。俺はペンダントを握るとそつと言葉をつぶやいた。白く輝き、右手に短剣が具現化する。

魔王の魂を砕く「アンスウエラーの短剣」である。その輝きを見てドミトルは、

「二人がかりの魔法の武器で私を脅すとは無粋な。まあ、今回は邪魔も入ったことですし、また、いいことも思いつきましたから、退

散するのでしょうか。御台さま」

ドミトル伯はマントを翻すとグールたちとともに消えてしまった。同時にバトルエリアも解除されたようだ。パーティのにぎやかな音が聞こえてくる。時が動き出したのだ。

「これはどういうことだ。俺は夢でも見ていたのか？」

そうつぶやく男性、自分を助けてくれた人物を見る。男夏も見覚えがあるその顔。

「そ……宗治先輩じゃないですか！」

夏と硬派な先輩（前書き）

11部登場人物

一柳宗治… 上級生で剣道部主将のクールなイケメン。パーティーで夏を助けたことで魔王候補となる。

藤野蝶子… 宗治にラブラブの高校3年生。自称宗治の彼女。宗治が夏のことを気にしだったので、夏に逆恨みをする。

新堂ひかる… 元下級生男子。夏のせいで側室NO.8に転生。魔王の側室なのに夏にラブラブ。過剰なスキンシップなので彼女の立松寺がやきもきすることに…

夏と硬派な先輩

「たかしやま柳宗治。3年生で剣道部主将。全国大会でも名を馳せる高校生剣士。家は由緒ある武道家の家で今時ない古風なイケメン高校生である。体格は痩せ型で身長1m85cmはある身長。細マッチョ系である。性格は寡黙でめったに話すところを見たことがない。本人も目立つことは嫌いで、代表で何かをするということではできるだけ避けていた。だが、女子、特に年下の下級生女子には人気でファン倶楽部もあるらしいが・・・」

リイが調査内容をつぶやく。立松寺がさらに補足する。

「ちなみに彼女あり。彼女の名前は藤野蝶子、宗治先輩と同級生の3年生。性格は男子にはぶりっ子、女子には陰険の性格悪し・・・」
「本人はプレミア級なのに、女の趣味は悪いアルな」

ランジエがコメントする。

あの死闘が繰り広げられたパーティの翌日、立松寺の家でリイとランジエともう一人、生まれ変わった新堂ひかる（女）と立松寺とガールズトークならぬ反省会が開かれていた。

結局、ファナと死闘を演じたリイとランジエは、決着がつかずファナの撤退で何とか切り抜けることができた。もし、もう一人加勢の側室がいたらリイもランジエもやられていたという話であった。

「側室のNO.8があれ程とは・・・」

というのがリイの感想。（おいおい、おまえがふがいないから、俺は13番と魔界の過激派を称するキモイケメンにやられそうになっただじゃないか。護衛失格だ。）

NO・13のメディア・レイヴァーンを倒した新堂ひかるは、夏によって転生して新NO・8の側室として生まれ変わった。変わり方は夏と一緒にだが、人間界にいる側室候補は正室の夏か魔王候補にキスされると発動するらしい。(マジかよ・・・)

しかし、魔王の側室たるひかるは夏にべったりで、危ない雰囲気醸し出している。そのせいか、それを見てピリピリしている立松寺。完全に怒っている。

「夏お姉さま〜・ひかる・・・つまんな〜い。ねえ、もうこんな辛気臭いところから帰りましょうよ」

先ほどから腕に絡まり、胸をぐいぐい押しつけてくるひかる。立松寺の目がだんだん三角になる。今が女夏なら立松寺もそこまで気にしないだろうが、今が男夏の意識ということを見抜いている。さすがは俺の彼女というべきか・・・。

「いや、ひかるちゃん・・・ちょっと、くっつきすぎだよ」

一応、立松寺に聞こえるように軽く拒否するが、

「いいの・・・ひかる・・・おネエ様のこと大好きだから」

ますます胸をぐいぐいされて、思わず赤くなる。ひかるちゃん、小さいわりに意外とある！

「リイ・・・どういうことだよ。ひかるちゃんは魔王の側室じゃないのか？正室にラブラブじゃあ意味ないじゃんか」

「そもそも魔王の側室とは、夜の相手をするだけが仕事ではない。魔王の跡継ぎは人間界に転生する人間だから、子どもを作ったところで意味はない。そういう意味では女など不要なわけだが、側室の

役割は魔王の護衛をすることに尽きる。ベッドで無防備な魔王様を守るだけの力がないと勤まらぬ。まあ、ひかる殿の場合、覚醒前が御台様ラブだったので、その影響でそうなるのは仕方がない。まあ、魔王様が覚醒すれば彼女も側室の仕事は果たすだろうから、しばらくのガマンです」

（えええ〜っ・・・その前に立松寺に殺されます！）

人の気も知らず、ククク・・・と笑うランジエ。ちよい待ち・・・そもそも、おまえのガセネタにだまされたと言ってもいい。

「そういえば、ランジエ、おまえ、魔王には数字のアザがあるとか言ってたが、それは側室の目印じゃないか」

「すまんアル。勘違いしていたアル」

リイが解説する。

「正確には数字はたよりにならない。多くの場合、魔王様にも側室にもそういうアザは大抵、最初からはない。覚醒すると現れるのだ。ちなみに魔王様は、正室のお前は魔王様を覚醒させればナンバー00が、側室は覚醒するたびに強さが地位となって01〜16まで格付けされる。その数字は体のどこかに浮かびあがるという。ひかる殿はナンバー08。あのファナと同じ番号だ。見てくれはともかく、実力は侮れない」

今や、ひかるちゃんの意外と大きな胸の上に刻まれた08の文字が目に入る。

（結構、胸の開いたワンピースからちよい見える胸の谷間・・・）

（土緒くん・・・どこ見てるの!?!）

心の声が心臓に突き刺さる。また、立松寺ににらまれる俺。話題を変えなきゃ！

「あのファナと同じ番号ということは、リイヤランジェよりもひかるちゃんの方が強いということ？」

「悔しいが現在のところでは、そういうことになる。私一人ではファナには勝てなかった」

（二人がかりでやっと引き分けだろ）

心でつぶやく俺。

「魔王のロイヤルファミリーには数字が刻まれると天界では教えられてきたアルが、そういうことアルか」

（まあ、それはいいとして。これで魔王候補に宗治先輩が加わるということだけけど、どうアプローチしていけばいいの）

心の中の女夏が話しかけてくる。リイが言うには一柳宗治も魔王候補の一人らしい。そもそも人間である宗治先輩があつたのは彼の持つ木刀「毘沙門」のおかげらしい。バトル空間で動けるのは魔界か天界の住人で戦闘可能なものだが、人間界にいくつか存在する魔界や天界の住人に対抗できる武器の所持者も該当する。実際、彼はその武器で魔界の下級モンスターを除外し、過激派を名乗る男も撃退することができた。

「ドミトル・ラ・ツエツペリ伯は、魔界でも名門の貴族の御曹司。正体は吸血鬼だが、その力は側室クラスでも容易に対抗できない強さを持つ。いかに宗治が対抗できる武器を持ったとはいえ、御台様もよく無事でいらしゃった」

リイはそのことが解せないでいた。宗治がドミトルを退けてくれなかったら大変なことになっていたのだが、いかに宗治が強いとは言ってもただの人間である。ドミトルが本気を出せばどうなっていたことか。無論、自分が代わりにそこにいたとしても防げなかったら。そうならば……

(わざとか？なぜ？)

さらに側室戦争状態でもある。本来は安全であるはずの正室候補に危険な状態になってしまった。今までも側室戦争はあったが、正室をターゲットにする例は過去にはない。あくまでも新旧側室同士の戦い。より側室の質を高める上では必要な制度だ。正室が狙われなかったのは自分のような護衛がいるからだとは思ったが、ナンバー8のファナの強さを味わうと今まで例がなかったこと事体が不思議だ。これから大丈夫なのか？旧側室は全部で16人。ファナよりも上位の側室は7人もいる。

(早く、魔王様を覚醒しなければ……)

リイは焦燥感に包まれていた。

翌日、学校へ向いながら(心は女夏)心の中で女夏と話す俺。相変わらず、のんびり状態の天然お嬢様キャラの女夏。こいつには今の危機的な状況が理解できていない。

(あーあ……。ひかる君が女の子になっちゃたのは候補が一人減ってラッキーだったのに、結局、宗治先輩が増えて3人になっちゃたわ。めんどくさいなあ……。)

(おいおい、めんどくさいってなんだよ。)

(あのねえ。宗治先輩は彼女付きなのよ。それをどうにかしろとい

うのは難しいよね。」

（ああ、確かに。）

女夏のこととは最もだ。すでに幼馴染で夏に惚れている隆介と運命的な出会いで一目ぼれのラブラブ状態の元馬なら、あと一步で魔王覚醒の感じはある。だが、宗治先輩の場合はどうか？昨日のバトル空間が解除されたあとでも静かにたたずみ、夏が礼を言っても、

「ああ・・・」

としか言わなかった宗治先輩。本当に無口だ。それに彼女付きときている。これでどうやってアプローチする・・・しかもミツマタ・・・。二股の状態でも面倒なのに。

（ああ、もう面倒だ。隆介でも、元馬でも宗治先輩でもいい。もうキスでも何でもして魔王を覚醒して男に戻りたい！！）

そう叫ぶと校門のところで立松寺が立っているのが目に入った。

（ああ・・・立松寺・・・やっぱり可愛いなあ・・・。俺のこと待っていてくれるなんて。やっぱり、彼女がいるということはうれしいことだ。）

立松寺はツンとした口調で俺の腕を取った。他には聞こえないように物陰に隠れる。

「土緒くん。今は女の子よね」

（ええっ？分かるんだ？立松寺。）

「ええ」

「何となく分かるようになったわ。目とか雰囲気・・・」

「さすがね。華子ちゃん」

「女夏さんなら、話は早いわ。一柳先輩のこと」

立松寺は昨日から宗治先輩のことを調べたらしい。と言っても、ほとんど、週刊乙女林

の三ツ矢加奈子情報らしいが・・・。

「宗治先輩の自称彼女という藤野蝶子先輩のこと」

「自称？」

聞き返す夏。ちょうど目の前を木刀のケースを肩に担ぎ、登校する一柳宗治と彼の後を追いかけるように後に続く藤野蝶子が行くのが見えた。立松寺の話聞きながら、俺は二人の後姿をずっと見ていた。

学校も終わり、放課後になった。あいかわらず、今日一日は女夏が主導権を握っていて心の中の俺はつまらん一日だった。女夏だと立松寺も積極的には話しかけてこない。リイはあの件から、勢いがなくなってしまうたようで妙におとなしい。(あのダイナマイト娘にとってはファナに歯がたたなかつたことがショックだったのだろう。)

ランジエは小学部だし、今日は生徒会もないので暇だ。隆介は用事で早く帰ったし、元馬は急なバイトで飛んでいった。後は女になつたひかるちゃんが、休み時間の度に現れて自分に引つ付けてくるので周りから奇異の目で見られる。女同士にしてもべたべたしすぎで、またもやドーナツツちゃんゆり説が浮上してくるのでは?という感じであった。何とか隙を見て逃げ出し、宗治先輩の同行を探るという神業的な一日を過ごしたのではあるが、そのおかげで分かつたことは、

(確かに。自称かもしれない)

ということだった。

今日一日、こっそり見ていたが確かにこの二人、相思相愛という感じではない。確かに一緒に登校し、一緒に昼ごはんも食べているが、話しかけているのは蝶子だけで宗治先輩はそれに応えている感じではない。

(なんだろ・・・蝶子先輩がちょっと可哀想な感じ？がしないでもない。)

宗治先輩・・・蝶子先輩の顔を見ていない。彼女に対する態度ではない。立松寺という彼女がいる俺にはよく分かる。好きなら彼女の顔以外は目に入らない。一緒にいたら立松寺の顔、姿、髪の毛・・・それしか目に入らないのだ。蝶子先輩はそれこそ宗治先輩しか目に入っていないようだから、こちらの方は本気ラブみたいだが・・・。

(そういえば、元馬が俺を見るあのラブラブビジョン・・・分かる気がする。)

そんなことを考えていると、急に背中をトントンと叩かれた。

(だれだ?)

気配を感じなかった。敵か?

慌てて振り返ると・・・(宗治先輩・・・)いつのまにか、一柳宗治が後ろにいた。

「宗治先輩・・・」

「あ・・・ちよつと、いいかな」

「え・・・あ・・・はい」

連れて行かれたのは人気のない剣道場の一角。宗治先輩は突然、俺（女夏）の手を取ると壁に引っ付けた。彼の右手は壁を押さえ、かろうじて左は開いているものの逃げられない雰囲気である。

（おい、まさか、宗治先輩・・・何するんだ？これじゃあ、強引に迫っているみたいじゃないか。）

古武士のようなストイックなイメージではない。

「土緒・・・この間のパーティのあの出来事。夢じゃないよな」

どうやら、色恋沙汰ではなさそうだ。俺は内心ホッとしたが、今は女夏が主導権を握っているので、どう彼女が答えるかが気になった。人間の宗治先輩からすれば、魔王のヨメとか、側室戦争だとか、過激派などと言った話はまったく夢物語に過ぎない。どう説明したらいいのか、俺には分からない。だが、夢で片付けられる話でもない。だが、女夏は即答だった。

「夢じゃないわ。すべて現実。あの時は十分、お礼が言えなかったけれど、魔界の過激派に襲われていたところを助けていただいたことと感謝するわ」

「魔界？」

「信じることはできないかもしれないけれど」

「あの出来事が現実なら、信じるしかないだろう。俺は現実主義だ。自分の目で見ただことは信じる。で、なぜ、あのような化け物に襲われていたのだ」

女夏の奴、洗いざらい喋りやがった。魔王のヨメの件、リィ達のこと。候補の隆介、元馬のこと。側室戦争のこと。ここまで人間で知

っているのは立松寺しかない。彼女の場合は俺を魔王のヨメにした立場なのでまだしも関係者だが、宗治先輩は現時点では真つ当な人間である。たまたま、魔界の住人を倒せる武器を所持していただけだ。

（おい、女夏。そこまで話さなくてもいいだろう。先輩は一般人だぞ。夢じゃないですか〜とかいってごまかせば・・・）

（彼は魔王候補なんですよ。いい機会だわ。橘くんや源くんには信じてもらえないから、こんなこと話せないけれど、彼は事実として目で見ただから信じてくれるわ。それで、何もかも知ってもらった方が話は早い。）

（だけど、もし、そうじゃなかったら。）

（その時はその時よ。少なくとも、私の護衛にはなるわ。）

この女。寝とぼけた天然娘とか思っていたが、この判断力、決断力はやはり生まれながらの魔王のヨメだ。思わず、はつとさせられた。そういえば、リイが言っていた。魔王のヨメ、正室たる娘は絶大な力が秘められていると。覚醒すれば16人の側室をも上回る戦闘力

（この女夏がそんなに強くなるとは思えないが・・・）

そして、周りを引き付け、守ってあげたくなる力・・・カリスマ・・・とか言ったつけ。覚醒する前の弱い時には、このカリスマ（俺に言わせれば運だろ・・・と思ったが）の能力で周りの助けでしのぐのだと。考えてみれば、夏はずいぶん、周りに助けられている。惚れている両男子はもちろん、こんなやつかいな彼氏を持った立松寺にしても、魔界のリイや天界のランジエにしても結果的には俺をやっかいなことから守っているといえは守っているのだ。これが「カリスマ」の力なのか？と思うと、俺自身も結果的に女夏にアドバイスしたり、彼女のプラスになる行動をしたりしているから、そのカリスマ

マに魅せられているのかもしれない。

「なるほど。そういうことなら、もし、俺が魔王という者なら、君は俺のお嫁さんというわけだ。」

宗治先輩の左の手のひらが壁に合わさる。逃げ場がなくなった。(まさか・・・)身を固くする俺。女夏も思わない展開に体がどう反応してよいか分からないようだ。宗治先輩の顔が近づいてくる。思わず、目をつむってしまふ。

だが、思わずキスされてしまふかも！とあせつたのは考えすぎであつた。宗治先輩は耳元でそつと一言囁いた。

「それも悪くはない」

心の中でズキューン・・・と何かに撃たれた様な気がした。これが妹の秋が言っていた「ズキューン」か？宗治先輩は夏を解放し、出口に向って歩き始めた。

「あの、宗治先輩」

「俺のことは宗治でいい。俺も夏と呼ばせてもらつ。」

振り返らずそう言うのと右手を軽く挙げた。何というか、先ほどのナシンパな態度を帳消しにする絵になる姿だ。カツコいいけどヘタレの隆介や下心一直線の元馬に比べると大人の雰囲気がある。年令が一つ違うだけでこうも違うのか？

ポーっと見つめていると、背後からおっぱいをぎゅっと掴まれた。思わず、

「あ〜ん・・・」と声が出てしまふ女夏。そして今日一日、聞きなれた甘ったるい声。

「せうんぱい。こんなところにいて、ひかる探しましたよ。だめですよ、ひかるにだまって行動しては・・・」

「いや、ひかるちゃん・私だって、予定ってものが・・・」

「あらあ・・・そんなこと言っていてイイですよ。また、旧側室が襲ってくるかもしれないわよ。先輩を守るのは、わ・た・し・だけってこと知ってますう?」

「いや、確かにそうかもしれないけど・・・あん・・・」

ひかるちゃんの手が掴んだおっぱいを撫で回し、ブラジャーごしに先端に対して中指で軽く突つつくように刺激してくる。(なんでこの娘、こんなにつまいんだ?)

「リイなんて頼りにならないわよ。あのファナって奴が襲ってきたら、私が守ってあげますわ。夏オネエ様・・・」

そう言っただけで息を吹きかけるひかるちゃん。男の時は純真無垢な男の子だったのに、いくら魔王の側室とはいえ、エロ過ぎないか?これなら見た目だけエロいリイの方がよほど可愛げがある。

「ひかるちゃん・・・そういうことは魔王様にやってあげましょうね」

女夏もなんとかかわそうと言葉を続ける。沈黙するとヤバイことになりそうだ。魔王に出会う前に貞操の危機である。

「もうオネエ様だったら。魔王様の話なんてしないでよ。気分がそがれる」

そう言っただけでひかるちゃんは、そっと腕に絡まり、ぐいぐい自分の胸に押し付けてくる。

(おいおい・・・ノーブラかよ・・・) 感覚は女夏と共有しているので、

やわらかい胸に突起物までダイレクトに伝わってくるから思わず鼻血が出そうになる。立つものがないからいいが、高校生の男だったら間違いない立っっちゃってます。

「一緒に帰りましょう、オネエ様」

ああ・・男だったらきつとガマンできないだろう。今は女夏だからいいが、自分だったら、この生き地獄に耐えられるだろうか・・（立松寺）思わず、心の中でうれしい？泣き言をいう俺。だが、こんな姿を見られたらそれこそ修羅場だろう。

そんな二人の様子をすどい目線でにらんでいる女生徒の存在に俺も女夏もまったく気づかなかった。おかげで次の日、とんでもない別の修羅場に遭遇することになる。

夏と修羅場とキモイケメン（前書き）

ドミトル・ラ・ツエツペリ：魔界の貴族の御曹司。魔界の過激派の属する反魔王派の幹部。ヨーロッパ系の王子顔だがべた過ぎて夏にはキモいと毛嫌いされている。正体は吸血鬼。女夏を殺すことから魔王から寝取ることに変更する軽い奴。

藤野蝶子ふじのちょうこ：愛しの宗治が女夏に惚れたことを知って激怒。女夏を泥棒ネコと罵って修羅場になる。

夏と修羅場とキモイケメン

一方、立松寺華子は実家の倉で探し物をしてきた。放課後、とりあえず女夏はリイに任せて自分は急いで家に帰ったのである。今のままでは、彼氏である土緒夏を守れないと考えたのだ。一柳宗治の持つ木刀が魔を退けるといふのなら、鎌倉時代から伝わる寺にもそのようなものがないかと考えたのだ。まあ、ランジエ曰く、そんなものはそう滅多にあるものではないということだが、いつも父が自慢していた宝物にそのようなものがあるかもしれないと思ったのだ。この前のパーティの時には、自分はまったく係われなかったのがこの気の強い娘には許せなかったのだ。

（あのひかるちゃんは、今後、土緒君を助けることができるのに私は何も役に立てない。せめて一柳先輩のような武器があれば、私も土緒君の役に立てる・・・）

そうは思ったが、父の44代立松寺住職、立松寺春慶48歳の取り出すアイテムの数々に溜息を尽くしかなかった。一応、学校から帰ったばかりのランジエに鑑定してもらっているのだがろくな物が無い。

「見よ！華子や。これがかつて織田信長候が愛用せし、薙刀、鬼切丸。本能寺の変で最後に使った武器じゃ。邪を払うとされている一品じゃ。」

「うそじゃな。柄のところに大黒堂と書いてアル。刀身はアルミ製アルな」

一目見てランジエが切り捨てる。これくらいなら、華子にも偽物と分かるくらいなさけないほど無様な品物だ。

「いやいや、それはわしも分かっていたさ。これを出すための笑いを取るための物じゃ。見よ！この日本刀。妖刀ムラサメ丸。かつて平将門公が東国にてムカデの化け物を退治した時に用いし刀じゃ」

そのいわれからしておそらく偽物だろうという刀。案の定、ランジエにただの模造刀だと言われてがっかり。その他にも九尾のキツネをやっつけたという弓矢や鬼を退治したと言う坂田金時の斧、坂本龍馬が使ったとされる日本刀など、出るわ出るわ・・・の30数種類の骨董品の武器が出たがすべて贋作。しかも観賞用で武器にすらならないことが判明した。

「はあ」

分かってはいたが、こうも無様だと情けなくなってくる。やはり、そう簡単に身の回りにはあるはずがない。もはやだめか？と思った時にランジエが桐の箱に入った写真を見つけた。

赤子の華子とまだ若い父と母が一緒に映った記念写真であった。その写真を見たランジエは思わず声を荒げた。

「華子、この写真の女性。おまえのかーちゃんアルか？」

「私がまだ赤ちゃんだった時に亡くなった母よ。私が一歳の時だから、今から16年前の写真ね。写真なら父の部屋へ行けば、見られるわよ。母の写真だらけだから。」

春慶の部屋は天井から壁まですべて亡くなった母の写真（しかも巨大引き伸ばした写真も数点ある。）が貼ってある。今でも母の名前（駒子という）を叫んでいる父は、妻をなくしてからこれまで幾多の再婚話を蹴ったということだから、よほど愛妻家だったのであろう。その割には毎月の風俗通いの請求書が山ほど家に来て、娘の

華子に怒られているのではあるが。

「この顔、見覚えがある。」

ランジエはつぶやいて母親の形見はないか？と華子に聞いてきた。あるにはある。自分が生まれたときに持たされた守り刀・・・と言っても刀身はわずか15センチ程の小刀ではあるが。確か、自分の部屋にへその緒や足型などの記念品と一緒にしまいこんだはず。部屋に戻ってごそごそ探すと出てきた。漆塗りの箱の中に絹織りの豪華な袋に入れられた小刀が。

「ランジエ、これ！この小刀、これは魔を祓う武器なの・・・」

見た目よりもずっしりと手に感じる小刀は、これまでの贗作とは違っていていかにもそうでありそうな感じがした。だが、ランジエは首を振った。

「それ自体はただの刀アル。まあ、よく切れそうだから武器にはなるが、せいぜい、強盗や痴漢除けの護身用武器にしかないアルな」

「それじゃ、母の形見なんて思わせぶりなこと言わないでよ」

「いや、その刀ではなくて、こちらの書き物の方が重要だ」

漆の箱に入っていた小さな巻物をランジエが開くと墨で書かれた梵字のような文字がずらりと書かれている。

（こんなものあったかしら？）華子自身もあまり記憶がない代物であった。

「やはりな・・・。見覚えあるはずだ。お前の母親は・・・」

ランジエが語りだした。

「ええええええっ・・・！」

いつもは冷静な立松寺華子もその衝撃の語り思わず叫び声を上げた。

(うそでしょ・・・お母様。)

翌日、登校してみると学校は外国から来たという英語の新教師のうわさで持ちきりであった。特に女子のテンションが高い。

「イギリスの貴族出身だそうよ」

「えええっ・・・伯爵さまだっけ？」

「ちらつと見たけど、本当に王子様って感じよ。イケメンってんじゃないわよ」

「わああああ・・・」「きゃあああああ」

あちらこちらで騒ぐ女子と白け気味の男子。そりゃそうだ。イケメンが一人いるだけで、自分が彼女をゲットできる可能性はグッと減る。そんな心境が分かる俺が主導権を握っているから、哀れな男子共に天使の微笑みをプレゼントしてやる。

「おはよう、遠藤君、加藤君、今日は宿題大丈夫？」

「ド、ドーナツちゃん・・・おはよう」

「も・・・もちろん、やってきたよ、ドーナツちゃんに教えてもらったから、最近、勉強がおもしろくて」

「そう、よかったわ。勉強も真面目にやる人って、夏は好きだなあ」

おおお・・・俺に声をかけられて遠藤と加藤の奴、朝から腑抜け顔に。

あんまりサービスするのも可哀想だとは思ったが、イケメン新任教師に話題を持っていかれては元からこの学校にいる男子としてはおもしろくあるまい。男子のグループが負けじと妄想を爆発させる。

「女子の奴ら、何がイケメンだ。現実を見ろつての」

「それに比べてドーナッツちゃん・今日も相変わらず可憐だ」

「俺たちにはドーナッツちゃんがいるさ。心のアイドル、話すだけで一日、幸せだあ」

「今日はドーナッツちゃんにべつたりの1年生いないなあ」

「ああ、ひかるちゃんだろう。二人の姿を見るだけで俺たちは幸せ」

「可憐なドーナッツちゃんと子悪魔的なひかるちゃんの絡みはちょっとエロいよなあ」

「これでリイ様加わったら・・・」

「立松寺つてのもありだけど」

「ああ、ドーナッツちゃんと付き合いたいぜ」

「俺の夢はドーナッツちゃんにヒラヒラエプロン着てもらって、お帰りなさい、あ・な・た・と・言・っ・て・も・ら・う・こ・と・な・ん・だ」

「あなた、お風呂が先？ごはん？そ・れ・と・も・私？」

「おいおい、まさか裸エプロンつて奴？俺のドーナッツちゃんを妄想でも汚すなあ！」

男も盛り上がると止まらない。そんなこと言うくらいで夢が叶うなら、裸エプロンはともかく、言つてやるうか？などと思つたが、心の中で女夏が、

（一般男子に媚びるな！魔王様の正室としての格が落ちる。）と怒っている。おいおい、格つてなんだ？一般男子だって夢くらい持ちたいわ。そうちよつと前まで一般男子だった俺の気持ちはさておき、うわさの教師が英語の時間に自分のクラスに入ってきた時には驚いた。ちなみに立松寺は本日はなぜか欠席でない。

教師の白面づら見覚えがあった。生粋のゲルマン民族つて顔の緩や

かなクセ毛のロングヘアを右手でさつと撫で上げて女子に向って軽くウインクするキザ野郎。名前は、ドミトル・ラ・ツエツペリ・まんまじゃないか。あのキモイケメンである。

あの赤い目でチャームしたわけではないのだが、ウインク一つでキヤーッと叫んで数人の女子が卒倒する始末。昔、オヤジがビートルズというイギリスの伝説バンドが来日した時にバーちゃんが（当時、女子高生）失神してしまったとかなんとか言っていたがそんな感じだ。女はイケメンを見ると失神することができるらしい。無論、今の夏は心は男だから冷静そのものである。女夏も魔王とは関係ないから、完全無視。それよりも敵のはずのこの男が人間に化けて入ってきたことが解せない。

「ハーイ・・レディ・・今日から英語を教えまゝす。美しい英語が話せるよう、私と勉強していきましょね」

おもいつきりヨーロッパの王子顔で日本語ペラペラなのもおかしいだが、目がハートな女子にはそれもたまらないらしい。そのキモイケメン、ドミトルの奴、机間巡視しながら、女子に一声かけ（男子は意図的に無視）、ついには俺のところにも来やがった。

「おーっ・・オリエンタルビューティ・・美しいお嬢さん。また、会いましたね」

この野郎、なんてこと言いやがる。みんなこっちを注目するじゃないか。

「アーユアーキティング？（ご冗談を）アイ、ハド、ネバーメツト ユー（あなたなんて会ってないわ）アイム ア ナツ、ドオ、イツツ、ア、プレジャー、トウ、ミーツユー

（私は土緒夏と言います。初めてお会いできてうれしく思いますわ）

「アイム、ハッピー、トウ、ミーツユー、ナツ。(会えてうれしいよ、夏)」

そう英語で答えたドミトルは、耳元でそっと囁いた。

「アイ、シンク、オブ、ユー、ナイトアンデイ(君のことで頭がいっぱいなんだ)」

「アー、ユー、セドゥーシング、ミー？(私のこと誘惑してるの?)」

ドミトルの奴、軽く両手を広げ、「ヤー・・・」と言ってウインクした。

たぶん、わけの分からないクラスメートは英語のやりとりを見て、オーツと大半は感心しているが、英語のできる奴が会話の全容を知つたらさぞかし驚いたことだろう。まあ、やばいところは小声で聞こえなかったと思うが。魔界の過激派で自分の命を狙うとか言ってる奴が教師として近づいてくるのはいったい何故なんだ。それにしてもリイが言ってたが奴は吸血鬼だったはず？なぜ昼間に出てこれる？英語の時間はさらりと流れて

「また会いましょう・・・」

とウインクして去っていたドミトルの魂胆が見えないがそんなことを忘れてしまう出来事が直後に起こった。

ガラッとドアを開けて入ってきたのは藤野蝶子。夏を見るなり、一直線で掴みかかってきた。ものすごい剣幕である。

「このどろぼう猫！宗治に手を出しやがって！」

(えっ！)と思ったと同時に頬をはたかれる。ちくしょう、俺は懇親の力で振りほどいて胸を強く押す。思わぬ反撃に2、3歩後ろに

よるめき、しりもちをつく蝶子だが、すぐさま、息を整える俺に蹴りを入れてくる。

「きゃ・・痛い・・」

可憐に俺もしりもちをつく。蝶子はすぐさま襟を引つ張る。ボタンがちぎれ、シャツが破れ、ブラジャーのひもが露わになる。俺も負けじと蝶子のシャツを引きちぎる。美少女の激しい戦いだ。あっけに取られていたクラスメートもその両者の露わな姿を見て我に返った。男子の数人が蝶子と夏を引き剥がす。

「先輩、何しちゃってくれるんですか！」

「うるさい、このドロボウ猫の味方するのか！」

「ドロボウ猫って、ドーナッツちゃんがですか！」

「そうさ、この女、私の彼氏を誘惑しやがったんだ、私は見たんだもの」

蝶子は表向き、真面目な先輩というイメージで後輩からは見られていたので、この激しい口調にみんな驚いてしまう。

「私がいつ誘惑したというのですか」

俺も言い返す。もし昨日の現場を見たのなら完全な誤解だ。どちらかと言えば、お前の彼氏に誘惑された方だ！と言いたかったが火に油を注ぐ結果になることは明らかだ。

「生徒会長や副会長とよろしくつきあって、女の子ともいちゃいちゃするこの淫乱。お前なんか私の宗治は渡さないんだから・・離せ、この野郎！変なところ触るなスケベ！」

男子に抑えられても悪態をついて大暴れする蝶子。俺は女の子たちに介抱されて暴れる蝶子を見ている。そもそも、彼氏を盗られたなどと言えるのか？この女は？

昨日の朝、立松寺から聞いた藤野蝶子と一柳宗治の付き合った理由。付き合ったということから間違いだったのだが、きっかけは2月のバレンタインだから4ヶ月ちょっと前だ。

「宗治君、あのこれ受け取ってください。」

蝶子は思い切って手作りのチョコレートを差し出した。宗治は無口でぶっきらぼうだが、心は優しい。今日もたくさんのチョコレートを下級生の女の子からもらったがすべて受け取っていることも知っている。もちろん、告白めいた言葉が添えられても、「ごめん」とはっきり断っていることも。だから、自分も受け取ってもらうまではできると思った。勝負は渡してから・・・。

「あの宗治君。あなたのことが好きです。」

宗治はそつと振り向いて蝶子を見た。彼は普段は無口だが人の気持ちには真摯に応えることは常としていた。これまで何度も告白されてきたが答えは一つだ。

「ありがとう。だけど、ごめん。今は女と付き合う暇はない。それに好きになる子は自分が見つける。」

予想通りの答え。予想通りだからショックではあったが、言葉を続けられる。そもそも、宗治がこう答えることはこれまで告白した友人や後輩から聞いていた。あまり知らない女の子でも宗治に告白すると聞いて、応援するわ・・・と心にないことを言って告白させ、断

られて泣く子達をなぐさめて分析した。そう一柳宗治の性格と彼が断れないように仕向ける方法を。考えるまで7人の女の子の犠牲と半年の歳月が必要であった。

「なら、あなたの邪魔はしないわ。武道の稽古のじやまはしない。それに好きな子ができるまででいいの。友人として側にいさせてよ。それくらいはいいでしょ」

「やめてくれ。迷惑だ」

「マネージャーみたいなものよ。別に話さなくてもいいわ。私が勝手にいるだけよ。景色と一緒に。それとも女子が気になって稽古にも身がはいらぬのかしら」

そう一柳宗治は、普段は冷静沈着な性格だが武道のことになると少々熱くなることがある。

「これも修行のうちよ。女の子に左右されないことも精神修養じゃないの」

「君はおもしろいことを言う人だな。そうまで言うなら勝手にしろよ。だが、それは君がづらいぜ。ずっと報われない片思いだ。君の精神修養といえはそうだが」

(やった・・・) 心の中で蝶子はベロを出した。側にいらればそれで十分。世間様は私たちが付き合っているとと思うだろう。周りから既成事実を作っていく。それで宗治の心を溶かしていくのだ。いつか私のことを愛して言って言わせてやる。そう誓ったのだ。

無論、付き合って4ヶ月たつがデートは一度もない。一緒に登校、下校。お昼をたまに一緒に食べる・・・話すのは蝶子から。宗治は黙って聞いているだけ。だけど、めげない。

そのうち、私をいとおしく思わせてやる・・・そう思っていたのにあの女・・・

(土緒夏・・・ドーナッツちゃんの愛称で有名な下級生。)

宗治から女の子に話しかけるのはただ一度もなかった。あの武道場での姿。

(ありえないわ・・・。もっと時間があれば、私の方を振り向かせることができるのよ。)

なのにこの女・・・ぽつと出の女に宗治をさらわれるなんて・・・。わああ・・・取り押さえる男子を振りほどき、噛み付き、さらに土緒夏に掴みかかろうとした時、腕をグツと掴まれた。

— 柳宗治である。

「もし、君が夏のことをドロボウ猫というなら、ここではつきりさせよう」

きりつと蝶子の方をにらむ。

「蝶子、好きな子ができるまでの約束だよな。今日でお別れだ」

「そ・・・宗治、うそでしょ・・・。その子とどんなつながりがあるのよ。別に好きなんかじゃないのよね。その女にだまされてるんだわ。宗治、知らないでしょ。彼女、彼氏がいるんだよ。ほら、あの優秀な生徒会長、それに最近、副会長になった男も彼女が好きで、それにそいつユリで女の子が好きで・・・」

「関係ないな」

「えっ・・・」

蝶子は言葉が出ない。次に出る宗治の言葉に胸が高鳴る。それは蝶子にとっては終わりのカウントダウンでもあった。

「俺が好きなら関係ない。運命なんだ。この運命に身を委ねたい。」
そう言うと宗治は夏の方に向き直った。

「夏、好きだ。ずっとずっと大切にする。そして君は俺が守ってあげるから」

うおおおおつ・・・俺の心臓が射抜かれる。心の中の女夏も射抜かれてスローモーションのように倒れる。土緒夏・・・討ち取ったりくの大音声が頭の中にこだまする。

「うあああああつ・・・」

周りのクラスメートも大騒ぎする。そりやそうだ。公衆の面前での堂々とした告白。前に源元馬も校内取材陣の前で告白したが、あまりに直線過ぎて夏に本気度が伝わらなかつたのだが、あれに匹敵する出来事だ。

「あ・・・あの・・・」

俺は混乱している。心の中の女夏は討ち取ったりくで失神しているから、俺が答えなくてはいけない。

「あ・・・考えさせてください！」

「そうだよな。今はその答えで十分だ。俺がそうでないなら、君は受け入れるわけにはいかないだろう。だが、俺がそうなら君は俺のもの。待っていていよう」

呆然と立ちつくす観衆と呆けたように真っ白になっている藤野蝶子

を残して、
一柳宗治は教室を出て行った。

夏とトリプルデート大作戦 準備編

「ねえ、それでどうするのドーナツツちゃん。宗治先輩と付き合うの？」

微妙な空気が流れる生徒会室で、めぐるが空気を読まない質問をしてきた。

（おいおい、めぐるちゃんその話題は今はやばいって・・・。）

と内心思ったが、明らかに聞き耳を立てている生徒会長と副会長の手前、下手な答えはできない。

「一応、考えさせてください・・・と答えたけれど、私、どうしたらいいか分からない」

そう言って、当の会長と副会長を見る。慌てて目をそらす二人。

（おいおい、ここで男ならガツン！と言うだろう・・・でも、ヘタレの隆介じゃ、言えないか。元馬はともかくとして・・・。）

実際、俺自身、今後、どう動くか悩んでいる。問題を整理しよう。

俺こと土緒夏は、元は男だけど今は女。魔王のヨメ（正室）である。本当なら体だけでなく心も女で完全別人に生まれ変わるはずだったが、幸い？なことに男の心も生き残った。覚醒の引き金になった男時代の彼女、立松寺華子のおかげだが、それ以後、男の心と女の心がランダムに変わっていくという厄介な状況に陥っている。100日以内に人間界に転生しているという魔王候補の男の子と恋に落ち、キスで魔王として覚醒させれば、女夏はめでたく魔王の妻になり、

俺は男として人間に戻る。

（はず・・・でないと・・・俺としては非常に困る。）

候補は魔界から来た俺の護衛役という、リイ・アスモデウスというダイナマイトボディの女悪魔の持つ鏡に映った男子。すべて夏に好意を持っていて、なにかしら運命的なものがあるらしい。単に夏のことが好きと言う男子はこの学校には多いから、単純に好きなかっただけではないらしい。

その候補は3人。幼馴染で学校の生徒会長である橘隆介。そのライバルで体育会系の熱い男、源元馬、武道の達人で物静かな先輩の一柳宗治。いずれも魔王の素質はあるらしいが、今のところ、状況を正確に知っていて夏に協力的なのは宗治であるが、それが魔王である証とは言えない。これだけでもややこしいのに、夏を狙う旧側室^ナや魔王を監視している天界の住人^{ランジエ}や魔界の過激派^{ドミトル}などが複雑に絡み合っていて複雑な状況である。さらに新側室として後輩男子から女の子に転生した（新堂ひかる）までいて、混乱は広がるばかりである。

生徒会の仕事も終わり、2人の男子からは結局、何も声をかけられなかった俺は、ちよつと落胆したが、

（たぶん、女夏なら、そんな奴とは付き合っな！俺がいるじゃないか！と二人に言って欲しかっただろうと思う。）

今後の作戦を考えるためにリイに会いに行った。リイの奴、風紀委員会室で一人、ポーツとたたずんでいやがった。

（これで俺の護衛が務まるのか？）

ふと思ったが、ガラリーとドアを開けて閉口一番、

「なあ、リイ。この先どうしたらいい？」

と聞いてみた。今の状況は当然、夏のお目付け役であるこの悪魔は承知しているから、細かい説明は省いた。

「私にも分からぬ。だが、ファナに動きがないのが気にかかる。今の状況なら、一気に御台様に襲い掛かってきてもよさそうだが・・・」

（リイの奴、未だにファナに勝てなかったことを気にしてるな・・・。プライドの高い奴だから仕方ないが。同じ勝てなかったのにランジエの方がよほどさっぱりしている。）

リイ・アスモデウスは自信たっぷり気位のお高い性格であったのに、最近はどうも勢いがなく、そういう姿が意外に可愛い。（言っておくがこいつは魔界の悪魔だ。）そんなことを思うのは、女の身ながら男の心があるからだろうか？もう一人の女夏は、そんな感情はきつとないに違いない。

「いずれにしても、3人に絞られたとっていい。お前が正室として生まれ変わってからすでに3週間が過ぎている。5分の1が経過したところだ。ファナが襲い掛かってくる前に早く魔王様を見つけ出すのだ」

「3人にアプローチしろってこと？」

「どうだ、夏。明日から3連休だ。3人とデートしていきにかたをつけたらどうだ」

（おいおい・・・安いギャルゲーじゃない、この場合は乙女ゲームか？3人同時攻略デート大作戦か？勘弁してくれ・・・。ただでさえ、

宗治先輩に告白されてあとの二人とはギクシヤクしているのに、デートは気まずいだろ。」

とは思ったが、この際、一気にカタをつけるといいのはいいことかもしれない。元馬も隆介も何か言いたそうであつたし、宗治先輩もあの告白宣言から何故か音沙汰なしであつたから、ちよいと気になる。

「分かった。動いてみる。それに・・・」

俺は元氣のないリイを励ましてやろうとつい優しい言葉をかけてしまった。

これがまたややこしいことになるきつかけになるのだが・・・。

「なあ、リイ。元氣出してよ。あなたは私の護衛でしょう。あなたがいてくれないと困る」

「お前、今、男だろう?」

「いや、まあ、そうですけど・・・」

「私を口説くような台詞を吐くな。言われなくても分かっている」

「ご・ごめん。だけど、元氣のないリイはらしくない。確かにフアナには前回は苦戦したかもしれないけど、あの戦いを見ていて私は思ったんだ」

「何をだ?」

「リイヤランジエは、強いけれど戦いの経験が少ないんじゃないのかな?フアナの奴は前魔王の側室で、20年間の戦いの経験がある。その差だけじゃないのかなあ」

リイはじつと聞いている。

(確かに経験の差は大きい。だが、越えられない壁でもないような

気もしてきた。私も前回の戦いで学んだともいえなくはない。(

魔王の正室とはいえ、たかが人間に励まされるのは癪だったが、何となく元気が出てきたのは事実で、にっこり微笑む夏に何だか心が癒されるような気がしてきたというより、何だかドキドキしてきたではないか。

(まてまて・・・こいつは女で魔王様のヨメ。なぜ、私が癒されなくてはならない。だが、今はこいつ心は男だし・・・人間の男に悪魔が虜になってどうするのだ！)

「と・・・とにかく、明日からのデートプランを立てて、3人のうち誰が魔王様かはつきりさせるのだ。分かったな」

「了解！」

俺は調子よく返事をした。さっそく、メールでデートに誘うことにした。

チンチロリン・・・

明日の土曜日、会いませんか？

都合がつくなら、明日9時に駅前の公園広場で・・・from 夏

明日を明後日、日曜日、月曜日・・・の3タイプ作って元馬、隆介、宗治に送る。考えてみれば悪い女だ。女性読者のみなさんは、かなり怒り心頭だろう。

それにしても・・・貴重な3連休を男と過ごすなんて・・・俺はなんて不幸なんだろう。本当なら、彼女の立松寺と楽しいラブラブデートのはずなのに・・・。そういえば、立松寺は本日休みであった。病気休みではないということだが、携帯にも出ないし、何かあったのか？家でランジエと元気に過ごしているとリィは話していたが、少々

心配であった。デートの方は、3連休のうち、女夏とバトンタッチをする時もあるから、全部、自分（男の方）がデートするわけじゃないのだが・・・。

リイは夏と分かれて帰り支度をしていると、新任英語教師のドミトリが話しかけてきた。

「お前か・・・過激派に組して御台様の命を狙おうとしたそうだな」

「おや、そうおっしゃる割にはすぐ私にコンタクトしてこなかったねえ、リイちゃん」

「ちゃん付けはよせ」

「冷たいなあ・・・僕とリイちゃんの仲じゃないか」

「どんな仲じゃ。お前は私の敵。馴れ馴れしくするな」

「ふふーん。妬いているのかな？」

（だれが妬くか！お前なんか・・・）

リイはこのナンパな同族が大嫌いであった。だいぶ前に魔界のパイティで紹介されてお見合いをした仲ではあるが、一目見て大嫌いなタイプだと思った。そいつが人間界に来て、自分が護衛する魔王夫人を殺そうとしたなんて許せないし、殺すのをやめて人間に化けて近づいてきたのはもつと許せない。コンタクトしなかったのは、こいつが夏を殺すのをやめて自分の女にしようと思えば変えたことが分ったからだ。こいつの考えそうなことだ。夏の色香（そんなものあったか？）に惑わされやがって、過激派の一派なら、志を鉄のようにして意志を貫け！とリイは怒鳴りつけてやりたかったが、貫いてもらうと困ることは確かなので黙った。こんなナンパな奴でも実力は侮れない。ただでさえ厳しい側室戦争中に過激派の横槍はリイにとっては大変困るのだ。

「リイちゃん・・・大事な任務が達成できないと可哀想だから、僕ち

「やんも手伝いたいと思うけれど・・・君は僕の助けなんかいらないよね」

「当たり前だ。どちらかという迷惑千番」

「きついねえ。相変わらず。まあ、僕もおじさんの頼みで魔王のヨメたるドーナツツちゃんを殺そうとは思ったけれど、あの子、かわいいよねえ。いっぺんで好きになっちゃった」

「マジ？」

リイは思わず大きな声でつぶやいた。魔界の吸血鬼の心理なら人間は食料みたないなもんで、人間なら牛やブタや鶏を好きだ！というのに等しいと思ったのだが、どうやらそうではないらしい。まあ、こいつは女なら動物でも何でもいいといいかねない奴だが。

「それに僕ちゃん、思ったんだ！魔王の鼻を明かしてやるには、ヨメを殺して覚醒させないんじゃないかと、ヨメを寝取ってやった方がダメージ大きいような気がしてねえ」

「ね・・・寝取るだと・・・無礼な」

「いやあ・・・怒った顔も素敵だね。リイちゃん、その意気その意気」「さつさと私の前から消える。それから、御台様に一步でも触れてみる。私が承知しないからな」

「はいはい・・・正々堂々とやりますのでご心配なく。それから側室さんたち、決戦の準備しているようですから、ご準備もよろしく。戦力が多い方がいいので、ちよつと手を打つときですが、新側室のお嬢さんとあの木刀持った魔王様候補の人間とリイちゃんとランジエちゃんでは戦力不足でしょうから・・・」

そっぴい残してドミトルは目の前から消えやがった。

（側室さんたちって？）

「ちよつと待て、ツエツペリ伯、何か知っているのか！」

リイの声^がだれもない校舎の廊下^にこ^こだ^まし^た。

夏とトリプルデート大作戦 元馬編

1日目はVS源元馬である。待ち合わせはこちらの指定どおり駅の噴水前。初夏でからつと晴れたデート日和。ちよつと汗ばむ感じだったので、服を選ぶのに手間取った。

朝から女夏が主導権を握っていたので、ああでもないこうでもない・と朝も早くから服選びで俺としては心の中で超いらついたが、結局、白地にブルーの水玉のワンピース。ちよつと胸元が開きすぎて、スカート丈も思ったより短くて、元馬の奴にサービスしすぎだと思つたが、これくらいの方が元馬が喜んでギクシャクした雰囲気を打破できるような気もした。女夏もそんなことを考えてのチョイスだろう。妹の秋が薦めるミニスカやホットパンツはさすがにサービスし過ぎなので却下したが。

元馬は待ち合わせより30分も早く待つていた。昨日、急に彼女の方からメールが来て、もやもやした気分が吹き飛んだ。(そうだ・
・本日、はつきりさせる)と心に決めての初デートである。バイトも断つて彼女優先。本当は来月の家計にピンチではあるが、夏の誘いを断るなら、食パンの耳と水で3日ガマンすればいい。本当は大金持ちの子息の元馬であるが、家の取り決めて成人するまで学費以外の生活費は自分で稼ぐことになっている。だからといって、お金があればなあとも思わない。お金よりも熱いハートだ!と心に言い聞かせた。

「源くん」

遠くの方から愛しの彼女が走ってくる。白い日傘が彼女の動きとともに上下に揺れる。その姿は・夏のお嬢さん・という感じでも素敵。思わず・「いい・」とつぶやいてしまった。

彼女の清楚な感じがいつそう引き立ち、まさしく俺好み！と元馬は天を仰いだ。

(この姿を見られて、源元馬、一生の悔いなし)

心の中をのぞけるなら俺は思わず突っ込みたくなる台詞だが、他人の心境まで読み取ることにはできない。何故か空を見上げて両拳を握っている元馬に女夏が話しかける。

「どうしたの？源くん」

我に返った元馬。

「いや、なに、ちょっと、その、あの・・・夏さん・・・いや、夏」

(こいつ、さん付けから呼び捨てにしやがった。デートで気が大きくなっただか?)

「その服、とても似合ってるね。君にぴったりだよ」

「あ・・・ありがとう・・・」

女夏もどう答えてよいか分らないようだ。まあ、男の俺は元馬の心境も分からなくはない。

きつと今日のデートだって、自分がリードしなきゃって昨日一晩考えたに違いない。決め台詞も話の内容も十分考えてきたが、思うように話せないのが当日なのだ。立松寺と初デートの時を思い出す俺・・・。

(ちょっと待て！あの時は別れ際にその・・・あの・・・だったが、女夏の奴、同じことするんじゃないだろうなあ。)

第三者的に見ると格好悪い元馬の言動に突っ込みたくなるが、優し

い女夏は嫌な顔一つしない。さすが、魔王のヨメである。

デートはお金のない元馬に合わせてウインドーショッピング（もちろん、見るだけ）やデパートの物産展の試食巡りだったが、高校生カップルなら十分楽しめた。いや、意外に楽しい。そりゃ、好きな相手なら一緒にいられるだけで楽しいだろう。心の中の俺は全然楽しくないが、女夏は心から楽しそうにしていることは分かった。物産展では、売り子のおばちゃんに、

「そのの彼氏、きれいな彼女連れてるねえ。どうだい、このイカの沖漬け、彼女と試食してみて」

と言われて喜ぶ元馬。夏も夏で、オバちゃんから渡されたイカの沖漬けを小皿からつまようじで刺して、元馬にあくとやりやがった。どこから見ても熱々カップルである。

ウインドーショッピングでは、アクセサリーのしゃれたお店でステキな銀のペンダントを見て、

「これちょっと可愛いね。二人でペアっていうのもいいね」

と女夏が手に取り、どれどれと元馬も覗いて、値札を見ると、7800円也。思わず、二人で顔を見合わせて、

「高い！・・・」

と声が合わさって思わず笑ってしまう。高校生カップルにとっては高い品物だ。本当はセレブの元馬には、きっと大した金額じゃないが（その気になれば、店のアクセ全部買い取りも可能だろう。）でも、「買ってやる」なんて言い出さない元馬は、夏にとつてもとても気が楽な存在だ。

「ちょっと高いから、これなんかどうかな？」

夏は店の隅にあった棚からストラップを手を取った。小さな動物のキャラクター（ウサギもどき？）が付いている。男の子と女の子（動物ならオス、メス？）のペアになっている。
1つ250円。これなら高校生のお財布にも響かない。二人でお金を出し合って、お互いにプレゼントする。

「初デート記念ね」

無邪気に微笑む夏を見て、元馬は、

（くっっ・可愛い、抱きしめてえ・・。）という衝動と戦っていた。お昼にはお馴染みのハンバーガーチェーン店での食事。二人とも新聞チラシのクーポン持参。好きなハンバーガーと飲み物とポテトMサイズ2つのペアセットで950円が800円になる優れものだ。コーラを飲みつつ、夏はフライドポテトを摘み、元馬に

「源くん、はい、あ〜ん」

（おいおい、女夏。さすがにサービスしすぎじゃないか？）

（うるさいわね。元馬くんが魔王様かもしれないでしょ。これくらい当然よ。）

それにしても・・あの熱血硬派男、源元馬が完全に骨抜きに腑抜けな顔。学校の取り巻き男子には絶対見せられない顔だ。

そして夕方になった。

「ちょっと遅くなっちゃったな」

「うっん・・まだいいよ。何だか、別れがたいよね」

まだ、日は傾いているがまだ暗くはなっていない。小さな公園のベ

ンチに二人で腰掛け、ちよつと会話が途切れた。

「あの、夏・聞きたいことが」

「宗治先輩のこと？」

「ああ、その何というか、先輩が君に告白したって聞いたけれど・・」

「源くんもしてくれただじゃない。私と付き合ってたって」

「ああ、確かに言ったよ」

「それって、私のこと好きってことよね」

「ああ、そっだよ」

「うん・・そっだよじゃなくて・・」

（おい、女夏、何言い出すんだ。）

（あなたは黙って、ここからは女の子の駆け引き。）

（駆け引きって・・。）

こいつ、完全にデートの主導権を握ってやがる。

「夏、好きだ。愛してるって言って」

元馬は真剣な目で夏を見つめた。そして思い切ったように

「夏、好きだ。愛してる。宗治先輩や隆介には渡したくない」

「あ・・ありがとう。私も源・・うん・・元馬くんのこと好き。」

「な・・夏！」

元馬が理性を失ったように女夏を抱きしめた。

「うれしいよ。ずっと大切にするから」

急に抱きしめられて元馬の胸に添えた右手できゅっと女夏は元馬のシャツを握り締めた。
合図だと思って体を離す元馬。

（おいおい・・・初デート初キスは早いだろう！女夏！）

自分のことは棚に上げて叫ぶ俺。

（何バカなこと言ってるのよ。確かめるの。）

（確かめるって何を？それより、今の状況はヤバイって・・・）

確かに元馬の野郎、真剣に女夏に向かって顔を近づけてくる。どうする！女夏！！

「あの・・・元馬くん？」

かなり急接近でも目を真ん丸くしてとぼけたように言う女夏。（うまい）

我に返った元馬が固まり、顔が急に赤くなる。（これは恥ずかしい。）
寸止めくらった元馬に女夏が、

「私のこと大事にしてくれるって言ったよね。どんなことが起きても夏のこと守ってくれる？」

「あ、ああ。守るよ」

「うれしい。その言葉、忘れないでね」

さっと、ベンチから立ち上がる女夏。（ひでえ・・・寸止めかよ。）

（簡単に落ちないのが価値を高めるの！立松寺さんと一緒にしない

で。

（一緒にて・・立松寺を侮辱するな女夏！彼女はなあ、彼女は、入学試験の時から俺のこと好きで好きでたまらなかつたんじゃあ！！！！）

（はいはい、ごちそうさま。それはさておいて。これで元馬くんは、宗治先輩と同列の魔王候補ね。私のこと守ってくれるって心の底から思ってくれているわ。）

（お前が言わせただろ・・）と思ったが、女夏の意図が分かった。宗治先輩は魔界のことや側室戦争のことを知った上で夏を守ってくれると言った。夫たる魔王なら、ヨメたる夏を守ると言うに違いない。だが、元馬は知らない。知らないが、きっと知れば宗治先輩のように夏のことを守ってくれるだろうことは、先ほどの言動から俺にも分かった。それくらい彼の思いは真剣であった。十分、魔王候補の心構えができているといっていいだろう。いつそのことキスして、確かめればいいのに・・と思ったが、女夏の気持ちもよく分かった。こいつ、宗治先輩の告白にかなり宗治先輩寄りに心が傾いていた。だけど、元馬や隆介のこと嫌いだ。むしろ、好き。だからどうしていいか分からないだろう。誰を本当に好きなのか。彼女なりに迷いがあるのだ。迷っているのにキスはできない。何とんでも女夏も乙女なのだ。

夏とトリプルデート大作戦 隆介編

2日目はVS隆介である。隆介は幼稚園からの幼馴染であるから、改まってデートというのは奥がましいが、宗治先輩のことがあったので、隆介自身ももやもやを吹き飛ばしたいと言う意味で夏の誘いに乗った。但し、デートの場所は隆介の指定場所。というのも、家の仕事が入っていて、どうしてもキャンセルできなかったのだ。彼の家は鉄道、ホテル、デパート等を経営する橘グループであるが、彼も高校生ながらも将来のために経営に一部参加しているのだ。(生徒会長をやりながら、本当にすごい奴だ。勉強は学校で1番。バスケ部部のエースで全国制覇のメンバーでもある。)

「あの・・・この水着・・・ちょっと恥ずかしい」

待ち合わせは、ホテルのプール。隆介とは初デートとは言えないが、いきなりプールで水着と言うのはちょっといただけないと思っただが、今日の隆介の仕事がこの新装オープンしたプールの視察とホテルのファシリテイのレビューであったので仕方がない。なにやら若い層向けの仕様らしく、若い女の子目線での感想を教えて欲しいと言われていた。

(おいおい、デートじゃなくて仕事か？相変わらず、素直でない奴だ。このままじゃ、元馬や宗治先輩に夏を盗られちゃうぞ・・・)

と俺は心配したが、これはこれで隆介の精一杯のアプローチなのだろう。幸い、本日も女夏が主導なので俺は暇ではあるが。

恥ずかしい・・・と魔王のヨメが言った水着姿であるが、俺から見たら結構いい感じだ。今回は妹の秋お勧めの「清楚な中に野生の鮮烈さを！」をテーマにした(なんのこっちゃ)

水着。スカイブルーを基調としたホルターネックで下半身はパレオを巻いているが、健康そのものの長い細い足が際立ち、右胸元にちよっとだけワンポイントのトラのプリントがある。ここが野生？だが、たぶん、夏を見た男はこのワンポイントに目が行き、夏の形のない胸に釘漬けになるだろう。我が妹、秋・・さすが12歳のプレイガールである。本人は発育途上のナインのくせに・・・。

そんな妹の秋の思惑に専制パンチをくらった隆介は、いつも沈着冷静なのに思わず声がうわずってしまった。

「な・・夏・・その水着、このプールの雰囲気にはぴったりだね」

ホテルの宣伝用パンフレット等に使うかもしれないとのことで、プロカメラマンが何人かのモデル嬢を相手に撮影していたが、現れた夏を見て、

「御曹司、彼女も撮っていいかな。素人ばい娘の方がイメージに合いそうだし」

「夏、どう？」

「えっ・・・恥ずかしいよ・・。でも、橘君のためなら、夏は言うこと聞きます」

（おいおい、女夏。いつものご奉仕か？）

（いいの。橘くんには逆らえないのだから。）

そういえば。こいつ隆介の女房状態だった。これで、正式には付き合っていないかったって方がおかしい。いったい、隆介の野郎、今まで何してたんだ・・と俺は突っ込みを入れたかったが、カメラマンに要求されるままポーズをとる夏の肢体に釘漬けの隆介を見て、こいつも今日は勇気をふりしぼるはずだと思った。

プールを背景に夏の撮影が終わると、タオルとドリンクを持った隆介が夏に手渡して、プールサイドのテーブルに誘った。

「橘君、ここなかなか楽しいね。カップルならデートでも使えるかもね」

（確かに、男の下心を刺激するが。）

確かにプールサイドのバーカウンター、タイ式マッサージやエステが受けられる施設など敷居も高くない雰囲気のカップルで過ごすには飽きない感じだ。何より、おしゃれで高級感があるのがいい。会員限定か紹介がないと入れないとのことなので、一般人には縁遠い施設ではあるが。

「なあ、夏」

隆介はおもむろに話し始めた。夏とは家族ぐるみの付き合いで、水着でデートも別に初めてではない。二人つきりとなるともしかしたら今日が初めてかもしれないが、昨年の夏には一緒にグアムにも行った仲でもある。（もちろん、家族同伴）だが、今日はそういう時間にはしたくないと隆介は思っていた。

「覚えているかい、小学校2年生でオーストラリアのゴールドコーストへ行った時のこと」

「ええつと・・・」

隆介とは毎年の夏、どこかへ行っているから記憶の検索に時間がかかる。特に俺には覚えがないから、女夏に頼るしかない。

「海岸で二人、貝拾いをしていた。君がトゲトゲのついた貝を拾いたいと言うから、僕が付いていったんだ。夕日が海に沈もうとして赤く海を照らしてキレイだったなあ・・・」

（そうだった・・・）

(覚えていないのか、女夏?)

(いや、何か大事なことを言ったような気がするんだけど。)
「ねえ、夏ちゃん。いつまでも一緒にいたいね」

貝拾いに夢中な小さな夏の姿を見て、小さな隆介がそんなことを言った。すると夏が、

「だったら、夏が隆介くんのお嫁さんになってあげるよ」

と言った。小さな子の無邪気な発言だ。幼馴染ならこういうエピソードは不思議じゃない。ゲームや漫画ならありきたりの展開だ。そして、ありきたりの展開は、予想通りにありきたりの結果になる。小学2年生でも頭のキレはすでに高校生級の隆介には、お嫁さん・と響きが強烈にインパクトされてしまったのだ。

「そう夏は俺のヨメさん。あの時の約束を俺は忘れてはいないよ」
「えっ?」

とまどう女夏。隆介がなけなしの勇気をふりしぼって、告白するかもしれないとは思ったが、告白どころかプロポーズまでレベルアップするのは行き過ぎだろ!

(ヨメさんって・・・まだ高校生だし、それは早いぞ!隆介、一応、魔王のヨメではあるが)

突っ込みを入れる俺。その突込みの声が届いたのか、隆介は思いとどまったようだ。さすがによく知った幼馴染とはいえ、結婚してくださいいは早い。やっぱり、手順を踏んでから

だろう。生睡を飲み込み、勇気をふりしぼった。でない、一直線で夏にアタックする元馬や大人魅力でせまる宗治先輩に大事な夏を

盗られてしまう。例え、夏が自分を選ばず、どちらかと付き合っ
ても隆介は今言わないと一生後悔するだろうと思った。戦うた
めには挑戦の名乗りをあげないと・・そう、今から言うのは戦うた
めの宣言である。

「夏、俺は君のことが好きだ。絶対、君を幸せにするから・・俺と
付き合ってくれ」

夏の両手をそつと握る。

「本当に・・・幸せにしてくれる？夏を守ってくれる？」

「ああ、本当だ」

「夏、うれしい。だけど、付き合ってたって、隆介くんと私って今
まで付き合っていたような感じだったけどね」

「確かに・・そうだけど、やっぱり、こういうことってはっきりし
なきゃ」

（元馬や宗治先輩とは別れてくれるね・・。）という言葉が喉元
まで来たがグツとこらえた。それを言うと夏が困るかもしれない思
ったのだ。唯一の一人になって欲しいけれど、それは夏が決めるこ
と。今、挑戦者として名乗りを上げただけでいいじゃないか・・と
自分に言い聞かせた。女夏の中の俺は内心、

（独占欲の強い隆介のことだから、元馬や宗治先輩のこと問いた
だすかと思っただが、意外とこいつ、大人だな。）

と思った。二人の彼氏がいても意に介さない宗治先輩に対抗できる
度量の大きさである。まあ、宗治先輩は魔王のこと知っているから
余裕の対応であると思うが。この年頃の男は独占欲まるだしで、
彼女の行動を監視してちょっと友達の子と話すことさえ嫌がる

狭い奴が多いが、若いだけに致し方ない。だが、女の子の心は縛れない。要は自分に振り向いてくれるだけの魅力があるかないか・である。そういう意味で、元馬も宗治先輩もこの隆介も恋愛初心者にしては、なかなか優秀である。俺も心の中で立松寺との付き合い方をよく考えなきゃ・・と思った。自分が幸せなら・・の気持ちではいつか、彼女を失いかねない。

「夏・・うれしい・・。私も隆介くんのこと・・好きよ」

「隆介って呼んでくれていい。今日から新しい一歩だ」

「そうだね・・」

ぐっと隆介の手に力が入る。いい雰囲気だ・・。(ちよつと待て！
女夏・・ヤバイぞ)

そう隆介のやろう顔を近づけてきた。キスする気だ！勇気をふりしぼって告白したのに大胆な奴だ・・とまたしても自分のことを棚に上げている俺。だが、キスは単なるキスではない。魔王覚醒の引き金になる。よく考えた上でない！

だが、女夏のやろう・・今度は寸止めする気がなさそうだ。あろうことが目をつむりやがった。

(ちよつと待て！元馬には寸止めで何で隆介にはOKなの？なぜじゃ？女の気持ち分からない)

(もう何だか、分からないけど、夏、行きます！)

だが、唇が重なる瞬間、聞きなれた声が二人をフリーズさせた。

「お坊ちやま、次の視察の時間です」

運転手兼隆介の執事である須藤さんである。このおっさん、狙って

ないか？

二人の状態を見ているのか見ていないのかわからない細い目で、右手に持ったPC端末を見て、

「お次はホテルレストランでサマーシーズンのプロモーションランチの試食、その後、新しく造りましたカップルスイートルームの見学がございます。」

「す・す」

隆介の声がうわずっている。女夏はというと顔を真っ赤にして羽織ったタオル地のガウンの裾を握り締めている。

「ス、須藤さん・・タイミングが悪すぎ！」

「いえ、タイミングはぴったりでございます。夏様のお着替えの時間を勘案しまして、ここを20分後に生ましてその五分後にオーダブルの皿がタイミングよく出せるよう調整させていただきました」

(うん・・あいかわらず、グッジョブだ！須藤さん！！)

結局、この後、チャンスがあれば続きを・・と下心ありありの隆介も仕事とデートを掛け持った罰で、そのチャンスも作れずあえなく終了。とりあえず、俺的にはよかったといえようか？いや、それとも魔王確定の方がよかったのか。だが、女夏のことを考えるとやっぱりよかった。体を共有しているせいか、俺はこいつには魔王とやらとうまくいって欲しいと思いはじめていた。最初のとにかく男に戻って立松寺とラブラブ生活に戻りたい！の一心であった以前の自分と比べてなんと大人になったことだろう。

夏とアフターデートと小姑（前書き）

16話登場人物

みなもとまで
源満天：13歳 中学1年生 元馬の妹 兄の元馬が大好きのブラコンの妹。兄と夏のデート現場を見て思いきった行動に出るが…

夏とアフターデートと小姑

「順調のようだな・・・」

2日目のデートから戻ると待ち構えていたようにリイが部屋で待っていた。無論、無断侵入である。こいつは最近、遠慮がない。まあ、2階の部屋の窓のカギがいつも開いているからそこから勝手に入ってくるのだが、いくら夏が女とはいえ、心の中には男夏もいるいつものエロい赤いピチピチ革服で現れると、男の方が動揺する。といつても、ふらふら手を出せばやはり地獄の悪魔。それこそ、地獄を見ることになるうが。

「元馬も隆介も完璧、私の魔王様状態。キスすれば発動よ、たぶん」
「そうだな。この鏡にもそう出ている」

例の真実の鏡だ。よく見ると周りの宝石が右回りは赤く、左回りは青く光っている。不思議な感じだ。

「右は魔王様の恋愛度、左はお前の恋愛度を示す。源元馬、赤、100、青95、橘隆介、赤100、青95、一柳宗治赤90、青99。宗治はまだデートしてないから100にはいってないが、後はお前しだいだ。だが、どうもおかしい。3人ともここまで適合するとは・・・今までに聞いたことはない」

今までも魔王候補は複数いたが、正室の行動しだいでだんだん淘汰され、最後の一人に絞られてきたものだが、今回は候補3人とも残った。つまり、夏がキスすれば3人とも魔王に覚醒してもおかしくない。

(3人も同時に魔王様が誕生するなんてありえないが。)

「もう、夏才ネエ様・・・私というものがいながら、男とデートするなんて不潔よ不潔」

(えっ?)

リイの後ろにひかるちゃんが隠れていた。しかも、玄関から正式に入ってきたらしく、お泊り用カバンを抱えている。

「ひかるちゃん・・・今日、泊まるの?」

おそろおそろ聞く女夏。いや、心の中で男の俺も聞いていた。なぜなら、そろそろチェンジしそうな気配があるからだ。心が男に戻ったら・・・(ああ!俺の狼を制御できる自信はない!)といつても、体は女だから間違いが起こることはないが、たぶん、悶々として一晩寝られないだろう。

「まあ、許してあげる。でも、その代わりに今日は私と添い寝してね。夏才ネエ様」

(ああ・・・明日は寝不足で宗治先輩とデート決定である。)

一方、昨日の楽しいデートを終え、今日はその分、がんばったバイトから帰った源元馬は2人の訪問者を出迎えることになった。2人同時ではなく、入れ替わりで現れたわけだが。

一人はずいぶんご無沙汰していた人物だった。源満天^{みなもと}、妹^{まて}である。

妹といっても本当の妹ではない。正式には従兄妹であるが、わけあって本家の養女となったので元馬の妹という立場の女の子である。ちなみに中学校1年生。4つ下の妹がいつもの清楚な和服を着て、アパートの扉の前で背もたれして待っていた。

「お兄様、バイトもいいけれど、ちゃんと食べてる？」

「なんだ満天か。父さん、母さんは元気してたか」

「家族はみんな元気よ。相変わらず、忙しくて一緒にいないけど・

」

「そうか。」

金持ちの家は家なりに苦労がある。父はビジネスに忙しく、世界中を飛びまわっているし、母も社会的な慈善団体活動でてんてこ舞いで、家族揃う時がない。元馬が実家にいた時のことを思えば、きつと満天は寂しく家で過ごしているのだろう。

「お兄様のことだから、部屋はすごく汚いと思って、満天、掃除に来ちゃった。ついでに何か作ってあげるよ」

そういつてドアを開けさせる。目の前には比較的整頓された部屋が広がった。だいぶ前に徹底的に夏が掃除してから、もしや、また夏が来てくれるかも・・・と期待した元馬の行動で保たれた結果であった。

「やっぱり・・・」

この中1ながらマセた妹はそうつぶやいた。そう、兄の浮気を知っている小姑のような表情である。

「お兄様が昨日、見慣れない女性と街中でデートなさっているのを満天は見ました」

「えっ？どこで？」

「橘屋デパートですね。商売敵のデパートでデートなんて、次期、源グループ総帥としていかなものかと思いましたが、私」

（おまえも商売敵のデパートにいたんだろっ！）という突っ込みは止めておいた。その10倍言い返されるに決まっているからだ。

「声をかけてくれれば紹介したのに」

「かけましたわ。お兄様ったら、鼻の下を伸ばしてその女性の方ばかり見ているから、私のこと完全に無視でしたわ」

「え？」

「確かにキレイなお嬢さんでしたわ。でも、お兄様、お忘れじゃなくて！」

「何をだ？」

はつきり言って元馬はこの妹は苦手だ。可愛いが自分を束縛するような口調で迫ってくる。元来、フェミニストの元馬は必然的に言われない放題である。

「お兄様は、私をお嫁さんにしてくれるっていったわよね」

（また、それか！）

それは満天が養女になった時のことだ。元馬が10歳、満天が6歳。養女となって本家に来た満天が、不安で泣いているときに当時は小さな紳士だった元馬が、

「満天ちゃん、泣かないで。僕のお嫁さんにしてあげるから」

今思えば、小学生じゃなければキモイ発言である。だが、満天はそれで

「お兄様大好き」

になってしまった。嫁さんのようにいろいろ世話を焼く。しきたり

で離れて住むことになった幸いしたが、こつ付きまとわれては好きな女の子とデートもできない。(いや、昨日してるし・・・)

「もうお兄様、浮気は許さないんだからね」

胸をぽんぽん叩く。ちよつと危ない発言である。元馬は

(俺はロリコンでもシスコンでもないんじゃあ・・・)

と心の中で叫んだ。この妹なら、夏のところに押しかけていってお兄様と別れる・・・と言い出しかねない。まあ、それも将来の義理の妹を紹介できるからいいかなあ・・・なんて思っていたら、その締めりのない顔になり、それを見た満天は怒り心頭になった。

「私のこと無視して、彼女のこと考えてるでしょ!」

(お前はエスパーか!)

「もう許さない!これでも食らえ!」

満天が飛びついてキスをしてきた!!

(ちよつと、まて・・・満天)

まて、まて・・・ってこれは受けるな?なんてちよつと頭を過ぎったが、これはまずい展開になった。だいたい、ファーストキスは夏と!と思っていたのにシヨツクだ。唇を離して満天はにっこり微笑んだ。

「これで許してあげる。彼女とはまだ何でしょ。ふふん・・・勝った」

「勝ったって・・・おい、満天、ふざけるのはよせ！」

「わーい、怒った怒った、だけど、お兄様のファーストキスの相手はわ・た・し」

「わーっ、待て、満天」

だが、そのとたん、満天の体から光があふれた。まぶしさに目を閉じる元馬。

時間にして5秒くらいであろうか、光がおさまりきよとんとしている満天。

「お兄様、わたし・・・帰ります・・・」

先ほどの元気がない満天はドアを開けて、元馬が呼び止めるのも聞かずにいなくなってしまうた。いったいどこへ行ったのか？しかも、あの光は？

パチパチ・・・と手を叩く音に元馬は気がついた。最近、学校に着任した外人の教師である。

名前は確か、ドミトルとか言ったような・・・そいつがなぜ、自分のところにいるのか分からないが。

「まあ、妹との一発はカウントしません。私的には・・・」

「一発って、キスだろう！」

「キスです。でも、妹です。血を分けた妹ではないとはいえ、少々背徳の臭いがしますね。ああ、彼女は従兄妹でしたね。従兄妹は結婚できますから背徳ではありませんか」

(どうして、こいつが俺の家庭内事情を知っているのだ?)

黙ってにらみつける元馬。こいつはただの教師ではない。

「いやいや、今日参ったのはそのことではありません。これを渡したかったからです」

そう言うとドミトルは、一対の手袋を手渡した。

「トールの手袋。かつては雷神トールが武器であるミッシヨニルというハンマーを使いこなすのに使ったとされる防具です。今は改造してあって、両拳に魔法の宝石がはめてあります。赤いガーネットは炎の力を、黄色のトパーズは雷の力を、ブルーサファイヤは水の力を、緑のエメラルドは大地の力を、そしてダイヤモンドは守りを、ルビーはスピードをそれぞれ司っています」

そう言つて、元馬の手に握らせたグローブ。ずっしりと重い。

「だから、何なんですか？押し売りなら間に合ってます。俺には金がない」

怒鳴った元馬だったが、それより迫力のあるパンチが元馬のこめかみをかすつて止まった。

「これを装着して戦えば、あなたの大事な女性を守ることができますよ。約束したのでしょうか？君は。守るといった以上、約束は守らなきゃ・・・。これを持ってないと約束は守れない。火曜日の午前9時まで必ず、体に身につけておきなさい。そうしないと君は候補からはずれる・・・」

「候補つて・・・それに夏に何かあるのか？」

「まあ、君の場合、先ほど貴重な戦力を作りましたから、まったく彼女の役に立つてはいないとはいえませんが」

「いったい、何を言っている!」

受け取ったグローブに視線を落とし、再びドミトルを見たが、満天と同様にいつの間にかいなくなってしまった。手にしたグローブの異様さだけが残った。

夏とトリプルデート大作戦 宗治編

デート最終日はV S 一柳宗治である。宗治もメールで会う場所を変更してきた。山奥の禅寺であった。一柳家の縁の寺らしく、住職も親しく話しかけてくれた。小さな寺で、小さなお堂と宿坊しかなく、どうしてこんなところでデートなのか夏には理解できなかった。

2時間前、宗治先輩はバイクで待ち合わせ場所にやってきた。駅前で待っていた夏にヘルメットを投げて、

「乗れ」

と一言。さすがに不安になった。昨晚、メールの後、すぐ電話がかかってきて、

「連れて行きたいところがあるんだ。明日、下はGパンをはいてきてくれ」

と一言。(なぜ? Gパン)とその時は思ったが、バイクの後ろに乗るならワンピースやスカートは適していない。だから、ピッタリとするスリムなGパンにTシャツでやってきたのだが、タンDEMで宗治先輩に引っ付きながらも先輩との初デートなのに残念な気持ちではあった。

住職は山の下に住居を構えているそうで、用があつて下山し、本日は戻らないといって姿を消した。静かな山寺に2人きり・・・である。

(宗治先輩の方が危なかったり・・・)

女夏が心の中でそうつぶやいた。今までのデートは女夏なのに、今

日に限って俺に出番が回ってきた。俺は思わず勘弁してくれ〜と叫んだがどうにもならない。

本堂で座禅を組む宗治。それに対して正座をして見つめる夏。20分ほど静かな時が流れ、山を跳びまわる鳥のさえずりや風でたなびく山々の木々の音に慣れてきた頃、

乗れ・・・と言ってから一言も話さなかった一柳宗治が口を開いた。彼は愛刀「毘沙門」を左肩に立てかけて微動だにしない。

「こんな遠くまで連れ出してごめん」

「ここは？」

「剣の修行で使う一柳家の寺だ。迷いが生じたとき、ここで座禅し、己の魂を浄化している。俺の精神修養の場所だ」

（はあ〜・・・さすが、先輩。色気も何にもない。だが、人っ子一人いない場所だ。もしかしたら、狙ってないか？いや、先輩に限ってそれはないか）

「あの宗治先輩」

「宗治でいい。俺はお前の旦那候補だろ。仮のフィアンセだ」

「はい・・・」

（ちくしょう！やりにくいぜ。女夏、代わってくれ〜）

（昨晚からあなただったから、午後には入れ代わるかもね。昨日のひかるちゃんに欲情してあなたほとんど寝てないでしょ。ほんとにあなたは凡人ね。）

（うるさい。健全な高校生男子でアノ状態で普通に寝られたなら異常だ。あれで欲情しなかったら、僕は2Dギャルしか興味ありません〜とかいう危ない男子だろ。）

（いや、あなたのそのいやらしい目のこといつてるの！ひかるちゃんのを見たでしょ。）

(そりゃ、見たけど。あの状態で見ないなんでできないでしょ。)
添い寝したひかるは思いのほか寝造が悪く、夏を抱き枕に胸は押し付けるは、息は吹きかけるわ、スケスケのネグリジエははだけるわ・
で俺は目がギンギンになってしまった。

(まったく、男はいやらしいわね。)

(それって、宗治先輩にも言ってるのか?)

(先輩は別よ。だって魔王様かもしれないし・・・)

いや、女夏、断言しよう。魔王様は絶対スケベだ。なにしろ、美人の正室がいるのに16人も側室がいるのだ。スケベじゃないと務まらない。

だが、この人気がない寺で一柳宗治が夏に対して下心をむき出すようなことはないとは思っていた。彼は昨日までの2人と違って、魔界のことを知っている。

「俺は迷いや、自分の中のまがまがしい心を見つける度にここへ来て、自分の心を清めてきた。座禅をすると雑念が消え去り、心が無になり、本当の己と向き合える」

「先輩もそんなまがまがしい気持ちになるんですか」

「なる。君に魔界の話聞いたとき、俺は自分の心がそのことを歓迎したことを恐ろしく思った。だってそうだろう。普通ならバカげた話。だれが信じる。例え、気味の悪い化け物と前日に戦ったとしてもだ。俺は魔王かもしれないと思った時、心の中の自分が喜びを感じたのだ。そうだ、俺は魔王だって。人間じゃない。人外の生き物である」と

話が深刻になってきた。宗治先輩は自分の心内の悩みを夏に告白し

ているのだ。なぜ、自分に？宗治にとって夏が心の支えになっていることが何となく分かった。

「夏、俺の昔のあだ名を知っているか？」

「あだ名？」

「柳宗治は学校でも評判の好男子だ。それでいて話しかけにくい高尚な雰囲気があり、あだ名で呼ぶなんて考えられない。俺は首を横にフル。」

「人斬り宗治」

（人斬り？人を斬るってこと？）

女夏が天然ぶりを発揮している。あたりまえだ。大根斬りだったら間抜けだ。

「聞いてくれるか、夏」

うなずくしかない。

宗治が中学3年生の時だ。街で変質者による斬りつけ事件が頻発していた。突然、振り返りざまに刃渡り30センチもある包丁で斬りつける手口で町を恐怖に陥れていた。学校の帰り道、友人3人と帰っていた宗治たちにその振り返り斬りつけ魔が友人を背後から斬った。斬りつけられたところが運悪く、首筋にあたって鮮血が飛び散った。斬りつけ魔は、その血に興奮したのだろう。さらにもう一人の友人を斬った。左右の腕を切られて、血が宗治の顔にかかった。あまりの恐怖なのか、2人の友人がなすすべくもなく斬られているのにまったく動けなかった。

「そんな状況なら、動けなくて当たり前だと思います。」

おれは素直にそう言った。俺だって、そんな状況では脚がすくんで動けないに違いない。

「違うんだ。友人の血を浴びて、俺の中で何かが目覚めた。」

その証拠に宗治に襲い掛かってきたその暴漢の腕を冷静に掴み、軽くひねった。ボキッと音がして折れた。宗治は実家の古武道の流派が教える一子相伝の組み手技を習得している。素人の攻撃をかわし、腕を折ることは難しくない。5歳の頃から仕込まれた基本技だ。折れた腕の痛みで暴漢が獲物を落とした。いや、地面に付く前に宗治が掴んだ。刃を掴んだので手のひらから血が出たが痛みは感じなかった。それより、刃物を持った自分にみなぎる高揚感と斬りたい・という衝動に支配された。柄を握りなおすとまさに一撃であった。暴漢の左肩から一撃で血しぶきが雨のように降った。

「その血しぶきがきらきら光って美しかった。そう斬ることは快感だった。」

「でも、それは先輩、明らかに正当防衛でしょう。ご友人は大丈夫だったんですね」

その事件は知っている。宗治先輩が関わったことは初耳だったが、その暴漢は結局、2人を死亡させ、10人に重傷を負わせ、さらにその倍の人間を傷つけた。

「確か、犯人は警察に追い詰められて自殺したって・・・」

「俺の一撃で事切れた」

「えっ・・・」

袈裟懸けに斬った宗治先輩の一撃で？だって包丁だろう？

「状況を調べた警察が正当防衛だと認定した。友人2人が斬られて重傷で襲いかかってきた刃物を取り上げて反撃したのだから当然だろう。それにそんな獲物で袈裟懸けに斬ったことも中学生には無理とされた。犯人は自分で自分を斬ったことで片付けられた。おかしいよな。どうやって自分で袈裟懸けに斬れるんだ。だが、俺は古武道の組み手は免許皆伝だが剣術はやってなかった。だから、素人ではできるわけがないということになった」

（宗治先輩って、剣道の達人じゃなかったけ？高校生から初めて3年で全国制覇したってことか？よほどの天才だろう。）

「でも、それって・・・宗治先輩は少しも悪くないと思います。」

女夏が話した。いつのまにか入れ替わったのだ。シリアスな話なので俺としてはラッキーだったが、いったい宗治先輩は何が言いたいのだろうか。

「違うんだ。それがトラウマになったんじゃない。人を斬るのが楽しい自分に気づいたんだ。鮮血が飛び散るあの美しさ、悶絶して倒れる瞬間・・・。それを知って俺は愕然とした。自分の闇の部分が大きくなるのが怖かった。あえて自分を律するために剣術の修行をした。この寺で禅を組んで精神修養もした。」

「先輩はそれから人を斬ったことはないんでしょ。なぜそんなあだ名に？」

「斬られた友人が斬られたことよりも、俺が犯人を一撃で仕留めたときの目がシヨックだったようだ。2人とも病院で意識不明中に人斬り宗治、人斬り宗治ってうめいていたそうだ。それが周りに広がったが、まあ、事件も事件だから大人が巧みに封じ込めた。高校に入ってからそんなあだ名をいう奴もいなくなっただがな」

「もしかして、そんなことを忘れていたのにあのパーティーで魔物を斬った。それが人斬り宗治を目覚めさせた？」

一柳宗治は声を荒げた。物静かな物言いが激しい怒号になった。

「そつだ。あれは快感だった。心の中の悪が解放され、気分が爽快だった。君が魔王の話をした時、俺は納得した。どんなに精神修養してもムダだ。なぜなら、俺は魔王で、邪悪な存在なのだ。今でもお前に襲いかかる敵を斬りたくてウズウズしている自分が怖い」

女夏はそつと立ち上がって宗治を胸に抱きしめた。

「私の魔王様。あなたは邪悪な魔王じゃないよ。私がいる限り、あなたの邪悪な心は私が受け止める。だから心配しないで・・・」

宗治の呼吸が落ち着いたのを確認し、女夏は宗治の顔を両手ではさんだ。もはや言葉はいらない。目を閉じてそつと唇を重ねた。光が二人を包み込む・・・。

（女夏・・・魔王解放か？）

俺の意識が飛ばされるのが分かった。肉体分離・・・そつ男夏の復活だ。

遠く、立松寺の寺院にいたランジェは、東に感じた邪悪な気配を的確に捉えていた。監視対象者のレベル5・・・最高値である。邪悪で強大な魔王が復活したことは間違いない。完全にこれは抹殺レベルである。ランジェは心で念じ、この地に派遣されている仲間と天界への応援を要請しようとした。早くしないと手遅れになる。この2代までは天界と魔界、人間界のバランスを維持しようとする穏健

な魔王であった。だから、ランジエたち監視団は監視するだけであった。だが、そうばかりではない。もし、超邪悪で強大な魔王が誕生したなら早いうちに始末をするのが任務であった。彼女の持つ、魔槍ゲイ・ボルクはそのための武器である。だが、その邪悪な気が押さえ込まれどんどん小さくなっていく。

「どういうことだ。確かに感じたのに・・・0になった・・・こんなことありえない」

ランジエは東の山を見やった。

光が収まり、宗治が叫ぶ。恐ろしい声だ。

「殺す、殺す、すべて殺しまくる。魔界の王、暴虐の覇者・・・今、ここに降臨する！」

「だめ！宗治先輩・・・邪悪な心は私にぶつけて!!」

夏は宗治にキスをする。深い深いキスだ。

「おおおっ・・・。」

宗治の邪悪な心が少しだけ浄化される。だが、唇を通して強大な荒ぶる力が猛々しく宗治の体を支配していることが伝わる。これを沈めなければ、魔界は間違った王を戴くことになる。それは妻として絶対防がなくてはならないことだと夏は思った。唇を離すと自分の胸に宗治の顔を埋めさせる。宗治の中の荒ぶる力が落ち着いてきた・・・後は少しずつ削っていくだけ。それで暴走状態を押さえ込む。この言葉を言えば、自分がどうなるかは女夏は分かっていた。

「魔王様・・・もっとして・・・」

女夏は宗治を包み込むように深いキスを再び重ねる。そつと倒れる二人。

宗治の燃えたぎる体に抱きしめられながら、女夏の脳裏に次々と顔が浮かんだ。

（私は宗治先輩が好き・でも、隆介君や元馬君の顔が浮かぶのはなぜ？まだ、私は迷っているの？宗治先輩、魔王様に体を許すのは行けないことなの？）

「くおおおおおっ……」

宗治、今や魔王と化した一柳宗治は両手で女夏のＴシャツを引き裂く。ブラジャーも引きちぎられ、胸が露わになる。

（魔王様の暴走を止められるのは私だけ……）

女夏は目を閉じた。目から涙が一粒、頬をつたう。

女夏は名実とともに魔王のヨメになるのだと覚悟を決めたのだ。

夏と側室戦争〜前夜

どれだけたつただろう。女夏は薄暗くなったお堂で目覚めた。あの出来事は夢？だが、すぐ側に裸の宗治が傍らに倒れ、赤いゆらゆらとしたオーラに包まれている現実を理解した。胸には赤く光るマークが見える。魔王の印だ。どうやら暴走は収まったらしい。ふと見ると自分も裸であることに気づいた。魔王と化した宗治に激しく愛された跡（胸のキスマーク）が残る自分の体を見て、恥ずかしさで手で胸を隠してうずくまる。

「ご苦労でした御台様」

いつのまにかリイがいて、自分の赤いマントをそつと夏に羽織ってくれた。

「魔王様が暴走状態のままでしたら、大変でした。天界からの刺客もやってきたでしょうし、ここは戦場となったでしょう。御台様のおかげです。身を呈して押さえ込むとは、正室しかできません。」
「私・私・私・宗治のこと好きよ・だから、後悔したくないけど・・ないけど・・」

リイはそつと夏を抱きしめた。嗚咽する夏。宗治を選んだということとは、隆介や元馬とはお別れということだ。だが、二人の顔を思い浮かべると夏はどちらもまだまだ好きなのだ。

「御台様、隆介殿や元馬殿もまだ魔王になれます。鏡が二人の数値が100のままです。御台様の気持ちも100のまま。考えられないことですが、魔王様は3人ということでしょうか」
「それって、私の夫は3人いるということ」

夏は宗治に愛された後の自分の体を見て、こんなこと3人からされたら自分が壊れてしまうと思った。

「分かりませんが、宗治殿、いや今は魔王、暴虐の魔王様と呼びましょうか、その方と結ばれてもあとの2人はあなた様のことをあきらめ切れないようです」

「そんな・・・」

「ここは去りましょう。暴虐の魔王様が目覚めれば、また、あなた様を求めるかもしれません。」

「えっ・・・それは嫌々、もう耐えられないよ、もう体中がががががたがた・・・」

「ふふ・・・御台様、冗談です。魔王様はあと何時間かはこのままです。次に目覚めたときには真の魔王様となっているはず。今はそのための休息の時間ですわ」

「魔王様って、いい気なものね」

「あなた様の夫でいらっしやいます。それではつかまってください。家まで移動します」

リイは女夏を連れて、夏の自宅まで飛んだ。そこには女夏から分離し、復活した男夏の体があるはずだ。魔王の復活によって夏が完全に文化し、行き場をなくした男夏の魂に新たな肉体が提供されたはずだ。人間界では2人はおそらく双子とかの設定だろう。

長い眠りから目覚めた俺。見慣れた天井が目に入る。

(おおっ・・・俺の部屋だ。)

慌てて飛び起きようとするがひどく体が重い。そこへ急に扉が開い

て、妹の秋が入ってきた。

「もうお兄ちゃん、寝すぎ！いつまで寝ているのよ。」

俺は休日の最終日、昼からベッドで昼寝を楽しんでいたらしい。外は真っ暗である。

（おいおい、目覚めればどうという設定だ、これは？）

俺は魔界の適当な歴史設定に悪態をしつつ、秋に家族構成について尋ねた。妹にそんなことを尋ねるなんて、寝すぎで頭が腐ったと思われるが致し方ない。

「お兄ちゃん、バカあ？」

あきれてものが言えないような口調で秋が言う。

「お父さん、お母さん、お姉ちゃんに私にお兄ちゃんですよ。寝すぎでどこかに行っちゃったんですか？」

（お姉ちゃんか・・・）

俺は、ほつと溜息をついた。どうやら、女夏と分離して双子の姉弟という関係になったらしい。ちなみに名前は俺が夏で女夏が夏妃。そういえば、女夏のやつ、宗治を覚醒してから未だに帰っていないなんてやばくないか？俺はあの状況で女夏が無事では済まないだろうとは思ったが、今は自分に戻れてよかったとしか頭になかった。

「お姉ちゃん、遅いなあ・・・宗治先輩と行くところまでいっちゃたのかしら？」

(秋よ・・・お前のカンはするどい。感心する。)

それからしばらくして、女夏はリイに連れられて家に帰ってきた。どこか疲れきった顔で明らかに宗治と何かあったような感じである。女夏は、男夏を見て、

「あなた、よかったね。無事、戻れたようね」

「おかげさまでね。この世界では姉貴と呼んだ方がいいか」

「どうでもいいわ。いずれ、私はこの家からいなくなるでしょうから。それまでお姉さん設定でも妹設定でも構わないわ」

(そうだよな。)

俺は思った。魔王を覚醒させたということは、いずれこの女、魔界で暮らすということだろう。その時はまた、俺と秋だけの兄妹設定ということになる。両親も設定が変わる度に子どもが増えたり、減ったりで大変だ。

「まあ、俺は普通の人間に戻ったようだし、これで魔王とか側室戦争だとかには関わらなくていいのだろう。バトルエリアでは、俺は背景。まあ、魔王も復活させたことだし、戦いもないか」

「...いや、そうでもないようだぞ」

リイが俺の右腕を掴むとシャツの袖をまくった。そこには、二の腕に黄色く光るのマークが・・・。

(えっ??うそ!そんな展開あるのか?)

「マークは・・・魔王の印だっけ?」

俺はおそろおそろリイに聞いてみた。女夏もリイもコクリとうなずく。

「うそだあゝ．．ありえない！そもそも、魔王だったら、女夏がヨメさん？ちよつと、今の設定だと姉貴だろ！姉が嫁さんなんて、どいう背徳設定だあゝ」

「しっ．．静かにしないか」

リイが声を潜める。妹の秋が、

「またお兄ちゃん、寝とぼけてる．．」

と言っている声が聞こえた。

「お前の マークは黄色く光っている。ということは、お前の正室は御台様ではない」

「えっ？色で違うのか？」

「残念ながら．．というか、もはや、私の想定を超えている展開だ。ただでさえ、魔王様が3人誕生しそうだというのに．．」

リイは状況整理しながら考えていた。

（そもそも、魔王候補が3人で3人も魔王になるかもしれないのは、御台様の力のせいだろう。歴代正室の中でおそらく最大の力リスマのせいだ。候補3人もこの方にゾッコンなのだから．．。しかし、女夏の別れた男の方も魔王候補なんて予想外だ。しかも、系統が違う。いったい、次の魔界はどうなってしまうのだろうか。）

「正室が夏じゃなかったら、俺の正室ちゃんは誰かなあ？もしかして、立松寺．．いや、絶対そうだ。そうに違いない！」

「はあ・・・あなた、本当にお気楽ねえ。魔王ってことは、側室もいるんでしょ。もし、華子ちゃんが正室なら、あなた、殺されるわね」

女夏の冷静な一言。この女、だてに立松寺と過ごしてはいない。俺はその言葉にハツと我に返った。確かに、それはそれで恐ろしい。

「いずれにしても、光っている マークが出てるといことは、お前はすでに傍観者ではいられないということだ」

リイが冷たく言い放つ。

「えっ? どういうこと?」

「つまり、お前は今のところ人間の力しかないのに、バトルエリアで戦いに参加するということだ。魔王様を狙う過激派の連中がさぞ喜ぶだろう」

(確かに・・・正室候補からキスをしてもらわないと魔王の力は覚醒しない。)

俺は何度も頭に刻み込んだこの設定を呪った。だが、気を取り直す。(死んでなるものか。)

「いや、それならリイ、お前が守ってくれるのだろう」

俺はリイの顔を見てそう言った。そうだ、この悪魔娘は、夏の護衛に来たのだ。

リイの顔が赤くなった。

「な、なぜ、私がお前を守らねばならない。私は御台様付きの護衛で、私の管轄は御台様のご主人である魔王様までだ。」

「そんなこと言わないで、助けてくれよ」

俺はリイに懇願した。もし、過激派に襲われてあのグールとかいう気持ちの悪い化け物と戦うことになったらと思うとぞっとする。ランジエにもらった武器は、女夏の首にぶら下がったペンダントだから、俺は完全丸腰ということになる。

「まあ、お前が私たちと行動を共にするなら、必然的に守ることはなるが」

リイがプイと目線を上に上げて独り言のようにつぶやいた。

「おお、リイ、お前、意外と優しいよなあ」

俺は思わず、この爆乳娘の手を取った。ますます、リイの奴、顔が赤くなる。

(あれ？リイって、こんなに可愛かったけ？)

まじまじとリイの顔を見る。

「わ・・・私に気安く触るな！」

リイは急いで手を離れた。(おいおい、この女とラブコメか?)

女夏がご馳走様・・・とつぶやいて自分の部屋に帰っていた。それにしても、俺のパートナー(正室)はいつたい誰でどこにいるのか？それが立松寺であることを祈って俺は眠れない夜を過ごした。単なる昼寝のし過ぎではあったが…

夏と側室戦争〜前編〜

翌朝、学校へ行く仕度をして家を出る。なぜか、町は白い霧で覆われている。そして何故か人がいない。ありえないぐらいの静寂さと薄い霧。いつも通るバスも電車もない。不安げな女夏の顔を見て、

（ここは俺が何とかしないといけないのかあ〜。）

と彼女の手を取って駆け出した。途中、霧の中に人影を見た。シルエットからよく知っている人物だと分かる。リイだ。彼女は仁王立ちで腕を組んでいた。いつものパツンパツンの制服ではない。戦闘用の赤いスーツだ。（超ミニスカでエロいことには変わらないが）

「御台様、男夏、どうやら、バトルエリアが展開されたようです」

「えっ？街全体に？」

女夏が尋ねる。

（そう、町全体にバトルエリア展開など普通ではない。可能性があるとするなら、あの儀式をやりやがった・・・）

リイが危惧したとおりであった。街の至るところから、魔界の下級魔グールどもが湧き出し、夏たちを追い立てる。無論、護衛のリイにとっては下級魔グールなど何十匹来てもすべて撃破していくが、数が多すぎる。しかも戦闘力があるのはリイだけで、男夏は拾った棒で殴りつける程度で1体のグールすら倒せないし、魔王を覚醒し、正室になったはずの女夏の戦闘力も0。悲鳴をあげるだけである。

（まずい・御台様の戦闘力は皆無。おそらく、3人分の魔王様を覚醒させる能力で精一杯なのだろう。男の方は平均的人間レベル。魔王に覚醒すればともかく、頼りにはならない。）

グール共に追い立てられるように学校の校門にたどり着いた。ここに案内されてきたという感じた。こういう感じがするときは大抵、この原因を作った奴が登場するものだ。

果たして・・校舎の屋上でスカートをはためかせた7人の女性が立っている。

「ファナ、使つたな、お前」

「ふふふ・・7人以上の側室で展開できる儀式セブンもはや、お前たちに逃げる場所はない。リイ・アスモデウスよ。前回は見逃してやったが今回はその正室と共にこの場で死ぬがいい」

「待て、ファナ。魔王様は覚醒した。もはや、側室戦争は終わりだ」
リイはこの状況を終わらせるためにわざとこの場に來たのだ。ファナに戦う意味がないことを教えれば、このバカげた状況を終わらせることができる。側室戦争のルールはあくまでも次期魔王が決まるまでの100日間である。決まってしまうえば、正室を倒そうが新側室を倒そうが意味はない。ファナはともかく、少なくとも他の旧側室たちは戦う意味を見出せないはずだ。

「はははっは・・。そんなことは分かっている。もはや、正室の地位や新側室の地位などに執着はせぬ。私たちはこのようなバカげた魔界の掟をすべて破壊する。次期、正室も側室も魔王も倒す。今がその時、いざ、下克上たらん」

ファナがロジエアールの槍を突き出し、屋上から跳びかかってきた。

「我らを守れ！イージスの盾」

光の盾がロジエアールの槍の穂先をはじく。ファナはクルクルと2回宙返りをして地面に降り立った。

「それでは、過激派と同じではないか。元側室として恥ずかしくないのか」

「ふん。20年も魔王様にお使いし、時期が来たから（ハイ、お終い）では、我々をいつたいたいなんだと思っっているのだ」

「狂ったかファナ！」

叫ぶリイを押さえて、毅然とした表情で女夏が前に出る。

「御台様、危ないです」

「いったいなんだと思っっているですって！バカを言うな！！あなたたち、前魔王様の側室でしょ。前魔王様は善政を行い、魔界の秩序を保ち、天界との争いを納めた名君と聞いたわ。その魔王様にお使えしたことを名誉に思いなさい。地位や名誉や富が欲しくて魔王様の側にはべったわけではないでしょう。魔王様が去ればあなたたちも去る。それが愛というものよ」

思わぬ女夏の言葉にあとの6人の側室たちは思わず、目を落とした。だが、

「わめくな！正室のお前などに側室たる我らの気持ちがあつてなるものか！」

ファナが魔法を唱える。3本の光の矢が放たれるが、リイのモーリイの盾に弾かれる。他の側室が戦わないのは女夏の言葉が心に突き

刺さっているのだが、セブンを展開された以上、彼女らが攻撃に転ずるのは時間の問題であった。リイは服の胸ボタンを一つ契り、握り締めて地面に拳を突きたてた。

「パニックフラッシュ!!」

ものすごい光が発せられる。ファナたちが目を開けたときには、3人の姿はいなくなっていた。ファナは逃げたであろう方向をにらみつぶやいた。

「ふん。無駄なことを……。セブンが展開された以上、もはや戦うしか道はないぞ」

「なあ、リイ、セブンって?」

俺はリイと女夏の後を駆けながら尋ねた。

「儀式魔法の一つだ。7人以上の側室が集まり、最後の決戦に臨むためのバトルエリアを展開する。通常のバトルエリアはせいぜい1時間ってところだが、セブンで展開されたエリアは人間たちの時間で77時間。エリアは7キロ四方に限定」

「逃れるには?」

「77時間逃げ続けるか、全部の側室を倒すか、先ほどの校舎の屋上にあると思われるセブンのクリスタルを破壊する。最後の方法は側室全部倒すということと同義だがな」

3人はビルの物陰に隠れる。グール共が徘徊し、不気味なうめき声をあげている。

「77時間も逃げきれぬのか？」

俺はつぶやいた。あの強いファナを含めて7人も倒せるとは思えない。この魔界の悪魔リイですら苦戦するのである。逃げるしか手はない。

「無理だな・・逃げきるのは」

リイが言う。グールをかわし、建物の中に隠れたところで見つかるのは時間の問題だと。ならば、戦うしかないが、現在のところ、戦えるのはリイのみ。

「新側室なら何とかできるだろうが、あとは魔王様・・」

「そうだ、ひかるちゃんや宗治が来てくれれば・・」

「暴虐の魔王様がいるのは7キロ四方外の山寺だ。そこには我々からはいけない。魔王様自身がこのエリア内に来てくれないと・・」

「魔界から援軍とか来ないのか？」

「無理だな・・」

「ああ、ランジェがいるじゃん。天界の奴ら、助けてくれる・・」

「わけがない・・。暴虐の魔王が覚醒したんだ。どちらかと言えば、あいつらは敵だといっていい。御台様と魔王様を滅殺するために動く」

「じゃあ、八方塞の絶体絶命じゃないか」

「そ・の・通・り・・見つけた!」

振り向くと魔界の戦闘服であろう真紅の胸当てに袴を身につけ、長い黒髪に白い鉢巻を巻いた女性が立っていた。左手には彼女の背丈を30cmほど超えた弓を携えている。

「側室NO・12。ナリタ・カイ。ファナには悪いけど、私が3人も殺しちゃう」

「12番程度の側室に私が倒せるか！」

リイが立ちふさがる。何やら唱えると右手に金色に輝くハンマーが現れる。

「アスモデウス家のご令嬢は気位が高いただけでなく、戦闘力もかなりのものだと聞いてはいますが、所詮、小娘に過ぎません。側室が・と見下したこと後悔させてあげます」

カイと名乗った黒髪の女性は、弓をきりきり・と引き絞ると空に向って打ち上げた。それは放物線を描いて5つに分離し、リイと俺、そして女夏の間突き刺さった。同時にものすごい炎が立ち上がる。俺はリイのすぐ後ろにいたからよかったが、少し離れていた女夏は炎の壁にふさがれて引き離されてしまった。

「み・御台様・」

「炎龍の矢ですわ。本来なら命中したものを焼き尽くすのですが、わざと外しました。その無力な正室様はグールどもに食われて惨めな最後をとげるといわ。グール共もまさか、魔王様の女を食べることができるといって、魔界がひっくり返りますわ・おーほっほほほ・。さあ、グール共、おいしい若い女の生肉を味わうがいい」

「逃げて！御台様」

炎の壁でどうにもできない俺たち。のたり・のたり・と集まってくるグール。歯をカチカチならし、汚い唾液を垂れ流して歩いてくる。女夏は恐怖で体が動かなかったが、リイの叫び声に反応し、グールが少ないところへ向って走った。グールの動きは鈍い。掴みかかるうとする手をかわし、ヨタヨタと走っていく。

それを見届けて少しだけ安心したリイだが、絶対絶命のピンチには変わりない。手にした黄金のハンマーの柄を握る手に力を込めた。

「あら、意外と走りますわね、あの正室様。早く逃げないと生きている時間が少なくなりそうですよ。私がこいつらを殺すまでの時間はそんなにありませんわよ。時間にして3分」

「バカにするな！食らえ、アースクエイク！！」

リイが地面にハンマーを打ち付ける。地面が揺れてカイがバランスを崩す。俺はその場に倒れる。倒れながらもリイがカイに急速接近する姿が見えた。

「弓使いなら、この近距離では攻撃できまい」

リイの右拳がカイの顔面を捉える・・・だが、カイは瞬間にいなかった。瞬間、リイの背後に弓を引き絞って現れる。そして、弓を放つ。赤い光がリイの背後に迫る。だが、リイも消えた。瞬時にカイの後ろに現れる。超高速移動だ。だが、カイは向きを変えもしないで、誰もいない空間に話しかけた。

「ムダですわ・・・」

リイの背後に先ほど放った弓が何故か現れ、リイの背中に刺さった。

「うっ・・・」

とうめいて膝をつくリイ。

「あなたたち上級悪魔と私たち魔王の側室は、身体的な戦闘力は互角かもしれない。特に12番程度にはね・・・」

カイの皮肉・・・そして笑みを浮かべると、

「決定的に違うのは持っているウエポンね。側室が持つウエポンは魔界の王を守るための武器。あなたの金色の金槌ではこんなことできないでしょう」

そう言うとカイは右や左、空に向って弓を放つ。まったくどこを狙って・・・。

俺は目をこすった。3方向に放った矢が、リイの右腕、左腕、左モモに突き刺さったではないか・・・。

(どういう弾道で矢が刺さったんだ?)

「あああああ・・・っ」

苦痛に叫び声を上げ、その場に崩れるリイ。血しぶきが飛び散る。

(悪魔の血も赤い)

「リイ・・・」

俺は体を起して獣のようにリイに向って駆けた。彼女の肩を持つ。目をしかめながらもリイの瞳はまだ戦う意思を失ってなかった。

「男夏、早く逃げる・・・お前も殺されるぞ・・・」

「リイを放っておいては逃げられないよ」

「ふん・・・格好つけるな。私は奴に抱きついて自爆する。誇り高き貴族は自決用にこれがあるからな・・・」

そう言っつてリイは耳に手をやり、ピアスを外した。赤い宝石が付い

ている。

デビルクラッシュ・・・戦う相手を道連れにする武器だ。

「だめだ・・・リイ！！」

俺が叫ぶまもなく、リイは一挙即跳びかかり、カイの袴のすそを掴んだ。

「お前も終わりだ！デビル・・・クラッシュ・・・」

リイが叫ぶか叫ばないかのタイミングで宝石を握り締めた右手を蹴り飛ばされた。魔法が成立しなかった赤いピアスが光りながら、遠くの方へ落ちていく。

「カイ、気をつける。上級悪魔にはそれがある」

「デビルクラッシュ・・・貴族の誇りを守るための最後の技。助かりましたわ、クリュシュナ・・・」

現れたのは褐色の肌にエキゾチックな目をした（顔はかくして目だけが出ている）美女？がそこに立っていた。顔をかくしているわりに今にもベリーダンスを踊ってくれそうなきわどい衣装でへそがとてもセクシーである。

「No.10のクリュシュナ・バイイと申します。まあ、名前を聞いたところでムダでしょうが・・・」

「う・・・、2人目の側室・・・」

リイは万事休すだと観念した。もはや勝つ見込みも脱出する見込みも自決する見込みも失われた。その魔王候補の男も救えない。

「私を殺そうなんて許せませんわ。貴族のお嬢様にこれ以上ない恥辱を味わわせてから、殺してあげます」

カイは持っている弓の先でリイの大きい胸を突つづいた。そして引っかけるようにして胸を覆っていたボンテージの服からぼろりと右胸を露出させた。

「カイ、早くしないとファナ様が来てしまいますわ」

クリュシュナがカイをせかす。彼女は両手に似つかわしくない大きな円月刀を持っている。

カイは弓を静かに引き絞った。

(リイが殺されてしまう・・・)

俺は目を閉じることしかできなかった。涙が両頬を伝う。

「リイ〜イイイイイ」

その時だ。ザシュツ・・・という地面を踏む音と、甲高い声が俺の目を開かせた。

「ファナじゃないよ！ひかるだよ！」

新堂ひかる・・・女夏が覚醒させた新側室NO.8が立っていた。

「ひ・・・ひかるちゃん・・・？」

俺が最後に会ったのは、あの添い寝の時だ。彼女の生々しい肉体が

脳裏に過ぎる。

(おいおい、そんな場合じゃないだろう！)

「いでよ！ハルパー！！」

ひかるが叫ぶと黄金に光る半月刀が左手に現れる。

「くっ！新側室か！撃ち抜け！余市の弓」

だが、ひかるの方が速かった。弓の弦が離れるよりも速く、ひかるはカイを一撃で仕留めた。

「スレイプニル・・・滑るようにして走る者・・・私の必殺技よ」

「お前が・・・メディアをやった・・・奴か・・・」

そうつぶやき、カイは、バタリ・・・と倒れた。

「よくもカイを・・・」

クリュシュナが両手の武器を構える。ひかるはクリュシュナに向き直る。そして、俺に向って叫んだ。

「夏兄様、時間がかかりそうです。リイさんを連れて逃げてください」

ひかるは理解していた。自分の技は最初の一撃が勝負。スレイプニルカイのように攻撃してくれば、ほぼ一撃で仕留められる。例え、自分より上位の側室だろうとだ。だが、最初に防御から入られたらこの技は防

がれる。ましてや、クリュシユナはカイがやられるの見ている。同じ手は通じない。通常の側室同士の戦いなら、長時間の戦いは避けられない。実力が伯仲しているならなおさら・・・彼女は10番、勝てないことはないけれど・・・。

ひかるはリイを抱きかかえて逃げる男夏を見て、微笑んだ。

（少しの辛抱よ、お兄様、お姉さま。ひかるが守ってあげますから・・・）

クリュシユナの斬撃をかわし、ひかるは舌を出して上唇をちろつと舐めた。

女夏は走った。道にうようよいるグールたちをかわす。動きが遅いが狭いところに追い詰められれば、終わりだ。パーティで襲われた時も最後には屋上へ追い詰められた。あの時は宗治が助けてくれたが、今はこのただ広い空間に自分しかないような状況である。

（助けて・・・誰か助けて・・・）

心の中で叫ぶ。交差点に出た。右はグール共でいっぱい、正面はなぜか壁がある。左は車道にはグールであふれかえっているが、右側の歩道はさほどでもない。歩道橋があるから、車道をまたいで歩道に抜けられそうだが、狭い歩道橋に上ったことは致命的だった。下からは見えなかったが、倒れていたグールが2匹、起きあがり、女夏の行く手をさえぎった。上ってきた階段はもはやグールが追ってきていて戻ることすらできない。完全に挟み撃ちにされた。

（私はここで死ぬの??）

足がすくんで動けない。魔王となった宗治の顔が浮かんだ。そして、

幼馴染の隆介、自分を守ってくれと言ってくれた元馬・

「助けてよ・・・助けてよ・・・元馬くん！」

その時だ！

「うるうあああああー！」

ものすごい叫び声とともに、目の前のグール2匹が吹き飛んだ。目の前に拳を突き出した、源元馬がいる。両手に5色の宝石がはめ込まれた手袋をしている。

「夏・・・無事か・・・」

「元馬くん・・・」

思わず夏は元魔の懐に飛び込んだ。ぐいと抱きしめる元馬。だが、のそりのそりと近づいてくる足音が聞こえてくる。

「ラブシーンお預けかな。夏、走るぞ！」

元馬は立ちはだかるグールを殴り飛ばし、道を作ると夏の手を取り走り出した。200mほど走ったが、夏の息が荒い。休まないと走れそうにない。元馬は道路右脇にクルマのディーラーがあるのを見つけた。広いショーウィンドーに大きなミニヴァンが飾ってある。ガラスの自動ドアが開く。入ると元馬はすぐさま、カウンター隅の電源BOXを開き電気を落とした。バイトで清掃していたと時の知識だ。自動ドアのガラスを拭いた経験が役にたった。ドアが開かないのでグールたちは店に入ってこれない。だが、大きなガラスのショーウィンドーで外から丸見えだ。大きなミニヴァンの後ろドアを開けて中に入り、ドアを閉めた。寝転べば姿が見ない。これでグー

ルたちをやり過ぎせる。

倒したシートで抱き合って隠れる2人。夏は目を閉じて元馬の心臓の音を聞いた。ドクンドクンという激しい音。自分の荒い呼吸と合っている。やがて、夏の呼吸が落ち着くにつれて、元馬の心臓の音も緩やかになった。

「大丈夫か・夏」

「大丈夫・あ・ありがとう・助けてくれて」

「当たり前だろう・っと言いたいところだけど、これがなければ助けられなかった」

そう言つて両手の手袋を見せてくれた。甲に5色の宝石がはまつていて、指の先端が出ている。素材は革のようで革じゃない思ったよりも硬い。

「あの英語教師ドミトルが持ってきたんだけど、気味が悪かったが持っていてよかった。夏を助けるには必要だとか何とかいってたので、もしかやと思つただけ」

「ドミトル先生が・」

あの魔界の伯爵である。夏のことを狙っていたのにいったいどういう見かだろつか。

「朝起きたら霧で人っ子一人いなくて焦ったぜ。そのうち、あの黒い化け物が現れて襲つてきやがるから、試しにこのグローブをはめてなぐつたら、殴られた奴は面白いように消えていくんだ。それで夏のことを気になつて君の家に向つたら悲鳴が聞こえて、夏だった。」

元馬ぐつと夏を抱きしめる。

「よかった、無事で」

「ああ・・・元馬くん・・・」

夏も元馬の胸に顔を埋める。キュツと元馬の背中に手を回した。そして、元馬に魔王のこと、自分のこと、側室戦争のことを話した。元馬は黙って聞いた。

「ごめんなさい・・・あなたを巻き込んでしまって・・・」

「いや、むしろ、俺はうれしいよ。俺は魔王であってうれしい。それは、夏、君と一生暮らせるといことだろう」

夏はハツとなった。一生元馬と暮らす・・・いや、彼に自分は重要なことを話してなかった、意図的ではなかったが、自分の中に元馬に知られたくないという気持ちが強くなったのだ。そう、夏は宗治を選び、彼を魔王として覚醒させたのだ。そして、その魔王と契った。元馬を裏切っている自分に気づいたのだ。

(こんな風に元馬くんに愛される資格は私にはない。)

そう思うと涙があふれ、頬を伝う。急に泣き出した夏に元馬は驚いた。

「どうして泣く、泣かないでくれ」

「わたし・・・私・・・元馬くんに愛される資格ない。元馬くんに助けられる資格もない」

「何、言ってるんだ、夏」

(私・・・悲しい・・・どうして悲しいの・・・宗治先輩を夫に選んだから・・・でも、そのことは後悔していない。宗治先輩も好き・・・なの

にどうして、元馬くんのことも好きなの・・・)

涙がどんどんあふれてくる。ただ一人の人を愛せないなんて、自分
は不幸なんだろうか。それとも、これが魔王のヨメの宿命なのであ
ろうか。

夏はぼつり、ぼつり・・・と語り始めた。宗治のこと、そして元馬
と同様に思っている隆介のこと・・・。元馬は黙って聞いている。

ぐったりとしたリイを抱きかかえた俺(男夏)は、追ってくるグ
ール共から逃げ、何とか小学校の校舎に逃げ込んだ。グールたちが
数匹うろついていたが、中は教室も多く、校舎内に入り込めば見づ
かりにくい。保健準備室と書かれた小部屋のドアが開いており、そ
こに滑り込むと内カギをかけた。これでしばらくは大丈夫。12畳
ほどの空間に保健室で使う様々な備品が並んでいる。俺はリイの背
中に突き刺さったままの矢を抜かなければ・・・と思ったが肉が締ま
り、容易に抜けそうにないようだ。両腕とモモに刺さった矢はいつ
の間にか抜け、傷口から血が流れ続けていたから、すぐさま準備室
にあった引き出しからタオルを取り出し、傷口を押さえた。

「背中のは切らないと抜けないだろう」

リイが苦しそうにそう言う。(俺に切れ！って言うのか・・・)だが、
彼女のためだ。こう弱っているとあの強大な悪魔というより、か弱
い一人の女子に見えるから不思議だ。

俺は引き出しの中からメスを探しだすと、それにオキシドールをた
っぷりとかけて、リイの口に丸めたタオルを加えさせた。

「リイ、痛むけど、ガマンして」

「早くやれ・・・」

俺は恐怖におののきながら、ゲールから逃げているシーンを想像したから、ちよつと腹が立った。それに比べて、こちらはこの高慢な女悪魔と二人つきりで……。俺も鏡をのぞかれていたら、リイと二人壁にもたれかかり、何故か成り行きでリイの肩に右手をかけている姿を見られているだろう。リイも気づいていないのかそれを許している。こんな姿をもし、彼女、立松寺に見られたら……。

(うおおおっ！誤解だ、誤解です、立松寺さま。こんな高慢で乱暴で、勝手気ままのドS悪魔に手はだしませんって……。)

でも、鏡を真剣に見ているリイは、そんな強いイメージがしてこない。痛々しい、か弱い女の子がそこに座っている。

(や・・まずい。確かによく見れば可愛いところもあるが・・リイはないわ・・ない?)

「ああ・・まずい。御台様の心が低下していく……。」

鏡を見ていたリイが悲鳴をあげる。鏡の青い光が一つ一つ消えていく。元馬の思い100に対して夏の思いは80・・70・・65・・と低下していつているのだ。

「御台様は元馬に対する思いを捨て去ろうとしている……だめだ。今の状況ではまずい」

元馬と一緒にいて、最初は安心したリイであったが、この第2の魔王候補を覚醒させずに分かれるなんて、今の状況では望ましい方向ではない。どちらかといえば、覚醒させてしまった方がいい。魔王として復活すれば、夏のことを守ってくれるはずだ。でも、リイも涙をとめどなく流しながらにやら話している夏の姿を見て(鏡は

映像だけで音は流してくれない。だって、スピーカー付いてないから（それは冗談）

「御台様の気持ちを考えれば、それも致し方ないのかもしれないが」「はあ・・女の子って、やっぱり、一人の人しか愛せないのか？男とは違うのかな」

ぼつり・・とつぶやく俺。鏡の中の女夏は、きつと宗治との仲を告白しているに違いない。自分の気持ちを抑えて元馬と別れるために。

「ふん。男とは違うさ。魔王様みたいに正室を愛しながら、片方は側室を何人も困っているなんて、失礼ながら男だからできる芸当だ。おまえもそうだろう」

「いや、俺は違う！俺は立松寺一筋で・・」

リーの肩にかけた右手を見て、俺は自分を呪った。いや、これはリイがケガをして弱っていたので励まそうとしただけで。（俺も魔王候補ということは、好色の才能があるのか？）

「ああつ・・話し終わったようだぞ！」

泣きじゃくりながらも元馬に話していた夏の唇が動かなくなった。おそらく、現場は氷のように冷たく、そして時が重苦しく流れているはずだ。元馬が「さよなら・・」と言って夏の体を突き放して、ミニヴァンのドアを開いて出て行く姿が目に見えた。

青い光が50・・40・・と少なくなる。女夏は心の中であきらめていくのが分かった。

だが、左の赤い光は消えていかない！なおもそれどころか、輝いている。

「こ……これは……」

リイが大きな声を部屋中に響かせた。

「これが、奇跡というものか……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2867y/>

魔王様と16人のヨメ物語 ~ 覚醒モード ~

2011年11月22日02時52分発行